工-3J-37
40-835

文學士淺野和三郎著

英國詩學史

附錄 米國文學史韻律法
英詩之種類及韻律法

大日本圖書株式會社

明治
40 3 2
交付

序

英文學の或る特殊なる方面の開拓を試むるに先立ち、少しく綿密に其大觀をうかゞはばや、而して其副産物として、邦人の見地よりものせる一卷の英文學史を編せばやと、思ひ立ちしは余が大學在學中のことにして、指をかゞなうれば、約八年のむかしなりき。八年といへば人の一生の中にありて決して短少の日月にあらず、その間には無論さまゞの故障くさぐさの頓挫に會せり。就中三十三年の初めに帝都を去りし一事は、この事業に少なからぬ不便を與へ、就きて讀むべき圖書館と、行きてはかるべき師友とに離れたる身は、さながら魚の水を離れ、鳥の翼を失ひし心地して、一時は茫として途方に暮れけるが、一坦起したる志の中途に止むべきにあらねば、心を勵

まして、微力の及ぶ限り、先づ書物の蒐聚につとめつ。かくて讀みては書き、書きては査べ、徐ろに一作家を送り、一時代を濟ませつゝありけるに、いつしか思ひの外に日月を重ね、最初兩三年と豫期せしものが、やがて四年となり五年となり、七年となり、昨三十八年の春、日本海々戰に先立てる頃迄に漸くヴィクトリア朝に迄りつき居たりき。

今しばしと、はやる心を制しつゝありける折に、或る事情の爲めに急に開始されたるは、戸澤姑射との共同事業なる沙翁全集の飜譯なりき。元より足らぬ勝ちなる餘暇をぬすみての業にしあれば、文學史のみにても双肩にあまるを覺えたるに、更にこの大難物を抱へたる去年の余はほと〳〵奔命に疲れ、休暇を廢し、睡眠の時間を割きて『ヴェニスの商人』一篇丈は辛

くも去年の大晦日の夜半迄に譯し了りしが、かくてはかれにも力を入れ難く、又これにも心を專にする能はず、到底長くその負擔に堪へ難く覺えしかば、今年の正月よりは、意を決して專ら文學史に當り、年來書きあつめたる原稿の整理をはじめたるに、むかし書きたるは意に充たざるが多く、且つ概して分量多きに過ぎて一卷となすに適せねば、幾度か筆をとゞめて改作又割愛、拮据爰に十閱月にして漸くかばかりの一冊子とはなし得たり。かくても尙ほ不調和、不整理の個所は少なからざるべく、そは切に大方諸賢の指教を仰がずんばあらず。余も亦力を盡して誓つて修正に從ふべし。

本書の完成に關しては、余は特に同窓大谷正信氏の高誼に謝せざるべからず。最初本書は同氏との共著たるべかりしが、

余等が大學卒業の後幾もなくして東西に分れ、會合商量の機失せたるを見、氏は余をして獨力之に當らしめ、而して氏自身は米國文學史を擔當せらるゝことゝなりぬ。されば本書の成れるは、一は大谷氏の賜といはむも不可なき也、卷末に附錄とせる余の米國文學史の如きは、急忙の際に成りたるものにして、研鑽足らず、單に英文學をきはめんものゝ一時の參考として強いて附加せるのみ。之に對する遺憾は大谷氏の著の出でんを待ちてのぞかるべき也。尙ほこの數年の間に、直接又は間接に助力を與へられたる芳賀矢一氏、島文次郎氏、畔柳都太郎氏、戸澤正保氏、飯田御世吉郎氏、豐島定氏等の厚意を深謝す。

明治三十九年十月十五日　　著者識

小引

一　每篇若くは每章の終りに附したる「研究書目」は余自身書物蒐聚の目的もて隨時書きとゞめしもの也。元來人に示さんとて作りしものにあらねば、遺漏も少なからねど、本邦の英文學研究者には直ちに必要あるべきを思ひて附記することゝせり。足らざる點は研究者に於て增補せられんことを乞ふ。

一　固有名詞の假字は成るべく正音に從はんことを期したれど、平生呼びなれて、日本流となれるはそのまゝにしたり。「ヴィクトーリヤ」とせずして「ヴクトリア」とせるが如きは其一例也。但し中には余の思ひ違ひ又誤植等もひそみたるべきか。思ひ當るにつれて嚴密に校訂すべし。

一　頭欄にのせたる書物の原語には、屢々冠詞を脫したり。そは單に印刷上の都合にて他意あるにあらざる也。見む人その心してよ。

英文學史目次

總論……一

國民と文學――アングロ、サキソン種族の特色――その英文學に與へたる影響――佛文學との比較――ケルト種族の特色――その英文學に與へたる影響――デーン人とノルマン人――時代と文學――個性と文學

第一篇　アングロ・サキソン時代……一三

此時代の概觀――最古の英詩――ビーオウルフ――その價値――耶蘇教傳播と英文學――耶蘇教傳播以後の詩――ケドモン――キヂウルフ――散文の遠祖ビード――デーン人の入寇――アルフレッド王と英國散文――アルフレッドの崩後――(研究書目)

第二篇　ノルマン時代……三四

此時代の概觀――宗教の詩歌――物語の詩歌――ヂェフリイ・オブ・モンマス――ラァヤモン其他――『アーサー王物語』――『シャーレメーン物語』――『歴山大王物語』――『トロイ城の圍』――『ホルン王物語』――『七賢人物語』――『ゲスタ・ロマノール』――『ロビン・フッド』――『郭公の歌』――(研究書目)――俚歌俗謠――

第三篇　チョーサー時代……五三

チローサー時代の概觀——詩壇の先驅者——チローサー——その閲歷——第一期の作——第二期の作——『カンタベリィ物語』——ラングランド——ゴワー——散文——ウィクリッフの聖書譯——トレヴィサの『ポリクロニーコン』譯其他——(研究書目)……八六

第四篇　中世の末期

此時代の概觀——十五世紀の詩壇オックリーヴ——リドゲート——十五世紀の散文——ヒーコック——キャプグレーヴ——マロリィの『アーサー物語』——散文の發達——モーアの『ユートピア』——ティンダルの聖書譯——パーナーズ其他の作者——詩壇の新聲——ワイアット——サリィ——蘇國の詩壇——バラプル——ハリィ——ヂェームス一世——ヘンリスン——ダンバー——ダグラス——リンヂィ——(研究書目)……一一五

第五篇　エリサベス朝

此時代の概觀……一二一

大文學興隆の原因——宗教の統一——大敵の滅亡——民福の增進——生活の華美——意氣の豪壯——各方面の大飛躍

(一)抒情詩……一三三

エリザ朝と抒情詩——發音の緩出——田園詩の時代——ソンヂット時代——歌謠の時代——(研究書目)

(二)長篇の詩歌……

スペンサーの經歷——『神女王』——スペンサー以前の詩人——スペンサー時代及び其以後——(研究書目)……一五二

(三)散文……

エリザベス朝初期の散文——盛期の散文——物語類——教訓的物語——リィリィ——田園的物語——シドニィ——冒險的物語——ナッシ——グリーン——宗教、哲學、歷史、批評、其他實用的散文——(研究書目)……一七〇

(四)沙翁以前の劇壇……

戲曲の發生——宗教劇——教訓劇——道化劇——正劇の第一期——正劇の第二期——大學七才人——マァロー——其傑作——リィリィ——キッド——グリーン——(研究書目)……一八四

(五)沙翁……

沙翁の經歷——その第一期——第二期——第三期——第四期——沙翁の劇詩目錄——沙翁の偉大——(研究書目)……一九九

(六)沙翁以後の劇壇……

ジョンスン——その特質——劇壇の墮落——ボーモント——フレッチャー——二家の長短——チャプマン——ウェブスター——マァストン——トールナー——ヘーウッド——ミッドルトン——マッシンヂャー——フォード——シャーリィ——其他——(研究書目)

第六篇　內亂時代

此時代の概觀……二一五
内亂時代の文學の牛面——此時代と前時代の文學の差——沙翁とミルトンとの比較
(一)抒情詩……二一八
此時代の抒情詩の特質——ヘリック——カルー——クラッショー——其他——(研究書目)
(二)ミルトン……二二五
ミルトンの經歷——ミルトンの準備期——『快活の人』——『沈思の人』——ミルトンの論爭時代——ミルトンの大作時代——『失樂園』——其他——(研究書目)
(三)散文……二三七
史論——クラレンドン——メー——フラー——宗教哲學家——テーロル——ホップス——雜文家——ブラウン——バァートン——ブリン——ウォルトンの『釣魚家』——バンヤンの『天路歷程』其他——(研究書目)

第七篇　王政復古時代

此時代の概觀……二四五
此時代は大過渡期也——佛國文學の影響——創造力の缺乏——形式の重視——クラシカルとロマンティックとの差——淫蕩野卑の性質
(一)ドライデン及び其時代の詩壇……二五四
ドライデンの生涯——その諸作——詩人としてのドライデン——他の方面に於けるドライデン——ドライデンの時代の詩人——ウォルラー——カウリィ——デナム——パトラ——その他——(研究書目)
(二)散文……二六二
政治及宗教の散文——ディロットスン其他——フィルマー其他——ロッケ——雜著家——エヴェリン——テムプル其他——(研究書目)
(三)戲曲……二六五
ドライデン——オットウエー——コングリーヴ——ファークヮー——ヴァンブルー——劇壇の衰頽——スティール——アディスン——ゴールドスミス——シェリダン其他——(研究書目)

第八篇　ポープ時代

此時代の概觀……二七四
擬古文學の盛期——熱派的文學——批評、常識の發達——詩歌の束縛——散文の發達
(一)ポープ及び其時代の詩壇……二七八
ポープ——その性行履歷——その傑作——『髮ぬすみ』——『イリアド』譯——『ダンシアド』——『人間論』——ポープと其時世——ポープ時代の小詩人——ブライオル——グー——パーチル——(研究書目)
(二)アディスン、スティールの散文……二九一

定期刊行物の勃興――スティール――その人物――アディスン――その人物――その傑作――（研究書目）

（三）哲學、宗教其他の散文家……三〇〇

バークリィ――その作品――クラァーク――シャフツベリィ――マンデヴィル――（研究書目）

（四）小說發生の徑路……三〇四

韻文の物語――『アーサー物語』――十八世紀以前の物語の特質――『人物』――『善惡報質』――『サー・ローヂャー』――（研究書目）

（五）小說界の先驅……三〇九

デフォー――その前半生――六十以後のデフォー――その物語――その作風――『ロビンスン・クルーソー』――スウィフト――その人物――その諷刺的文字――その作風――『ガリヴァー巡島記』――（研究書目）

（六）小說の大成……三一九

小說大成の二大家――リチャルドスン――その特長――『パミーラ』――『クラリッサ・ハァロー』――『サー・チャールズ・グランディスン』――フィールディング――その人物――『ヨーセフ・アンドリューズ』――『トム・ヂョーンズ』――『アミーリア』――フィールディングの功績――（研究書目）

第九篇　革命時代

此時代の概觀……三五四

時代精神の變動――情熱の發生――政治界の理想の變動――民主精神の普及――新舊兩派の並立――ロマンティック派の最後の勝利

（一）ジョンスンとゴールドスミス……三六二

ジョンスン――その性行――その雜著――『詩人傳』――ボズウェル――その『ジョンスン傳』――ゴールドスミス――その性行――『旅客』――『ヴィカー物語』――『好人物』――『負けるが勝』――『寒村行』――ゴールドスミスの作風――（研究書目）

（二）十八世紀後半の散文……三七八

ギボン――『羅馬帝國衰亡史』――バァーク――『佛蘭西革命論』――ユーム――アダム・スミス――ウェスリィ――其他――書簡文――チェスターフィールド――ウォルポール――其他――（研究書目）

（三）十八世紀後半の小說界……三九二

新舊の二派――スモレット――その作風――スターン――其作風――其他の舊派作家――舊派の長短――『オートラント城』――ラドクリッフ夫人の諸作――ルーイス――マッーリン――革命派の諸作――新派の長短――（研究書目）

（四）第一期の新派詩人……四〇九

自然界との接近――トムスン――コリンズ――グレー――その他の小詩人――（研究書目）

（五）第二期の新派詩人……四一六

ペーシィの編纂――『英詩遺物』――マクファースンの『オシアン』――チャッタートンの偽作――此時期の四大詩人――グレー――クラブ――ブレーキ――バルンズ――其傑作――（研究書目）

（六）湖畔詩人……四三一

詩風革新の大成――ウォーズウォース――其生涯――其萬有教――その作品――コールリッヂ――その性行――その評論文――其詩――其感化力――サウジィ――その詩――その散文――スコット――其詩人としての生涯――その詩――その詩人としての資格――（研究書目）

（七）魔派詩人……四六七

魔派詩人と其時世――其名稱の起源――バイロン――その前半生及び當時の作品――其後半生及び作品――バイロンに對する評論――シェリィ――その長詩――その劇詩――その抒情詩――キーツ――その性情――キーツの作風――その長篇――その物語體長篇――その抒情的小詩――（研究書目）

（八）十九世紀初期小詩人……五〇六

ムーア――その歌謠――その長篇――キャメル――その傑作――ランドル――フッド――ローチャーズ――ハント――ホッグ――（研究書目）

（九）十九世紀初期の散文……五一六

各種の雜誌の勃興――ラム――その作品――ハズリット――その評論――デクインシィ――その經歷――その傑作――その特質ウィルスン――ロックハルト――その『スコット傳』――リー・ハント――ランドル――（研究書目）

（十）オースステン其他女流小說家……五三七

十八世紀小說と十九世紀小說との連鎖――オースステン――その天才――バーニィ――エッヂウォース――その他の女作家――（研究書目）

（十一）歷史小說家スコット……五四五

小說家としてのスコット――小說家としての位地――その小說の特質――カーライルのスコット評――その傑作――第一期――第二期――第三期――（研究書目）

（十二）リットン其他の小說家……五六一

リットン――その作品――物語小說――歷史小說――寫實小說――怪異小說――リットンの長所と短所――ディスレーリ――リーヴァー――マァリアット――その作風――マイケル・スコット――（研究書目）

第十篇　ヴィクトリヤ朝

此時代の概觀……五八四

前時代の文學との比較――民主的精神の發展――科學の進步――その外界に與へたる影響――その思想界に與へたる影響――過渡期の文學

（一）スニスンとブラウニング……五九三

前時代の詩人との比較——テニスン——その經歷——その長所——技術の精妙——時代精神の代表——ブラウニング——その經歷——その特質——テニスンとの比較——劇詩——短詩——長篇——(研究書目)

(二)ロセッティとスウィンバァーン……六三一

ラファエル前派——ロセッティ——その生涯——其特質——バラド體——『天上の佳姫』——『シスター・ヘレン』其他——ソンネット集——抒情詩——スウィンバァーン——その詩人としての貢献——其大作——(研究書目)

(三)其他の詩人……六五九

アーノルド——その特質——フィッヂェラルド——『オーマァ・カイヤームの四行詩』——メレディス——その作風——トムスン——クラフ——モリス——オーショネシィ——パットモーア——ブラウニング夫人——ロセッティ孃——(研究書目)

(四)マコーリィ、カーライル、ラスキン……六九二

マコーリィ——其生涯——其文章——評論——『英國史』——カーライル——其出身——評論——史筆——カーライルの天職——ラスキン——その經歷——前期——後期——その文章——(研究書目)

(五)其他の散文家……七三八

史筆——フルード——その『英國史』——其他——フリーマン——グリーン——キングレーキ——其他の史家——哲學、科學、宗教等の散文——ミル其他——スペンサー——ティンダル——ハックスリィ——ダァーウィン——ニューマン——文藝の評論——アーノルド——ペートター——シモンズ——ボロー——(研究書目)

(六)ディケンスとサッカリィ……七六一

小説界の概觀——ディケンス——其經歷——『ピグウィック』——『アーヴィッド・コッパフィールド』——其他の諸作——ディケンスの性行——サッカリィ——初期の作——『ヴァニティ・フェーア』——其他の大作——ディケンスとサッカリィとの比較——(研究書目)

(七)小説界の三閨秀……八〇〇

ブロンテ——その經歷——その作風——ギャスケル——其傑作——エリオット——その奇妙なる閲歷——前期——後期——(研究書目)

(八)其他の小説家……八二一

キングスリィ——トロラップ——リード——コリンズ——スティヴンスン——其作風——其文體——メレディス——(研究書目)

(九)最近英國文壇……八三九

詩歌——オースティン——アーノルド——ロォトスン——フィリップス——ヘンリィ——其他——小説——キップリング——ハァーディ——ペサント——アルレン——ロード——其他——散文——スティーヴン——ゴス——ガァーチット——ダウデン——セーンツベリィ——ブルック——リー——其他——(研究書目)

附錄目次

〔米國文學史〕

總論……一

米國文學の範圍――その英文學との關係――その特色――植民地文學との比較――時代の區劃

第一章　植民時代……四

代表的植民地――ヴァージニア――マサチューセッツ――中部植民地――フランクリン――其著作と人物――(研究書目)

第二章　革命時代……一三

此時代の概觀――散文――小說――詩歌――(研究書目)

第三章　近代

此時代の概觀……一九

米國の獨立と文學の關係――中部、北部、南部、西部の代表者――近代米國文學の目標

(一)アーヴィングとクーパー……二一

アーヴィング――その經歷――英國滯在――西班牙滯在――その後――その作風――クーパー――その經歷――その作の種類――その長短――(研究書目)

(二)ホーソルンとポー……三六

ホーソルン――其經歷――其作風――其短篇――其長篇――ポー――其奇行閲歷――その論文――其物語――その詩歌――(研究書目)

(三)其他の小說家……五四

ハルト――ザエームズ――ホウエルズ――メルヴィル――オールドリッチ――フォーセット――デューエット女史――デミング――クローフォード――ハリス――ケーブル――クラドック――ストウ夫人――パァーチット女史――ワード――トウエーン――(研究書目)

(四)ブライアント、ロングフェロー、ホイッティアー……七二

ブライアント――其作風――ロングフェロー――その傑作――其作風――ホイッティアー――その作風――(研究書目)

(五)其他の詩人……八四

テーロル――ホイットマン――ストッダァード――ステッドマン――ミラー――(研究書目)

(六)エマースン……九〇

エマースンの經歷――講演者として――論文家として――エマースンの詩――(研究書目)

(七)ローエルとホームズ……九八
ローエル——その散文——ホームズ——その詩——その散文——(研究書目)
(八)其他の散文家……一〇五
史傳——パン・グロフト——プレスコット——モットリィ——バークマン——能辯家——ウェブスター——フィスク——ファーナー——ヘルン——その經歷——その作品——(研究書目)

〔英詩の種類及韻律法〕

上　英詩の種類
(一)叙事詩……一
(二)抒情詩……一〇
(三)劇詩……一七

下篇　英詩の韻律法
(一)アングロ・サキソン時代の韻律法……二六
(二)過渡時代の韻律法……二八
(三)近代の韻律法……三〇
英文學史索引……一一

英文學史

文學士　淺野和三郎著

總論

國民と文學——アングロ・サキソン種族の特色——その英文學に與へたる影響——佛文學との比較——ケルト種族の特色——その英文學に與へたる影響——デーン人とノルマン人——時代と文學——個性と文學

余は英文學の細說に入るに先んじ、先づ其大體の特質を述べんとす。何となれば一國の文學は、其國民特有の性質を有すれば也。蓋し文學者は多くの場合に於て國民の代表者なり。他の一般の人士の、心に思ひて口に發する能はざる事を遺憾なく發露し得るは詩人也。全國の人民が同樣に受くる所の經驗閱歷を

國民と文學

文學と國民の性質との關係は意外に大也

(1)Anglo-Saxons.
(2)Britons.
(3)Danes.
(4)Normans.
(5)Low German Tribes.
(6)Elbe.
(7)Denmark.
(8)Jutes.

アングロ・サキソンの原住所

自由に驅使する者は文士也。かくの如くにして、文學と國民との關係は、普通人の預想以上に深大なるものあり。兩者の關係は、文學研究者の須臾も看過すべからざる點なりとす。

そもそも今日の英國人は、多數種族の混淆より成立せるもの也。即ちアングロ・サキソン種族を初めとし、[1]ブリトン人、[2]デーン人、[3]ノルマン人等の血液を混ふ。是等の中最も多數にして、

アングロ・サキソン種族の特色

今日の英國民の根底を形成せるは言ふ迄もなくアングロ・サキソン是也。彼等は元[5]低地獨逸族の一部にして、近代の和蘭人と關係最も深し。其最初の根據地は和蘭の北部に當れる[6]エルベ河口、さてはデンマルク附近に存在しき。地方によりて或はアングルズと稱し、或は又[8]ヂューッと稱せしが、何れも血液の上より見れば同一にして、共通の言語を使用し居たりき。より概括して之をアングロ・サキソンとは呼ぶ也。そもアングロ・サキソンの根據地たりし是等の地方は、一帶の低地にして、到所泥洲

アングロ・サキソンは天然の總兒也

天然の人類に及ぼす影響

荒澤に充ち、河流停滯して山野に横溢したれば、從つて水蒸氣極めて多く、密雲長へに空を蔽ふて、快晴の日極めて稀に、時々沛然たる猛雨を降すが故に、植物は彌が上に蔓りて密樹欝林その盡くる所を知らず。就中すざまじきは其沿海なり。山の如き波浪は怒號する北風に驅られて、慕地内地に向つて吶喊するが故に、其沿岸は次第々々に侵蝕せらるゝのみ。この雲霧やこの波濤や、到底共に戰ふべくして共に親むべきにあらず。アングロ・サキソンは徹頭徹尾天然の繼兒也。而して彼等の特質は、實に天然との苦戰奮鬪の間に養成せられたり。彼等は彼等が仰げる大空の常に慘憺として悲めるが如く沈痛にして、毫も輕姚浮華の態なく、最も宗教心に富み、死の觀念は常に其念頭を去らざりき。彼等は彼等の住める山野の殺風景なるが如く、素朴凶猛にして、暴飲暴食を喜び、甚だしく審美的性情には缺けたり。彼等は彼等の戰ふべき海浪の四時に亘りて怒號止まざるが如く、飽まで強大不撓なる忍耐力を具へたり。且つ彼等は外界に

英國も又經營力作を要する寒地也

出て天然と共に樂み、天然の懷裡に心を安うして眠る能はざるが故に、重きを人倫の關係に置き、慰藉を家庭の內部に求め、從つて相互の義務、君臣の關係、夫婦の愛情等、倫理的の觀念は他の野蠻人の間には見るべからざるまで發達し居たりき。やがて五世紀の中葉に及び、是等アングロ・サキソン種族は今日の英蘭、即ち當時の所謂[1]ブリテン島に侵入し苦鬪五百年の後、終に土着のブリトン人を擊破して、同國の主權を掌握せり。英國の地勢はデンマルク附近の如くは低濕ならず、又海浪の迫害も少なく、遙かに優秀の土地なれど、その濃霧は實に宇內の名物、日光鮮麗なる日とても稀に、氣候又不順にして土地磽确を極めたり。生をこの間に營まんとせば、たゞ經營力作の力にまたざるべからず。南歐の諸國、さては我日本の風光明媚にして氣候溫和、鳥歌ひ花笑へる樂園に比較すべくもあらず。斯くの如くにして、爾來幾多の歲月と、數多き人事の變遷とを閱せるにも係らず、アングロ・サキソン種族の根本的特色は依然として今

(1) Britain.

英文學を一貫する所の大特質

英人は外形よりも實質を重ず

英國の文士は自己流を振りまはす

日に保存せらるゝを見る。

かゝる種族の間に生れたる文學が、大體に於て如何なる特質を有すべきかは、大抵察知するに難からざるべし。英文學を一貫せる大特色は、其沈痛熱烈にして浮華纖巧の態なく、一氣奔流する所、やゝもすれば粗硬蕪雜の弊に陷るに在り。

その英文學に與へたる影響

英人の多くはたゞ自己の言はんと欲する所を言ふのみ。外形よりは實質に重きをおき、偏に自我を滿足せしむるものを求め、他人の意を迎へ、其賞讃を博せんなどの野心は少しもなく、時とすれば、無理にも慣則を破つて自己流を振廻さんとす。常に大打擊を與ふるに汲々とし全力を之に傾注し、其目的を達すれば、他の部分の感興の有無の如きは、放擲して顧みるなし。之を一言すれば、英文學はゴセィック風の建築の如く卓拔不羈、模型によらず先例に拘泥せず、全體に於て何となく貫目を有し、其佳所は實に天下の一品、何物も之を凌駕する能はず。其目指す所は極度の美と力とにして、成効し

て大傑作となるか、失敗して大拙作となるか、多くは二者その一に居る。

佛人は形式を尚ぶ

此點に於て英文學は甚だしく佛文學と相反す。これ兩國民の性情に至大の逕庭あれば也。佛蘭西人は、概して現在の快樂を喜び、交際に重きをおき、多感多情にして上品の態度を賞美し、

佛文學との比較

實質よりは寧ろ外形の修飾に力め、威力よりは寧ろ調和を尚ぶ。從つて佛文學は流麗和諧、例へば春の野に百花の笑ふが如く、又花の林に群禽の歌ふが如く、よく讀者の心魂を奪ひて恍惚たらしむるものあれど、たゞ人を壓倒するの威力には缺しく、形式の美勝ちて內面の熱人の胸を燒くものなし。故に喜劇若くは小說の類は最も佛人の得意とする所、之に反して鬼神を泣かさん悲劇、若くは崇高なる詩歌の類は、之を英文學、若くは獨逸文學等に求めざるべからず。若しそれ日本文學は、久しく佛敎の感化の下にありたる結果として、悲觀的文字には富みたれど、その底に痛烈の血涙を藏

日本文學は寧ろ佛文學に近きが如し

せず、一體の風潮輕妙を喜び、外面的技工を弄する所、寧ろ佛文學に似たりといふべし。

英文學は倫理的なり

尙ほ英文學の顯著なる一特色として忘るべからざるは、其甚だしく倫理的、實踐的なる事是也。英人が實踐的なる事は、先づその國の哲學に於て窺ふべし。英國哲學者の主張は實用的にして常識を重じ、實驗を尙び、純粹の抽象的推究を試むるものは極めて少なく、國粹の發揮、民福の增進を最大の目的とせり。この傾向は文學に於ても免る能はず。文士の或者は、文學を以て道德の奴隸となせり。或者は道德の奴隸となさゞるまでも、之と並行せしめたり。其最も文學の獨立を保持せるものといへども、尙ほ多くは倫理的空氣の中を出でざりき。我邦の文學は、儒敎の影響の大なる部分丈に於ては、この傾向を有したるも、今後の趨向は容易に判定し易からざるものあるべし。

以上余はアングロ・サキソン種族の特質、及びその英文學との關係

(1)Celts.
(2)Scotland.
(3)Ireland.
(4)Gaels.
(5)England.
(6)Devonshire.
(7)Somerset.
(8)Warwick.
(9)Cumberland.

に、つきて略述せり。されど、彼等に先んじて、英國に占據し居たり

ケルト種族の特色

しケルト種族と、英文學との關係も亦決して輕視すべからざる也。そもケルト種は、往時歐洲の西部に蟠居した

る民族にして、その一部の蘇國山間、さては愛蘭に住せるをゲール[4]スと稱し、又英蘭に住めるをブリトン人と稱せり。是等の人民は、政治上軍事上には、全くアングロ・サキソンの爲めに壓倒せられたるも、人種としては決して滅亡したるにあらず、多くは長き年月の間に、勝利者たるアルグロ・サキソンと混淆しぬ。其混淆の割合の大なるは英蘭の北西部に位せる、デヴォン[6]、ソマーセット[7]、ウォアウィック[8]、カンバランド[9]等の諸州を第一とす。若しそれ愛蘭及び蘇國にては、其割合更に之より大なりとす。

そも此ケルト種族は、軀幹長大にして膂力飽まで強く、綠眼赤毛、外形に於ては鬼を詒くばかりなりしも、たゞ其內心は、柄に似氣なく多感多情にして、深く物のあはれを解し、優美高雅にしてよく萬

(1)Green.

ケルト種族は審美的人種也

ケルトの長所はアングロ・サキソンの短所に對して短所は長所を補ふ作用なせり

混淆は相補ふの作用なり

沙翁はケルトの血液の多くに混淆されたる地に生れたり

その英文學に與へたる影響

象の美をさぐり、機智縱橫、詩思湧くが如く、文學的才情に於ては、堅實をこれ旨とせるアングロ・サキソンに

種族の遠く及ばざる所なりき。然れども彼等は實務上の才には甚だ乏しく、深遠の思慮と、強固なる決心とを有せず、やゝもすれば輕

舉暴動を試みて宛然小兒の如くなりき。之を要するにケルトの長所は、アングロ・サキソンの短所、又アングロ・サキソンの長所はケルトの短所にして、此二種族の混淆は、互に長短相補ふの作用を爲せり。

若しケルト種が、アングロ・サキソン種に混淆するなからんか、英文學は、其種類に於ても、又其色彩に於ても、大に遜色あるを免れざりしなるべし。現に近代無双の大沙翁が、是等兩人種の血液の混淆

の度最も大なるウォアウィック州に生れしが如き、大に注目に値すべき事實なるべし。一沙翁はチュートン民族の氣象の深さと強さとを有し、

兼ねてケルト特有の縱橫の才思と空想とを備へたり」とグリーンの

言へるは、蓋し何人にも異議なかるべし。又ケルトの傳說、詩歌が、

(1)King Arthur.

デーン人及びノルマン人の影響は根本的ならず

今日に至るまで、英國作者の材料として珍重さるゝも、亦看過すべからざる點也。『アーサー王物語』の如きは實に其一也。或る論者の如く、ケルト種の混淆を以て、チュートン文學の本色を、壓倒するまでの勢力ありとなすは蓋し誇大に過ぐ。たゞ此一事が萬綠叢裡に幾團の紅霞を點するの力ありしは疑ふべからざる也。

第三に英國に浸入したるは、デーン人なるが、彼等はアングロ・サクソンと共にチュートン種に屬し、その根本的特質に於て大差なきが上に、文化の程度は遙かに劣りたる人民なれば、其浸入は文學の進歩を阻害するの效能ありしのみ、格別の變動を與ふるの力はなかりき。十一世紀ノルマン人の英國征服は、之に比すれば遙かに重大なる影響を及ぼし、英國文學の形式は未曾有の大變動を受け、大陸文學との連絡又一層切實なるに至れり。然れども、彼等とて元來アングロ・サクソンと別人種ならねば、質の上に與へし影響は同じく甚しきに至らざりき。之を要するに英文學

文學研究者は時代と文學との關係を忘るべからず

は、大體に於てアングロ・サキソンの特質を原料となし、之にケルト種族の特質を加味して、作りあげたる一大文學なりといふべし。

以上說ける所によりて、略ぼ英文學の根本的特質は明らかなるべしと信ず。然れども、一國の文學を研究せんものは、單に其文學と人種との關係のみを見て滿足すべからざる也。渠は又同時に文學と時代との關係に細心の注意を拂はざるべからず。何となれば一面より見れば、文學は實に時代の產物なれば也。或る一時代と、他の一時代との文學の間には時に驚歎すべき程の大差別を有す。蓋し國民も亦個人の如く、逐次に推移變遷す。信仰の時あれば不信仰の時あり。

時代と文學

情熱の春あれば冷靜の冬あり。決して古今を通じて一樣なる能はざる也。外國文學の影響又時代によりて異なるを免れず。千有餘年に亘れる英文學は、是等諸種の影響と變遷とを反映して、幾多の時期を劃す。余は之を十期に大別して說かんとす。各期の特色、前後の關係、變遷の由來等につきては、各篇の初に於

文學の研究者は又個性を閑却すべからず

て筆をとゞめ、之が闡明につとむべし。されど文學研究者は、文學と時代との關係を探れるのみにては尚ほ甚だ足らざる也。更に一歩を進めて個性と文學との關係を明かにするを要す。換言すれば各作家に就きて其特色の如何を探窮するを要す。

個性と文學

何となれば、その同一國民に屬するを問はず、又同一時代に屬する作家の作と、他の作家の作とには必らず截然たる區別に係らず、一作家の作とにあれば也。蓋し作家が心を寵め、思を潜めて筆を執るに當りては、その材料の何物たるに論なく、盡くその人の思想、感情、想像の熔爐を通過せざるなし。即ちその片言隻語も、悉く其人の心血の一部、其人の内部生命の餘瀝也。その個人的特色を有するは寔に自然の數といふべし。而して一作家の價値は、重に此特色の如何に由りて決す。文學研究者はこの點に向つて最も多大の注意と精力とを拂はざるべからざる也。

此時代は準備中の準備

第一篇　アングロ・サキソン時代

（四〇〇年——一〇六六年）

此時代の概觀——最古の英詩——ビーオウルフ——その價値の多大——耶蘇教の傳播と英文學——耶蘇教傳播以後の詩——ケドモン——キヂウルフ——散文の遠祖ビード——アルフレッド王と英國散文——アルフレッド王の崩後——（研究書目）

此時代の概觀

此篇に於ては文學が初めてアングロ・サキソン種族の間に發生したる紀元凡そ五世紀の頃に筆を起し、一〇六六年英國がノルマン人の爲めに征服せらるゝに至る迄、前後凡そ五百餘年に亘れる英文學の發達を說かんとす。此數世紀は、後の英文學の根本的特質に多大の影響を及ぼせる大事件が、數々起りたる時代にして、準備中の準備は實にこの間に成れり。第一はアングロ・サキソン種族と英國土着のブリトン種族との混淆にして、此一事が暗々裡に、英文學に與へたる影響の重大なる所以は、既に總論に於て記

耶蘇教の傳播及羅典文明の輸入

文學の最も古きものは詩歌にして散文にあらず

述したる所の如し。但しその影響が文學的作品の上に發露したるは、次ぎの時代頃よりの事に屬し、此時代に於ては、未だその實果の顯著なるものあるを見ず。此時代に於て直接に多大の影響を與へたるは、耶蘇教の傳播、及び之に隨伴せる羅典文明の輸入是也。デーン人の入寇又此時代の出來事にして、こも亦看過すべからざる也。概して修養發達の時期なれば、文學として獨立的價値の大なるものは未だ多からねど、千有餘年に亘れる大文學の源泉を探ぐり、その發展の山來を討究するの興味は、決して尠少にはあらざる也。

最古の英詩

余は順序として、筆を最古の詩歌より起さゞるべからず。何れの國民にありても、最初に其情感、閲歴を發露するには必らず詩歌を以てす。詩歌は常に文字に先立ちて發生す。アングロ・サキソン種族も、彼等が尚ほ大陸に居住せる頃より、幾多の詩歌を所有し、口より口に傳へて吟誦し居たりしが、其中の一部は、後文字に留められて以て今日に殘留せり。何れも技工を加へず、

(1)Widsith, or Far Wanderer.
(2)Scop.
(3)Gleeman.
(4)Complaint of Deor.

修飾を施さず、有りの儘に天眞を吐露せしもの、最もよく赤裸々の狀態に於て、アングロ・サキソンの性質を伺ふべし。是等の詩歌中最も舊きものを『旅客』とす。其創作の年代は不明なれど、蓋し五世紀の初期に屬するものゝ如し。格別文學上の價値はなきも、當時の詩歌の標本として貴重せらる。その頃は音曲に達し朗詠を巧みにし、樂人として世を渡る事、例へば我邦の琵琶法師の如きものありき。之をスコプ[2]若くはグリーマン[3]と稱せり。此詩は即ちかゝる樂人が、其出入したる、もろ〳〵の宮殿の模樣、又は唱歌の報酬として賜はりたる、金銀財寶の事などを叙述したるものにして、即ち樂人生活の光明的半面を述べたり。『デオルの歎』と呼べる詩も亦當時の詩中、貴重なるものゝ一也。デオルは蓋し、或る貴族の許に召抱へられたる樂人なりしが、競爭者出て來りしが爲めに、全く君寵を失し、浪々の身となるや、從來不幸に陷れる賢良の人士を數へ、以て自己の不遇を慰めんとつとめぬ。毎節終るに「かの一事忍ばれぬ。わが不

日耳曼民族の最古の大叙事詩

(1)Beowulf.
(2)Alliteration.

幸もなど忍ばれぬべき」の疊句を以てす。即ち『旅客』の一篇とは正反對に樂人生活の無常を歎息せるものにして、後世の抒情詩の先驅といふべく、人を動かすこと頗る深し。篇中に聖書中の人物を引用せざるを見れば、其耶蘇教傳播以前の作なるや疑を容れず。外にも尙ほ數あれど、何れも斷片的のものにして言ふに足らず。中に在りて獨り嶄然として頭角を拔き、滔々三千一百八十三句、日耳曼民族の最古の大叙事詩として非常の重きをなすものを『ビーオウルフ』となす。

『ビーオウルフ』の詩篇に描かれたる舞臺は大陸にして、デンマク附近なりと推定せらる。其製作の年代は、例に由りて『ビーオウルフ』不明なれど、諸學者が、詩中に散見する所の史的事實を綜合して討究したる所に從へば、この物語が六世紀の初期より、八世紀の中葉迄に起れる丈は略ぼ明白也。されば此詩篇が現今の形を成せるは、早くも八世紀の中葉なるべし。その韻律法は、"頭韻法(アリテレーション)"に

アングロ・サキソンの特質は最も此詩によく現はれたり

(1)Jutland.
(2)Hrothgar.
(3)Grendel.
(4)Hygelac.

第一段の概

して現存する英國古詩中の好標本たり。その主題は爭鬪也。但し千軍萬馬の入り亂れ、馳せ違へる大活劇を描きたるにてはなく、又雨雄火花を散して奮鬪する目ざましき光景にもあらず、ビーオウルフと呼べる一勇士が、惡性の權化といふべき三個の怪物を退治せる顚末を叙したるもの、最もよくアングロ・サキソン種族の根本的特質を伺ふに適せり。

爰に[1]チュットランド王族の一人に[2]ロスガアと呼べる一君主あり。海岸に近き一沼澤の邊に宏壯なる邸宅を搆へて屢々饗宴を張りぬ。然るに[3]グレンデルと稱する惡魔ありて此沼澤に近き巖穴の中に住まひ、夜な〳〵近傍を徘徊せしが、宴席より漏るゝ絃歌の聲の騷がしきを怒り、ある夜ロスガアの重臣三十名を捕へて頭より食ひ盡しぬ。これより件の惡魔は、夜々この邸内に闖入するを事とし、前後十有二年の間殘害を逞うせしが、[4]ハイゲラック王の臣下に三十人力を具へたる無双の英雄あり、ロスガア王を救はんが爲めに、部下と共に舟に掉してスウェデンより來りぬ。これ即ちビーオウルフ其人

第二段の梗概

也。即夜かの邸宅に赴きて惡魔グレンデルの來襲を待つ。三更人靜かなるに及び、果して惡魔は室内に入り來る。其巨眼煌々とし火焔を欺く。忽ち睡眠中なるビーオウルフの部下の一勇士を捕へ、裂きて之を食ふ。やがて轉じてビーオウルフを攻撃す。ビーオウルフ少しも畏れず、心得たりと素手もて渡り合ひ、死力を盡して格闘す。四壁爲めに振動し、机卓の類粉塵となりて四散し、部下の勇士も、皆空しく顔色を失ふて觀望するのみ。されどビーオウルフの怪力や優りけむ、やがて逃げんとする惡魔の一腕を捕へて、之を捩ぢ切れば、惡魔は耐らず、僅かに身を以て免れ、澤中に入りて死す。之を三爭鬪の第一となす。惡魔の母も仝じく一種の妖怪なりけるが、我子の爲めに讐を報いんと欲し、翌夜ロスガルの邸に襲來し臣下を捕ふ。ビーオウルフ又もや其退治の任に當り、部下を率ゐて其跡を追蹤し、陰々たる泥澤を渉り、崔嵬たる峽路を辿り、物すごき水精の巣窟を過ぎて、さる古池の邊に出づ。池水血汐を以て湧き返り、上には蜜

我渡邊綱に似たり

第三段の梗概

樹隙間なく蔽ひかゝり、夜に至れば水色鬼火に映じて蒼青、腥氣人を襲ふ。されどビーオウルフは、毫も顧慮するなく、其中に突入し、池水の底なる巖穴に入りて魔女と格闘す。利劍も此魔物に對しては更に効力なかりしが、屈せず腕力を以て當る。既にしてビーオウルフ躓き倒れ、魔女其上に乗りかゝり、刀を拔きてビーオウルフを刺さんとす。幸に程近く惡魔の所有にかゝる武器の堆積せるあり。ビーオウルフ其中より手早く一巨劍を拔き、敵を斬殺す。之を三爭鬪の第二とす。此邊の狀況大に我邦の昔新渡邊綱鬼退治物語に髣髴たる者あるを見るべし。以上は其上篇に說く所。下篇は凡そ五十年後の物語にして、ビーオウルフは今や君王の位にあり、久しく良政を布きて、領内の人民其堵に安んぜしが、又もや爰に火焔を吐き出す一怪物あり、頻りに荒掠を逞ふせんとす。ビーオウルフ白頭の老軀を厭はず、三たび討伐の任に當り、終に之を鏖しぬ。然れども己れも終に負傷の爲めに起つ能はざるを見るや、命じて惡魔の蓄積せる

財寶を其面前に持ち來らしめ、莞爾として人民の爲めにかゝる寶物を獲得したるを祝し、又己れの遺骸は燒きて葬るべきを命じ、悠然として永眠の床につく。詩篇は其遺骸を某山頭に於て一片の烟となすを以て結末とす。

此詩篇の文學的價値は決して低しといふべからず。單に飜譯に由つて伺ふも、其人物を寫し、風景を寫し、又情想を寫せる筆の雄勁にして簡古、甚だ愛すべきを見るに難からず。されど此詩は古代の英人を傳ふる點に於て更に一層肝要也。全篇を通じて一貫するは、痛烈陰欝、猛然として直往邁進する精神也。主人公なるビーオウルフは實に古代英人の理想的英雄といふべく、其禮節の厚き、其腕力の强き、其態度の沈着にして、其意志の飽まで不撓不屈なる、其運命に任せて人を恨みず、天を怒らざる、はた其義務的觀念の甚だしく發達して、之が爲めには萬事を賭して顧慮せざる等、徹頭徹尾アングロ・サキソン的特質を發揮せり。優美なる情景、輕妙なる筆致の

此詩は古代英人の風俗をも傳ふ

ビーオウルフは古代英人の理想的英雄也

此詩は古代英人を傳ふる點に於て甚だ貴重也

如きは、篇中に殆んど痕跡なく、屢々筆をとゞめて自然を描くも、其自然は慘憺寂漠、無味無情の荒澤怒濤のみ。人若し無邪氣なる戀愛譚を爰に求め、快活なる笑語を爰にきかんとせば、其人は甚だしく「失望せざる能はざるべし。アングロ・サキソンに取りては、人生は娛樂の地にあらずして眞面目の境也、奮鬪の巷也。「人は死に先んじて大業をなすべし。偉人の紀念として之にまさるはなし」とは彼等の主義也、主張也。彼等の尊ぶ所は勇氣、忍耐、義務也。之が爲めには獨り五感の慾を犧牲に供するのみならず、自己の生命をも犧牲としても顧みざる也。勿論當時の英人は尙ほ蠻的人種のみ、殺害强奪を以て生命とせり。然れども一皮むきて其內部に立ち入れば、吾人は高尙にして純潔なる道德的觀念の存在を認む。『ビーオウルフ』の詩篇は是等古代英國人の精神的目標といふべき也。尙ほ吾人はこの詩によりて、彼等が戰時平時に於ける生活の狀態、彼等の使用せる船舶、家屋、さては其宴席の光景、娛樂の種類等をも窺知する事を

古代の詩は多神教時代の遺物也

得。宜なる哉、この詩篇が英文學最古の源泉として尊重せらるゝや。

以上擧げたる古代の詩は悉く多神教時代の遺物也。時に一二耶蘇教に關係せる句節に接することあれど、そは後世の僧侶などが文字に留むるに際して加筆せるものに過ぎざるべく、言はゞ表面上の痕跡のみ。中央を流るゝ所の精神は爭ふべくもなく、純然たる多神教の精神也。北方神話の精神也。アングロ・サキソン種族が耶蘇教に歸依せるは、他の民族に比して比較的甚だ遲く、彼等が英國に移住してより、一百五十年間は依然として在來の信仰を奉じ居たり。從つて彼等は、彼等に先立ちて耶蘇教を奉せる愛蘭及び歐洲大陸の諸國民とは、文化の上に於て絶縁されて殘り居たり。何となれば當時耶蘇教の寺院は獨り宗教の中心たるのみならず、同時に學問文藝の根據地にして、精神界に至大の勢力を有したればなり。然れども六世紀より七世紀にかけて、耶蘇教は漸く英國にも渡來しぬ。即ちセーント・オーガスティン[1]がケント[2]州に寺院を創立したる

耶蘇教の傳播

と英文學

(1)St. Augustine.
(2)Kent.

耶蘇教の傳播は羅典文明の扶植也

は五九七年の事に屬す。カンタベリィ[1]が英國に於ける學問の一中心となれる基はこの時に開かれたり。愛蘭の傳道者の英國北部に於ける盡力は一層成効せり。彼等の率先者をアイダン[2]といふ。六三五年ノーザムブリア州[3]に來りて布教に從事し、耶蘇教は爰に確乎たる根據を据へて、次第に其勢力を南方に擴張せり。六六八年には東方の文明を英國に輸入せる三學者あり。アゼンスに住みて希臘語を習得したるシーオドール・オフ・タルサス[4]、ノーザムブリア州の貴族にして、今や二度目の羅馬行より歸れるベネディクト・ビスコップ[5]、及び亞弗利加の高僧エードリアン[7]是也。何れも學識優れ、敬虔の念深き人々なれば、英國の宗教、學問は之が誘導に由りて長足の進歩を遂げ、彼等の盡力の結果として、寺院附屬の學校は陸續として建設せられぬ。即ち耶蘇教の傳播は同時に羅典文明の扶植にして、其共同的刺激の結果は當時の英文學に於て見ることを得べし。此關係は、これより數世紀の後までも繼續せる狀態にして、文學が宗教を離れ、

(6)Benedict Biscop.
(7)Adrian.

(1)Canterbury.
(2)Aidan.
(3)Northumbria.
(4)Athens.
(5)Theodore of Tarsus.

(1)Cnedmon.
(2)Yorkshire.

羅典語を離るゝに至りしは遙かに後の世の事也。

「これより余は耶蘇教傳播以後の詩につきて述べむ。當時の詩人としてキヂウルフの二人と記臆せざるべからざる者をケドモン及び、なす。ケドモンは實に英國本土に生れたる詩人中の嚆矢也。其生年

耶蘇教傳播以後の詩

は明かに知り難けれど、紀元六八〇年に死去したれば、渠の作詩に從事せる年代は大抵察知すべし。渠は卑賤の產と覺しく、ヨークシヤーなる一僧院の下僕なりき。元來無學の身なれば作詩の術を知らず、酒席などにて座客が詩歌を吟じはじむるや、身の無藝を耻ぢて影を隱すを常としぬ。然るに或る夜ケドモンは家畜の番をなしつゝ不圖まどろみたるに、夢中人あり、ケドモンに向つて曰く、汝我が爲めに天地創造の讃美歌を歌へと。ケドモン屢々辭退したる後、止むなく天帝を頌したる一歌を歌ひしが、覺むるに及びても尙ほ其詩句を忘れず。乃ち之を學者の前にて歌ふに、皆愕きて曰く、これ神託を蒙りて詩を作れるなりと。此物語は

(1)Bede
(2)Genesis.
(3)Exodus.
(4)Cynewulf.

ケドモン詩人となれる働機

英國散文の遠祖ビードの筆に留められたるものにして、甚だ神秘的なるが、要するにケドモンは宗教熱心家にして、信仰よりインスピレーションを得、以て詩人となりたるものなるべし。尙ほビードの記する所に由れば、ケドモンは聖書の中なる『ヂェネシス』『エクソダス』を始め、其他耶蘇、徒弟の物語、さては天國地獄の光景を詩に作りきと。當時にありてケドモンの詩は非常に愛重せられ、寺院より寺院に傳播せしが、今日殘存せるものは、後世の僞作も多く、玉石混淆して充分に判別し難し。たゞし『ヂェネシス』の中なる或部分は、確かにケドモンの手に成れるものと想像せらる。

キヂウルフは蓋し八世紀後半の人、其自から『エレーン』の詩中に記する所に從へば、渠は屢々音樂手として四方に遍歷せしが、後ち北方の、さる貴人の邸に居住しぬ。初めは、資性放逸にして快活、馬に騎り、歌を歌ひ、遊戲に耽り、戰爭に從事し、宗教に對して冷淡に、美人を愛し、上下貴賤樣々の人士に交際を求めぬ。蓋し渠が

作と稱せらるゝ謎詩[1]は其時代の作にして、多血多情、觀察に富み、同情の念充ち〳〵たり。既にして渠は事に觸れて從來の罪深き生活を悔い、ケドモンの墓に倣ふて宗教詩に筆を染めたり。『耶蘇』[2]『アンドレアス』[3]『エレーン』[4]『フェニックス』[5] 等の詩篇は即ちキヂウルフがこの時代に作れるものと認められる。キヂウルフの詩の特質は主觀的にして熱情に富めるにあり。其題目が風景たると、人事たるとに論なく、又訓戒たると抒情たるとを問はず、常に自己の感想を加ふ。ブルック曰く、「キヂウルフは自己の情感の色を通じて自然を見る」と。即ちこの主觀的なるを指す也。

(1)Riddles.
(2)Christ.
(3)Andreas.
(4)Elene.
(5)Phoenix.
キヂウルフの詩の特質

ケドモンとキヂウルフとの中間頃にアルドヘルム[7]と稱する名僧あり、詩人として當時に雷名ありしも、其作傳はらず。又何人の作なるか、分明ならざるものにして傑出せるもの數篇あり。即ち『廢墟』[8]『漂浪の人』[9]『海客』[10]『妻の歎き』[11]『良人のたより』[12] 等是也。沈痛なる英詩の根本的特質はよく是等に於て伺ふべし。されど之を要するに尚ほ

(6)Brooke.
(7)Aldhelm.
(8)Ruin.
(9)Wanderer.
(10)Seafarer.
(11)Wife's Complaint.
(12)Husband's ~~Message~~.

一般に幼稚の文學にして、小兒の片語[カタコト]に近く、想はあれど、之を充分に發揮し難き趣あり。當時の文字は又、今日のとは非常に異なり、專門に之を研究せる學者ならでは、到底讀破し難きものなれば、余は其細說に入らず、直ちに此時代の散文に移らむ。

散文の遠祖

英國散文の遠祖としてはビード[1]を擧げざるべからず。ビードは紀元六七三年に生れ七三五年に卒しぬ。其長き一生の大部をば、ヂャローの僧院に送り、僧侶としての職務を執りたる傍、或は書生を集めて敎授し、或は筆を執りて文を草し、北部英國の文運は其雙手に支持されぬ。其著書の數は四十に餘り、神學、科學、音樂、修辭、醫學、天文、數學等に亘り、就中其著『敎會史』[2]は古代の英國を知るべき唯一の史料として無上の價値を有す。唯だ是等の諸著述は悉く羅典文を以て草せられたるが故に、渠は是等を以て英國散文の祖たる能はず。渠が名の英國散文の發生と離るべからざるの緣故は、其絕筆『セーント・ジョン敎祖傳』[3]の英語譯に

(1)Bede.(Baeda.)
(2)Ecclesiastical History.
(3)Gospel of St. John.

あり、て存す。渠は病床に横はりながらその飜譯を徒弟に口授し、其成るに及びて瞑目したりとぞ。見るべし、ビードが英國散文の發達普及に向つて、如何に苦心せるかを。惜哉今日に傳はらず。

ビードの生時に於て、ノーザムブリアは、獨り英國に於ける學問の淵叢たるのみならず、歐洲大陸の諸國も、爭ふて書生を爰に派遣する程の盛運に達せしが、ビードの死後は叛亂の爲めに大に衰頽し行き、諸種の不幸災害踵を接して來襲しぬ。

デーン人の入寇

やがて八世紀の結末に近きて、デーン人の入寇となり、辛くも咲きかけたる文藝の花は、是等暴戾野蠻なる物どもの爲めに見る影もなく蹂躙せられ、[1]デアーロー、[2]ホーリ・アイル等の名高き寺院は相亞ぎて其毒手に倒れぬ。九世紀に入るに及びて、其殘害の程度益々甚だしく、[3]ホイットビィの僧院も破壞せられ、英國全土は再び元の暗黑なる多神教の世の中に退化せんかと危まれけるが、八七八年[4]エディングトンの一戰に於て、僅かに彼等の鋭鋒を挫き、[5]翌年ウッドモーア

(1)Jarrow
(2)Holy Isle.
(3)Whitby.
(4)Edington.
(5)Woodmore.

の條約に由りて英國の南部を保全するに至りし中興の英主をアルフレッド大王とす。此結果として、英國の文藝、學術の中心も、北方のノーザムブリアを離れて南方に移るに至れり。

アルフレッド王は英國散文の祖也

アルフレッド大王は單に政治家及び武人として偉大なるのみならず、又英國の文運の保護者として偉大也。殊に英國散文の發達に對して盡力せること一方ならざりき。ビードの作の散失せる今日、英國散文の祖は實に王也。初め王が位に即きたる頃には、長き戰亂の後を受けて、學問、文藝盡く廢絶に歸し、全國民は再び無

アルフレッド王と英國散文

學文盲の狀態に陷らんとしつゝあり、羅典語の如きは、殆んど一人の之に通達せるものなかりき。アルフレッド深く之を慨き、諸方より學者を聘し、又寺院を建設し、宮殿の中にも幼少者教育の爲めに一校舍を開き、教育事業の爲めにはいかなる勞苦をも辭せざりき。然れども其生涯の事業中最も不朽の大功を擧げたるものは、王自身の手になれる數種の飜譯なりき。今其重もなるものを擧

(1)Alfred.

(1)Boethius.
(2)The Consolation of Philosophy.
(3)Gregory.
(4)Pastoral Care.
(5)Orosius.
(6)Saxon Chronicle.

げむ。第一はボエーシアス[1]の作『哲學の慰藉[2]』是也。ボエーシアスは五六世にかけて住める羅馬の哲學者にして、此書が中世時代迄甚だ尊重されたるは人の知る所なるべし。第二は羅馬法王グレゴリィ[3]が著はせる『牧師の注意[4]』是也。こは理想の牧師とはいかなるものなるかを説明せるものにして、王は其飜譯を各管區の僧侶に贈れり。第三は西班牙の僧オローシアス[5]の著はせる『萬國史』、第四はビードの著はせる『教會史』の飜譯是也。英語は斯くて、始めて歴史、詩歌、宗教等の用語とはなれり。尚ほこの外王が功績を表するものを『サキソン史[6]』の監修とす。こは、最初はたゞ國王、高僧などの生死を記したる日記やうのものにして、古くより僧侶の手に成り居しが、今や王の監督の下に、有力なる宗教上の編年躰史となされ、諸方の寺院にて年を追ふて増補し行くべく定められぬ。かくて一一五四年迄つゞきて止めり。固より時代を異にする多人數の手に成れる事なれば、巧拙長短一樣ならず、大に一致を缺きたるものなれど、

(1)Wessex.
(2)St. Dunstan.
(3)Winchester.
(4)Aethelwood.
(5)Eynsham.
(6)Aelfric.

歴史としてはこよなき典據也。又古代英國散文の紀念品として大に尊重せらる。

アルフレッド王の崩御とノルマン勝利との中間には、一百五十年を隔てりと雖も、普通の讀者の注意をひく程の價値を有する作はなし。

アルフレッド王の崩後

此時期に於ける政治及び文學の中心はウェセックス[1]其他英國の南部に存じき。これデーン人入寇以前と以後との異なる點也。當時文名の世に聲けるは皆僧侶にして、即ちカンタベリィ大僧正たるダンスタン[2]、ウィンチェスター[3]の僧正たるエーセルウッド[4]、アインシャム[5]の方丈たるエールフリック[6]等なりき。是等の人々は鋭意英國宗教界の刷新に從事し、從つて其著作も神學的若くは教育的なるもの多かりき。この中最も卓出せるはエールフリックにして、其説教集は一代の名文として尊重せらる。

之を要するに、文學がノーザムブリアに榮えし時には、詩歌の發達を見、ウェセックスに移るに及びて散文は未曾有の發達を遂げたり。

國勝利にして、英國文學は愛に又一變遷に遭遇せり。

即ちこの「ノルマン」勝利にして、英國史上の大變動は起れる英國史上の一變遷に遭遇せり。

（研究書目）

（一）古代の英詩の標本――左記の諸書につきて見るべし。

Poets and Poetry of Europe, by Longfellow. はロングフェローの全集中に收められる。其中に有名なる最古の英詩譯數篇を見出すべし。

English Writers, by Morley, vols. I. II. (Cassel.)

The Deeds of Beowulf, edited by J. Earle (Clarendon.) は『ビーオウルフ』の散文譯にして、序說及び解釋を附せり。

Beowulf, edited by J. M. Garnett (Ginn.) は散文の逐語譯也。

Cynewulf's Christ, Elene &c. (Ginn.) 何れも近代語に飜譯せられたるもの也。

Caedmon's Exodus and Daniel (Ginn). 註釋及び語彙あり。

English Literature from the Beginning to the Norman Conquest, by S. Brooke (Macmillan.) 此時代の英文學の標本として貴重なるものは巧みに譯出されてあり。

（二）文學史類――前記のブルックの著は頗簡位しきを得て貴ぶべし。

Early English Literature, by Ten Brink, vol. I. (Bohn.) も甚だ面白きをなす。他に全般に亘れる英文學史類は爰に擧げず。

（三）英國史――當時の歷史を見るには左記の諸書を推すべきか。

Making of England, by Green (Harper.)

Conquest of England, by Green. (仝上)

Short History of the English People, by Green. (仝上) 本書は英國史中の傑作にして、英文學研究者必携の書也。又マコーリーの『英國史』なども吾人に取りて貴重なるは言ふまでもなし。

(四)アングロ・サキソンの辭書——には

An Anglo-Saxon Dictionary.(Clarendon.)

Student's Dictionary of Anglo-Saxon. (仝上) などあり。

第二篇　ノルマン時代

（一〇六六年――一三五〇年）

ノルマン時代の概觀――宗教の詩歌――物語の詩歌――ヂェフリイ・オフ・モンマス――ラヂヤモン其他――『アーサー王物語』――『シャーレメーン物語』――『歴山大王物語』――『トロイ城の圍』――『ホルン王物語』――『七賢人物語』――『グスタ・ロマノールム』――俚歌俗謠――『ロビンフッド』――『邪公の歌』――（研究書目）

ノルマン時代の概觀

この時代は國語の變動非常也

此篇に於いては、一〇六六年英國が[1]ノルマン人の爲めに征服せられしより、十四世紀の中葉[2]チョーサーの出現に至る迄、凡そ三世紀間の英文學を述べんとす。此時代の特相は、國語の變動非常にして、各作者は皆各個別樣の運動をなし、殆んど一定の標準なかりしに在り。此一大變動が何によりて起りしかといふに、そはノルマン人が英國に侵入し、土着の英人を抑壓して、言語、文字其他一切の事物を佛國化せんとしたるに基因す。

抑も此ノルマン種族といふは、其根本に於ては、同じく[3]スカンディ

(1)The Normans.
(2)Chaucer.
(3)Scandinavia.

ナビーア、及び[1]デンマルク附近に居住せる[2]チュートン民族の一部にして、アングロ・サキソンとは其祖を同ふせるものなるが、アングロ・サキソンが北進して英國を掌中に握れるとは反對に、彼等は南下して、佛蘭西の北部に突入し、終に[3]ノルマンディの地に割據して、佛國王より侯伯の待遇を受くるに至れるなりき。されば彼等は元アングロサキソンと同一の言語を操り居たる國民なりしが、みやびたる佛國に隣せる結果、いつしかその風習に感染し、其言語、文學までも採用摸倣するに至りぬ。斯くの如くにして、北歐の風雪裡に埋もれつゝ、航海掠奪を以て生命とせし曩日の野蠻人は、十一世紀の中葉に及びては、儀容に富み、禮節に厚く、美術を愛し、文學を談ずる所の極めて優雅なる都人士と化し居たりき。其奉ずる所の宗教の如きも、勿論今は耶蘇教にして、同時に耶蘇教が齎らせる所の學問も彼等の間に甚だしく尊重せられぬ。[4]ランフランク、[5]アンセルム等當時有數の學僧輩が聘せられて、ノルマンディに居住したるが如き以

(1)Denmark.
(2)Teutonic Tribes.
(3)Normandy.

ノルマン人は佛國化せる都人士也

(4)Lanfranc.
(5)Anselm.

ノルマン人は英語を撲滅せんとせしが最後に失敗せり

て見るべし。かるが故に、一〇六六年彼等が英國を征服して主權者の地位に立つや、英國在來の風習法律等を一變せんと企てたるは言ふにも及ばず、第一に英語を撲滅せんとはかり、當時にありては、宗教の中心たると同時に、學問の淵叢たる寺院をはじめ、官廳の使用語は盡く佛蘭西語となし、英語をば下等社會の言語として、極力排斥したり。されど土着の英人は數に以て優れるのみならず、由來彼等は頑强不撓の人民にして、飽まで保守的精神に富みたれば、ノルマン政府の企畫は最後に失敗に歸したり。是等ノルマン人が單に中途より豹變したる佛人に過ぎずして、根本に於ては天寒く霧しげき北歐の同一種類なる所以も亦大に與かりて力ありしなるべし。かくて政治的に勝利を占めたるノルマン人は社會上には全く敗者の位地に立ち、後には純然たる英國人と化して、其中に吸收せらるゝに至れり。

されど斯に達する迄の順序は極めて遲々たるものにして、征服後

二百年間英語の著書は中絶せり其結果英語は甚だしく亂雜に赴きたり

(1)Alliteration.

近代英語はこの亂雜の間より生れたり

およそ二百年間は、英語を以て著述を試みるものは殆んど絶滅したり。此間の著述は多く羅典語を以てなされ、一流の學才は之に由りて廣く歐洲全體の讀書界に訴へぬ。何となれば、當時に於ては、羅典語は殆んど全歐共通の用語なりければ也。若しそれ羅典語によらざるものは皆佛語によりぬ。斯くの如くにして、一時全く下流人民の使用にのみ放擲せられて據る所を失ひたる英語が、舊來の法則を破りて亂雜に流れ、又地方に由りて非常の相違を生ずるに至りたるは、自然の數といふべし。かの古代の英語に特有なりし語尾の變化は次第に消失して、或は形を變し或は全く根迹を絶ち、佛語、羅典語の新語無數に混入し、かの頭韻律(アリテーション)の如き、いつしか勢力を失ひて、他の韻律法の爲めに壓倒さるゝに至れり。

かくノルマン時代の文學は過渡時代の文學なれば、作として見るに足るべきものなけれど、近世の英語、英文學の基礎を作るべき一大準備は實にこの間になされしことなれば、之を研究せんも決して

當時の文學は詩歌に限られたり

無用の業にあらざる也。因に記す、ハルマン時代の英文學といふは、殆んど全く詩歌に限られたり。散文はあれども、寥々として曉の星にも似たり。右の詩歌は之を二大別して說くを便とす。曰く宗教の詩歌、曰く物語の詩歌是也。

宗教の詩歌

十一世紀は大陸一般に、宗教熱の勃興したる時代なれば、其波動はノルマン人に由りて英國に傳播し、僧院の建設頻りなりき。羅典學の研究は實に是等の僧院に於て爲され、十二世紀より十三世紀頃の英國學者が、羅典語を以て草したる神學、倫理、歷史等の述作は、中には非常の傑作もありて、歐洲の思想界を風靡したりき。かゝる中にも宗教熱は廣く一般人民の間にも傳播し、其結果として英語を以て草されたる參考書の需要急なりしかば、自からかゝる種類の書籍の發生を促したり。[1]オルムと呼べる僧の著はしたる『[2]ヲルムールム』と呼べる書はこの種類に屬す。其年代正確ならざれど、大抵十三世紀の初期に屬す。[3]教祖傳（ゴスペル）の拔萃を韻語もて歌

(1)Orm.
(2)Ormulum.
(3)Gospel.

へるものにして、其各部分に韻文の說教を附したり。韻律は羅典風にして、八シラブルの行と七シラブルの行とを交互に使ひ、前者には四個、後者には三個の[1]アクセントとを附したるか、頭韻（アリテレーション）もなく又末尾の韻もなく、其綴字の法も一種奇妙にして、今日の人士には、いと怪しげにきこゆるもの多し。例へばアクセントを附したる子韻は盡く二個重ねて綴り、men と書くべきを menn と書くの類也。其中に見出さるべき佛蘭西語の數は、極めて少數にして、二萬行中僅かに數字に過ぎずと。

オルムに次ぎては『[2]リヤール』と呼べる散文の作あり。浮世をのがれて神に奉仕せんとする三人の貴女及びその僕の爲めに宗教上の手引となることを述べたるものにして、凡そ一二二〇年前後の作なり。言語學の史上にはこよなき重寶なれど、文學として見るに足るものにあらず。その外又諸方に聖書の韻文譯など多く出てたり。十四世紀の初めに於て[3]ロバート・マンニングといふ作者あり。平易なる文字

(1)Accent
(2)Riwle.
(3)Robert Mannyng.

もて『ハンドリング・シン』と題せる一書を成したるが、さる佛蘭西語の書籍を意譯せるものにして、教訓的物語の體をかりて宗教上の教義を注入せんと企てたるもの也。一三四〇年には『良心の責』を見るには足る。同じ頃リチャルド・ロルと呼べる世捨人の手になれる『良心のとがめ』の詩あり。當時の名作と呼ばれたり。

物語の詩歌

ノルマン人は、歴史的趣味を英國に齎らし、歴史文學は翫然として英國に發生するに至れり。されど既に述べたるが如く、最初は皆羅典語を以て草せられたるを以て、爰に記述するの要なし。唯ウィタリス、ウィリアム・オフ・マムズベリ等の大名を記し、而して英國物語の詩歌が、是等歴史的の文學より胚胎し來れることを知らば、こいには足りなむ。さて物語の詩歌に於て最も早く出でたる作者をジェフリ・オフ・モンマスとなす。ジェフリはウェールスの僧侶にして、ブリトン人種即ちアングロ・サキソンの爲めに驅逐せられて

(1)Handlyng Synne.
(2)Ayenbite of Inwyt.
(3)Richard Rolle.
(4)Pricke of Conscience.
(5)Vitalis.
(6)William of Malmesbury.
(7)Geoffrey of Monmouth.
(8)Wales.

ウェールスなどに殘れるケルティック人種也の血を受けたればにや、輕妙なる詩思に富み、空想にかけて一種の奇才を有せり。かくて一三二年より五年の間にかけて、十二卷の『ブリテン史』を編し、トロイの將イーニィアスの曾孫ブラットが英國に來りて、王位に即きたりといへる傳說に由り、筆をブラットに起し、アーサー王を經て、紀元六八九年に崩じたるカドワロー王迄の皇統を揑造し、而して之に正史の名目を冠しぬ。即ち其體裁は歴史なれど、内容は純然たる一部の傳奇小說なり。眞の歴史家などは之を見ていたくも怒り、虛言家として罵倒せしが、この筆意は大に當時の人士の意に協ひ、大に喝采を博したり。されば、ジェフリは、ノルマン時代の英國物語の詩歌、開拓者たる名譽を擔はざるべからず。少くとも渠は、後世英人が自國の理想の英傑として尊崇謳歌今日に至りて尚ほ飽くを知らざるアーサー王なる人物の紹介者、又ケルティックの文學をして、英文學の中に不朽の痕跡を殘さしめたる先頭第一の大作者として、實に榮譽ある地

(1)Troy.
(2)Aeneus.
(3)Brut.
(4)Arthur.
(5)Cadwallow.

位にあるもの也。アーサー王の物語がいかに英文學中に重要の地位を占め、幾多一流の大才が、之を材として詩思を傾注したるかは、此後說く所を見れば次第に明かなるべし。中にも羅きの桂冠詩宗テニスンがこの物語に半生の腦漿を絞れるか如きは其中最も顯著なる事にして、苟くも英文學を味はんとする程のものは、知らざるものなからん。

但しジェフリィの物語は英語を以て草したるにあらず、羅典語を以て草したるもの也。この一事は渠をして、少しく英文學と緣故を遠からしめぬ。渠の物語は先づ英國の北部に住めるジェフリィ・ガイマーなるものに由りて佛蘭西語に譯されたり。されど此譯は更に優れたる他の佛語譯の爲めに壓倒されぬ。之をウェースの譯となす。譯述の方法は極めて自由にして、或る所は直譯し、或所は全く意譯し、往々又原文に無き他の傳說を挿入し、又自己の想像もて筆を加へたる所もありき。題して『ブラット』と呼びぬ。英語譯はこの後に於て初めて

(1)Tennyson.
(2)Geoffrey Gaimar.
(3)Wace.
(4)Brut.

ジェフリィは想像の英人の傑作にアーサー王を理人也

現はれたり。一二〇五年に出でたるラァヤモンの譯即ち是也。

ラァヤモン[1]はアーンリィと呼べる地の寺院に住める一僧なりしが、ジェフリィの原文幷びに佛文譯が、敎育ある上流の人士の間に流行するを見、ある時之を英詩に譯し出て、國人に示さんとの念を起し、種々の材料を蒐集せる後、ウェースを根據として終に之を純粹の英詩に引き直しぬ。ウェースの譯が原文に異なるが如く、ラァヤモンの譯は又ウェースの譯文と異なり、渠も亦盛んに諸種の傳說と、自己の空想とを混へ、ウェースに於て一五、三〇〇行なるものをば、三二、二五〇行の長篇となしぬ。古代の英詩と同じく、頭韻律を用ゐたれど、稍不規律に陷りたる個所あり、又間々押韻せる所もあり。又その英語は大に語尾の變化の數を減じ、過途期の英語の狀態を窺ふべき好標本なり。

ラヤモンの後に及びて、物語に對する世間の要求は益々增加し、而して此要求は佛蘭西文學に由りて充たされたり。佛蘭西の物語は

(1)Layamon.
(2)Earnley.

一三〇〇年頃に至りて佛語の多數は英語に混れり

彼の地を旅行せる商賈又は僧侶などの手にて英國に輸入せられ、そのすぐれたるは英譯せられて、或は王侯の催す酒宴の興を助くるの具に供せられ、或は田夫野人の團欒の天地に笑聲を湧かすの用に供せられたり。其數殆んど枚擧に遑あらねど、重もなるものは數篇に過ぎず、是等は更に節を改めて述ぶる所あらむ。佛語の多數が英語の中に混入せるは實にこの時代にして、一三〇〇年前後の作を見れば、其中に佛語の數が俄然として增加せるを發見すべく、又物語の文體脚色等も大に佛國風に風靡せられたるを認むべし。

佛國より輸入せる物語

佛國より輸入せる物語の中、最も重要なるものは凡そ四個を數ふべし。

第一『アーサー王物語』　既に述べたるが如く、此物語は一一三二年の頃、英國のヂェフリィ・オフ・モンマスが始めたるものにして、先づノルマン人の手に渡り、次ぎて佛國に入り、多くの作者の手にかゝりて、原書になき諸種の物語が之に附加せらるゝに至れり。之に

(6)Lancelot.

(1)Robert de Boron.
(2)Holy Grail.
(3)Pilate.
(4)Joseph of Arimathea.
(5)Walter Map.

新意匠を加へて增補したる人の中最も重もなるはロベルト・ド・ボロン[1]と呼べる佛國の武士となす。この人初めて『聖盞[2]』の傳說をばアーサーの物語に加へたり。聖盞とは耶蘇[キリスト]が最後の晩餐を爲したる杯にして、一人の猶太人取りて、之をパイレート[3]に與へ、パイレート之をジョーセフ[4]に與ふ。十字架の上より耶蘇を降ろすにあたり、ヂョーセフこの杯を以て其の血汐を受く。斯くの如くしてこの杯は極めて神聖なるものとなれり。已にしてジョーセフが猶太人の爲めに牢に入れらるゝや、四十二年の間一食を與へられざりしも、この聖盞のお蔭もて毫も苦痛を覺えず。後縛をとかるゝや、ヂョーセフ聖盞を携へて、佛國を越えてブリテン島に渡り、當時の王の寶庫中に之れを藏す云々。英王ヘンリィ二世の親友にして、博學、英才の令聞高かりしウォルター・マップ[5]更に之に關して附加する所あり。その他ランセロット[6]物語も又マップの手によりて編入せられ、斯の如くして、最初たゞ詩趣に富み、奇談に充ちたるを以て世人の視聽を動かした

(1)Tristan story.
(2)Cycle.
(3)Roland story.
(4)Charlemagne.

るケルティック物語は、耶蘇教と連關して、英國特有の倫理的情熱を帶びたる一大物語と發達したり。[1]トリスタン物語といふは、元はこの『アーサー王物語』とは獨立せるものなりしが、こも又後に其中に連合せられぬ。十三世紀より十六世紀に至る間に、アーサーに關して作られたる詩篇は幾何といふを知るべからず。例へば我邦に於て源九郎義經さて赤穗義士に關する物語、脚本の類が無數に作爲せられたるが如し。かく同種類の題目より成れる物語の集合を彼國にては[2]サイクルといふ。即ちアーサー王に關せる物語は之を總稱してアーサー王のサイクルといふ也。

第二『シャーレメーン物語』其サイクル中最も舊きは『ローラン[3]ド物語』にして十二世紀の初めに及び益々增補附加して尨大なる物語となれり。[4]シャーレメーンの戰爭に混ふるに東洋の傳說を以てし、其種類甚だ雜多なり。されどこのサイクルは英國に於ては佛國ほどの隆盛を見ずして止みたり。蓋し此時に及びてはノルマン人とアン

(6)Rauf Coilyear.

(1)Otinel.
(2)Amis et Amiloun.
(3)Charlemagne and Roland.
(4)Siege of Milan.
(5)Sir Ferumbras.

グロ・サキソンと漸く合併し、佛國の英傑に對する同情の念自から薄らぎたるに由らんか。此のサイクル中最も優れたるは『[1]オーティネル』『[2]アミス、アミルーン物語』の二篇にして、後者の英譯は大に原作を增減して殆どシャーレメーンとは關係なきまでに形をかへたり。右の外には『[3]シャーレメーンとローランド』『[4]ミランの圍』『[5]サー・フェルムブラス』及び滑稽なる『[6]ラウフ・コイルイーア』等に過ぎず。

第三『歷山大王物語』さる希臘語の物語より源を發し、又亞剌比亞の物語に據りて不思議なる奇談怪話等を附加し、更に十一、二世紀頃の武士道に熱中したる時代のあらゆる想像力に由りて潤色せられたる物語也。物語の中に現はれたる歷山大王は、正史の上に現はれたる歷山とは全く趣を異にしたる架空の人物なり。此物語は十三、四世紀の頃歐洲一般に大に流行せるものにして、獨り英佛のみならず、獨逸、西班牙、以太利、スカンディナービア等にも傳播せり。英譯の現はれたるは凡そ一二六五年前後の事也。

(1)King Horn.
(2)Saracen.
(3)Westerness.

第四『トロイ城の圍』こは年代に於て尤も舊けれど、英文學には尤も影響薄し。チョーサーの時代に至りて初めて材料を之に取るものを出せり。

以上擧ぐる所は尤も重要なるサイクルなれど、物語に對する世間の渴望は到底是等を以て滿足さるべくもあらず、尙ほ無數の物語を生みたり。一二五〇年頃には『ホルン王物語』[1]出てたり。北歐民族の物語なるが、一旦佛國に入り、更に英國に入りたる也。ホルンは美貌の少年にして、皇太子なりしが、サラセン[2]人の爲めに捕獲せられしも、餘りの美貌に敵も之を殺すに忍びず、一片の小舟にのせて海上に放つ。幸にしてウエスターネス[3]の地に漂着して、國王の小姓となる。王に美姫あり、相愛せしに事發露して放逐せられしも、七年の間互に約を守りて再會を期し、その間無數の危險に際會す。終にサラセン人を擊破して本國を回復し、又一旦敵手に渡りたる先きの美姫を取りかへして結婚す。之をこの物語の大體となす。このサイク

(1)The Lay of Havelok the Dane.
(2)Guy of Warwick.
(3)Book of the Seven Wise Men.
(4)Gesta Romanorum.

ルに屬する物語は『ハヴェロック・ゼ・デーン』[1]『ガイ・オブ・ウォーアウィック』[2]等にして何れも前後して英譯せられたり。其外戀物語、諷刺物語等の短篇續出し、その中物語叢書の發生となれり。物語叢書中最も有名なるを『七賢人の物語』及び『ゲスタ・ロマノールム』[4]となす。共に必讀の書なり。前者は凡そ十五の物語を收む。七賢人あり、一王子の輔佐たり。王子の母は繼母なりしかば、王子をなきものにせんと圖り、之を父王に讒す。七賢人かはる〳〵父王に向つて物語をなし、暗に、輕斷の危きを諷す。繼母も又さるもの、己も同時に反對の意を含める物語をなして王を動かす。最後に王子自から繼母の謀を一の物語として巧みに說き、終に惡逆なる繼母は死に處せらる。即ち繼母の物語が七、七賢人の物語が又七、之に王子の物語を加へて十五の物語を集む。『ゲスタ・ロマノールム』に至りては一層重大なる物語の叢書にして、世界の各國に起れる傳說を取り、之を英國風に書きかへて蒐聚せるものなれば、自から、其間に文脈の一致あり。

この時代の國民文學は寧ろ俚歌俗謠に存す。

今日に於ても之を近代の英語に譯して尙ほ少年の間に愛讀せらる。

俚歌　以上記述し來れるは、書物に現はれたるノルマン時代の英

俗謠　文學也。最後に余は不文の文學たる俚歌、俗謠の類につき て一言せざるべからず。何となれば當時の國民文學ともいふべきも のは、寧ろ彼に存せずして、此に存じたれば也。人も知る如く、當 時にありては未だ活版なく、書物は盡く謄寫にかゝれり。爲めに其 價甚だ高く、到底天下に流布せしむべからず。大部分は單に口より 口に傳唱せられたるのみ。書物の形を成せるものは、蓋し全體の文 學の一小部分に過ぎざりし也。されば當時の人民の抱ける迷信、疑 惑、其他喜怒哀樂のさまざまを誠實に知らんとせば、彼等の間に發 生せし俚歌俗謠を伺ふを第一とす。たゞ是等の大部は皆記錄に留め られず、其湮滅、散亡に一任せられたるを以て、今日に傳はれるも のは寥々として曉星も啻ならず。甚だ惜むべしとなす。

(1)Robin Hood.

當時の俗謠（バラッド）中最も人々に膾炙したるは、『ロビン・フッド』に關する

ロビン・フッドは當時の人民の理想的英雄也

俗謠是也。其最も舊きは十三世紀に屬す。爾來二三世紀に亘りて、之に關する俗謠陸續として出でたり。ロビン・フッドは當時の人民の理想的英雄也。當時の人民が、ノルマンの貴族に對する憎惡の念慮、彼等が愉快なる山林の裡に自由調達の生活を送らんとする希望、彼等が麥酒を好み、弓術に耽り、刀槍の術を愛ずる風習等は遺憾なく此英雄の身に發揮せられぬ。彼は一面より見れば法律の罪人也。奉行の厄介者也。然れども他面によりては、禮節を尙び、公平を重んじ、强を挫き弱を助け、勇あり義あり、深く英人的特質を代表す。されば或る意味に於ては、當時の文學中醇の醇なるものは爰に存ずといふも不可なからむ。

(1)Cuckoo Song.

他にはかの有名なる『郭公の歌』あり、一二四〇年以前の作、天然の眞趣辭句の間に溢れ、人の血液を踴躍せしむるものなり。英文學の流が、さいやかながら、張りつめたる佛、羅兩文學の堅氷の下に咽びついありしを感ぜしむ。

（研究書目）

Layamon's Brut (Quaritch.) 原文、譯文、註釋、語彙ありて大部のもの也。
The Ormulum, with notes and glossary (Clarendon.)
King Horn. (全十) Low. 會社出版のもあり。
Havelock, edited by Holthausen (Low.)
Gesta Romanorum, translated by Swan (Bohn.) こは近代英語に直したるもの也。尙ほ Clarke, Sonnenschein, Putnam. 等の諸會社にても出版せるものあり。
Old English Ballads, selected by Gummere (Ginn.)
Romantic History of Robin Hood (Harper.) こは少年の讀物として書直したるもの、他にも此種類のもの甚だ多し。

この時代の歴史を見るには、左記の諸書可なるべし。
Short History of Norman Conquest, by Freeman (Clarendon.)
Story of Normans, by Jewett (Unwin.)
History of English People, by Green, Vol. I. (Harper.)

第三篇　チョーサー時代

（一三五〇年――一四〇〇年）

チローザー時代の概觀――標準語の確立、近代的新機運の發動――詩壇の先驅者――『ゴーウェン卿と綠衣騎士』――チローサー――その閲歴――第一期の作――『公爵夫人の挽歌』――第二期の作――『トローイラス・クレシッド物語』――『カンタベリィ物語』――『善薇物語』――『婦德物語』――『ほまれの家』――その韻律上の貢獻――ランゲランド――その梗概――その長所と缺所――『ピールズ・プローマンの夢』――ゴワー――『コンフェッシオ・アマンチス』――散文――ウィクリッフの聖書譯――ジョン・オブ・レトヴィサの『ポリクロニーコン』譯――『マンデヴィル旅行譯』――（研究書目）

混沌たるノルマン時代の英文學を查べて、十四世紀の中葉チョーサーの時代に至れば、一體の面目俄然一新し、例へば濛々たる雲霧の裡より出でゝ、天色朗かに、百花笑を呈せる春の野に入りたらんが如く、生氣あり、風致あり、初めて眞正の興懐を催すべし。前世紀の用語が雜駁にして捕捉し難きに反し、此時代に至りては、殆んど近代の英語に接近し、多少の困難を凌げば、

チローサー時代の概觀

英文學は此時代に入りて準備期は過ぎ去れり

英語は十四世紀に入りて全く佛語を壓倒せり

必らずしも窺味し難きにあらず。又前代の文學の大部が佛蘭西の摸倣に過ぎざりしに反し、此時代に入りては、國民性情の中心より湧出し、殊にチョーサーの詩篇にいたりては、詩思詞藻二ッながら群を拔き、千歲稀に見る所の巨匠たる價値確かも也。要するに英文學の準備時代は爰に至りて經過し、眞に文學として獨立の研究を値するものを出すに至れる也。

余は此時代の文學を說くに先んじ、先づ當時の國語の狀態に就きて一言するの要あるを覺ふ。既に前章に於て述べたるが如く、一般に佛蘭西語が廢止されたるは十四世紀の中葉にして、英語は終に佛蘭西語との競爭に最後の勝利を占めたり。即ち一三六二年に發布したる法令は、公用の事務に英語を使用すべき事を確定し、翌六三年には、時の一大臣初めて英語を以て國會に演說を試みぬ。かくの如くにして、前時代に全く據る所を失ひて、亂雜に流れ行きたる英語は、再び其勢力を挽回し、所謂一國の標準語は爰に確定するに至れり。

當時の英語は三大地方語に分る

(1)Scotch.
(2)Robert Burns.
(3)Scott.
(4)London.
(5)Cambridge.
(6)Oxford.
(7)East Midland Dialect.

之を大別して言へば、當時の英語は三個の地方語に分れたり。一は南方語にして、こはアングロ・サキソンの語脈をさながらに固守したるものなれば、十四世紀を經て十五世紀の末に至りては實際上絕滅せりと見て差支なし。二は北方語にして、即ち今日のスコッチ是也。この語は勁拔にして生氣あり、僻陬の地方の用語として大に不利益の地に立てるにも係はらず、容易に其勢力を失墜せず。殊に近年ロバート・バルンズの名什、さてはスコットの詩篇の一部の、之によりて作られたるが故に、英文學を研究するものゝ看過すべからざるものとなれり。三は中國語にして、是即英語の源泉也。元來一國の言語は政治上社會上の中心たる首都の使用語を標準とし、又學問文藝の府として有力なる學校の周圍に、集中すべきは自然の數にして、例へば日本語が東京語を標準とするが如き是也。英國語に於ても亦斯くの如く、龍動及び劍橋、牛津の二大學を中心として發達したり。而るに龍動も是等二大學も共に東部中國語を使用する範圍內に在り。

東部中國語は英語の源也

この地理上の特點に加へて、東部中國語は各地方語中最も自在にして文法上の混雜少なく、又最も多數に佛蘭西語を吸收し居りて、詞藻豐富なるが故に、この點より見るも亦最も發達すべき性質を有せり。この東部中國語を自由自在に驅使して空前の名什を作り、近世英文學の先登の大家たるものをヂェフリィ・チョーサーとなす。チョーサーは之を當時の他の作者に比すれば卓然として一頭地を抜く。東部中國語はこの作者の力を借らずとも終に標準語たるべきは殆んど疑を挿むの餘地なけれど、この作者が之を使用せるが爲めに、その發達普及の機運を促したるは明白なりといふべし。

社會主義の發生

近代英語の準備が整ひたる此時代には、同時に他の諸方面に於て近代的新機運の發動を見たり。第一は社會主義の機運是也。一三四九年英國は、猛烈なる黑死病の犯す所となり、人口の大半は死歿し、田畝は耕耘を廢して何等の收穫なく、爲めに國内には乞食、竊盜の徒累々として充滿するに至れり。之を取締らんが爲めに、幾多の嚴

法を設けられたりしも、單に下民の憤懣を招げるのみ、何等の効果を收め得ざりき。即ち中世の武士的幻夢が是等現實的、實利的怒號に破らるゝの端緒は爰に開け、後世の社會主義の先驅をなせり。ラングランドはこの精神を代表せる作者也。

宗教改革の機運

第二は宗教改革の機運是也。此時代に入りては、羅馬教は漸く活氣を失ひて同時に腐敗の氣を帶び來り、かの十字軍時代に見たりし如き狂熱は全く冷却し去りぬ。殊に一三〇九年羅馬法皇が羅馬を去りてアヴィニョンに移るに及びて威嚴は全く地に墜ちつ。其他寺院内部の腐敗、僧侶全體の無主義、無氣力は相合して宗教の威信を傷くるの作用をなし、寺院は輕視、侮蔑の中心となりぬ。此機運を皷吹せるは、即ちかの聖書飜譯の率先者として有名なるウィクリッフ是也。第三は文藝復興の機運是也。

(1)Avignon.
(2)Dante.
(3)Petrarch.
(4)Boccaccio.

文藝復興機運

この本源は伊太利に在り。ダンテ(一二六五——一三二一)を先鋒とし、ピートラルク(一三〇四—一三七四)ボッカッチョ(一三一三——一三七五)等の稀世の名家續出し、最もよく此精神を代表せり。

(1)Sir Gawain and Green Knight.

この大波動が初めて英國に達したるは十四世紀の終にして、チョーサー先づこの機運に觸れたり。チョーサーはこの點に於ても甚だ重要なる作者なりとす。

チョーサーの前後の作者の數は僅かに數人のみ。詩に於てはチョーサーの先驅をなせる無名の一作者と、ゴワー、ラングラントの二家是也。散文にてはウィクリッフを第一とし、他は僅かに一二あるのみ。

詩壇の先驅者　扨チョーサーの先驅をなせる無名の一詩人といふは、即ち『ゴーウェン卿と綠衣騎士』[1]と題せる詩篇の作者にして、十四世紀中葉の詩人中に傑出す。此詩も亦アーサー王物語のサイクルに入るべきものにして、想像力の豐富なる、詞藻の自在なる、又其使用せる頭韻律の巧妙なる、前後に匹敵するもの稀なりと稱せらる。爰にグリーン・ナイトと稱する怪物あり、ある時馬に跨りてアーサー王の內裏に入り叫んで曰く、誰か斧を以て、わが首を斷つものなき

『ゴーウェン卿と綠衣の騎士』の概略

か。但し一年の終に至らば、吾をして一擊を酬いしめよと。アーサーをはじめ、皆逡巡して應ずるものなかりしが、幾度か挑まるゝに及び、王の麾下の騎士なるゴーウェン終に之に應じ、一擊してその頭を斷つ。然るに不思議なる哉、グリーン・ナイトは斷れたる首にて叫んで曰く、來年はわが番也。忘るゝ勿れと。乃ち首を拾ひあげて去る。翌年期に及び、ゴーウェン死を決して約束の地に赴く途中、とある城郭に立ち寄るに、いたくも歡迎せられ、殊に美人の一人は百方媚を呈してゴーウェンの心を迷はさむとす。ゴーウェン有德の士なれば墮落する迄には至らざりしが、終に全く其魔力に抗する能はず、一度接吻を與へ、又その美人より一條の帶を受けたり。この城主といふは即ちかのグリーン・ナイトにして、やがて約束の時となるや、ゴーウェンに一擊を與へて負傷せしめ、告げて曰く、汝が疵を受けたるは、汝が完全に有德ならざれば也。汝を挑めるはわが妻にして、實は汝を試みたるのみ。汝は大なる不德を働けるにあらねど、

(1)The Pearl.
(2)Cleanness.
(3)Patience.

抒情詩の發生

接吻を施し又帶を受けたり。之が爲めに余は汝に負傷せしむるを得たり。汝若し眞に惡事を働きたりせば、余は汝を殺し得なりしならむ。若し又眞に有德なりせば、余は到底汝を傷け難かりしならむと。ゴーウェン大に耻づ。幸にその罪を恕され、又疵も平癒せしめらる云々。これこの篇の梗槪也。その情趣、若くは詞藻の美等は到底梗槪の上には傳へ難けれど武士道の觀念と倫理的精神とが全篇を通じて一貫し、又結構の緊肅にして弛みなき等は明かに認めらるべし。

此篇の外に同作者の筆に成れりと想像せらるゝ『眞珠』あり。愛娘を失ひたる父が塵世の望を絶ち、信仰の光明を認めたる物語にして　これ又得難き珍品たり。『清淨』『忍容』等も同樣の筆致もて成りたる宗教の詩中に屬すべき作也。

此作者の前後には又幾多の抒情詩人出てたり。最初は讃美歌より發達したるものにして、戀ては戀愛に關するもの、自然を謳ふもの、さては諷刺的なるもの等其種類次第に複雜となれり。是等はエリザ

(1)Geoffrey Chaucer.
(2)Edward III.
(3)Lionel.

ベス朝に隆盛を極めたる抒情詩の先驅をなせるもの也。されど爰には單に其發生を告ぐるにとゞめ、直にチョーサーに就きて述べんとす。

チョーサーの閲歷

ヂェフリィ・チョーサーの閲歷に關する材料は甚だ少く、且つ斷片的にして、人の想像に任ずる個所多し。然れども渠は其千古不滅の詩篇によりて、後人の胸裡に常に新たなる生命を有す。チョーサーは一三四〇年前後を以て龍動に生れぬ。父の名はジョン・チョーサーと呼び、酒舗の主人なりしが、チョーサーは十六歲頃よりエドワード三世の第三王子ライオネル公爵夫人の小姓となりこの後は大抵身を上流の社會に伍し、雲深き九重の奥迄も出入する身となりたり。齡て十九の時にはエドワード三世の軍に從ひて佛蘭西征討の役に加はり、各地に轉戰せしが、終にレェーチェルの役に捕虜となり、少時の間佛國に留まりたる後贖はれて國に歸りぬ。それより、直に內裏に仕へ、國王の侍官に補せられたり。又一三七〇

年より八〇年の間には、外交上の用務を帶びて海外に赴くこと前後六七回に及び、而して其中の二回は實に以太利に赴きたり。此以太利行は詩人としてのチョーサーの上に、從つて英文學の上に新紀元を與へたる一大事件として特に注意せざる可からず。一三七四年には稅關の官吏に擧げられ、八六年には國會議員となりぬ。此後チョーサーは、その恩人ジョン・オブ・ガッーントの薨去に由りて、多少失意の境に陷り、貧困の何物なるかを味はひしが、ヘンリィ五世の朝に至りて再び幸運の身となり、最後に諸種の土木監督官に補せられて、其公生涯を終り、一四〇〇年十月廿五日を以て卒しぬ。以上は極めて概略の記事に過ぎざれど、渠の閱歷が頗る多方面にして、一人にしてよく町人、軍人、大宮人、外交官、政治家、事務家等を兼ね、王侯と共に勞働者を知り、內地の事情と共に外國の形勢にも通曉したる經驗家たるを知るに足らむ。是等幾多の經驗は後年その大作『カンタベリィ物語』を草するに當りて遺憾なく運用せられたり。

(1)John of Gaunt.
(2)Henry V.

チョーサーの經歷は極めて多方面也

チョーサーが詩人としての生涯は、渠が內裏の侍官たる時代、即第一期の作ちその二十六七才の時より始まる。チョーサーが先づ名をなしたるは、其頃佛蘭西に於て流行したる『薔薇物語』の譯詩とす。チョーサーが此譯を成したる事實は確乎たる憑據あれど、今日殘る所の英譯中、最初の一七〇五行を除きては、他人の筆になれりといふ。大體に於て稽古中の試作といふべく、その技倆は未だ成熟せざりき。一三六九年に出でたる『公爵夫人の挽歌』にいたりては之に比して大に進步の痕を認む。この詩は渠が恩人たるジョン・オブ・ガッーント公爵夫人の夭折を悼める詩篇なるが、當時佛蘭西に流行せる詩風に學び、作者は直接に自己の感想を披瀝せず、夢をかりて林間にジョン・オブ・ガッーントの姿を寫し、その口より、死せる佳人の面影と才藝とを說かしめ、やゝ劇曲的に哀悼の情の切なるをのべたり。未だ洗錬を以てゆるし難けれど、清新の氣と怡樂の想は、到る所に發露し、かいる悲哀の材を捕へながら、尙ほ皐月の空の

(1)Roman de la Rose.
(2)Book of the Duchess.

夢と五月の戾とは當時の詩人の當時の愛となれり

美しさ、嬪紛たる落花、鳥の歌、樹枝のさゝやき等、世にも優婉なる自然界の景物を添へて、讀者をして優美の感に打たしめたり。この詩境はチヨーサーにつゞける十四五世紀の作家の多くが摸倣せる所にして夢と五月の戾とは詩に離るべからざるものゝ如く思はるゝに至れり。

第一期の作中重もなるは之に盡きたり。この時代は徹頭徹尾佛蘭西の詩の影響を受けたる時代にして、その量に於ても又その質に於ても比較的重要ならず。チヨーサーの詩人としての面目は、渠が伊太利に赴き、その文學に接するに及びて俄然として一新するにいたりたり。

第二期の作　そも當時にありて以太利は歐洲文藝の中心にして、文藝復興の流の發にさゝせるは既にのべたる所の如し。ダンテといひ、ピートラルクといひ、ボッカッチョといひ、皆これ稀世の傑物、之を當時の他の諸國の文士に比すれば、さながらに師弟の觀あり。

(1)Renaissance.

チヨーサーがダンテの『神曲』をよみて得る所多かりしは、神曲より引用せる辭句の多きを見て明かなる事實也。ピートラルクとは、一度會見の機を得たりと想像せられ、詩の形體につきてピートラルクより學べる所も尠なからず。されどチヨーサーが尤も多大の感化を被りたるは、ボッカッチョの詩と散文とに是れ也。わきてかの物語の叢書といふべき『十日物語』より得たる所の感化と材料とは至大なるものにして、チヨーサーは之によりて實に物語作法の神髓を會得し、これより佛蘭西風の傳奇的作風を棄てゝ全く顧みざるに至りぬ。但しチヨーサーを以て單に以太利文學の模倣者に過ぎずと思はゞ大なる誤解也。天才の士は決して模倣を以て止むことなき也。渠はボッカッチョを讀みて時にその結構を借りたることあれど、徹頭徹尾之に據りたるにあらず、多くは自己の想像の熔爐を通過せしめてその面目を一新し、又多くの場合に於ては單に之に由りて暗示を得たるのみ。されば辭句の上は固より、その精神までもチヨーサーの特色を

(1)Divine Comedy.　(2)Decameron.　チヨーサーは多くボッカッチョに學べり

(1)Troilus and Cressid.
(2)House of Fame.
(3)Legend of Good Women.
(4)The Canterbury Tales.
(5)Filostrato.

有せり。同化力の大なるは實にチョーサーの獨擅也。

チョーサーの第二期に於ける作中、重要なるものは『トローイラス・クレシッド物語』[1]『ほまれの家』[2]『婦德物語』[3]にして、最後に『カンタベリィ物語』[4]を擧げざるべからず。

『トローイラス・クレシッド物語』は一三八〇年より八三年の間に執筆せられたり。ボッカッチョ作『フィローストラート』[5]を根據としたるものにして、渠が作中尤も模倣に傾きたるもの也。されど原作を變更增補せること甚だしく、殆んど二倍の長さに達せり。而してその增補せる部分は優婉にしてよく人を動かし、不健全の傾向ある原作を轉じて、清純可憐なる戀物語とはなせり。元來ボッカッチョは物語作者として不世出の才幹あるにも係らず、やゝ美的性情に乏ぼしく、殊に男女間の關係に於て邪路に陷り、かれが物語の或者は到底家庭に於て繙くべからざる性質を帶びたり。チョーサーに至りては決してかゝる事なく、飽まで眞贊にして飽まで可憐也。この點は

(1)Ovid.

チョーサーが大作『カンタベリィ物語』を草

兩作者の性質の差異を示すと共に、多少兩國民の性質の差異につきて語る所ありといふべきか。『ほまれの家』は譬喩的詩篇にして、かれが博識と多讀とを示すに足り、且つ全く自己の頭腦の產物として一進歩を認む。『婦德物語』は一三八三年に出てたり。德操ある婦女の物語を集めたるものにして多くは羅馬詩人オヴィド[1]より材料を得たれど、作者は例の如く變更を加へて、必らずしも原作に據らず。但しこの篇は完成に至らず。十九人の婦女を描かん豫定の所、たゞ九人のみを描きたり。各々特色ある別樣の婦女の性格を寫さんと企て、微妙なる心理上の觀察にとみたるは、一段の進歩と稱せざる可からず。されど要するに、是等は渠が大作『カンタベリィ物語』に達する迄の階梯たる觀ありき。

カンタベリィ物語　チョーサーが其不朽の大作『カンタベリィ物語』に着手したるは年齒五十に近つきたる頃にして、爾來十年以上に至りて年々之を增加し行けり。此詩篇は幾多の物語の聚合にして、多くの

旅客がカンタベリィ寺院を指して赴く途中に、かはる〳〵物語れる體にものせり。先づ序詞あり、いかにして是等の旅客が龍動在の一旅亭タバァード館に落合ひしか、又如何にして彼等が同行を約するに至りしか、又いかにして愉快なる旅亭の主人ハァリィ・ベーリィの發議に由り、各人往復に二件つゝ、都合四件の物語をなすを約せしか等の顚末を明かにせり。同行者の數は三十人に達したる事なれば、全體に於ては百有餘の物語をなすべき結構なりき。斯くの如きは老境に向ひたるチョーサーに取りては、やゝ無謀の大結構たるを免れず。果せる哉、チョーサーは其内二十四篇を完成したるのみ。旅客はカンタベリィに到着するにも至らずして止みたり。こは甚だ憾むべきなれど、其完結したる丈にて、既に稀世の大作たるは動かすべからざる也。此序詞の外にも又小序あり、毎篇の中途に挿まれて、以て前後の脈絡をつけ、且つ旅客の動靜を說けり。斯くの如く或る連鎖を設け、多數の物語を聚むるの手段は、決してチョーサーの新機軸とは

(1)Prelude.
(2)Tabard Inn.
(3)Harry Bailly.

始めたるは五十に近き頃也

同物語は百餘篇に達すべき計畫なりしが完成せるは二十四篇のみ

いひ難く、現に少しく前に出てたるボッカァチョの『十日物語』は此手段を用ゐたり。即ち『十日物語』にありては一三四八年フロレンスに於て惡疫の流行せる時七人の貴女と三人の貴紳とが、この疫病をさる田舍の園囿に避け、消閑の手段として各自物語をなせりといふ結構也。チョーサーは前にも言へるが如く『十日物語』の愛讀者なれば『カンタベリィ物語』の結構に就きての暗示を爰に得たるは幾んど疑ふべくもあらねど、唯だ渠は幾多の改良を加へたり。『十日物語』に見る所の人物は殆んど皆同樣の人物にして、彼等は單に物語を引き出さんが爲めに使用されたる木偶のみ。物語其物と之を語る所の人物との間には、何等緊切の關係なし。加ふるに苑内の蟄居は毫も活動を與へずして、變化の妙を認め難し。之に比すれば、チョーサーの選びたる巡禮的旅行は、甚だしく優れたる手段也。何となれば、上下貴賤、老若男女、思ひのまゝに別樣の人物を集め、以て物語と、物語る所の人物との間に密接の關係あらしめ得べく、又

(1)Florence.

『カンタベリィ物語』の結構は『十日物語』に優れり

物語以外に旅客の風丰、動靜、さては外界の狀態を描き、大に劇曲的趣向を逞うすることを得べければ也。『カンタベリィ物語』の中にて、今日人の心を動かす所は却つて此最後の點にありといふも不可なく、開卷の序詞は十四世紀英國の社會の繪畫として最も人口に膾炙す。

『開卷の序詞』は英國十四世紀の社會を繪畫也

チヨーサーは此序詞に於て旅行を共にすべき人物の風采特相をば一々精緻委曲の筆に描き出てたり。先づ現はるゝものは武士也。渠は當時の武士道の精華を一身に集めたる勇士にして、十字軍にも從軍し、生死の巷に出入する事十有五度、足跡は遠く亞細亞、亞弗利加の邊にも印せり。されど其態度は「溫順にして處女の趣あり」。傍には其子息なる若侍あり。年齒二十の美少年、其つけたる繡箔の華衣は「さながら紅白の美花に充ちたる牧野の如く」、舉止最も閑雅にして謙讓の德を備へ、或は歌ひ、或は笛を弄びつゝ、「快活なる事五月の空にも似たり。」父子の後へには從僕あり、所謂英國郎黨の好標本、胡桃の形せる頭を有し、毛髮は弓を曳くに便ならしめんが爲め

(1)A Knight.
(2)A Young Squire.
(3)Yeoman.

に短かく刈り込み、其顏はいたく日に燒けたり。次に現はるゝものは婦人にして、さる尼寺の主、名をエグランタインといふ。行儀作法に精しく、其食卓に就きたる時の態度は人の龜鑑となすに足り、指を肉汁(メーツ)もて汚し、胸に雫を滴らす等の不作法なし。又內地仕込ながら佛語にも通じ、容貌また卑しからず、鼻筋通り、眼は鼠色を帶び、口元緊りて前額廣し。たゞ餘り上品を氣取りて濟まし返すを珠に瑕とす。之につゞきて肥馬を步ますは、肥大にして赭ら顏せる一僧侶。當時の墮落しかけたる宗敎界の產物たり。其衣服の袖には最も贅澤なる栗鼠の革皮をつけ、學問も勉强も大嫌ひ、たゞ狩獵に愛身をやつす。宗敎界の腐敗は次に現はれたる托鉢僧にも認むべし。十三世紀には此種の僧徒は、社會の爲めに洪益をなせしが、チヨーサー時代には、本來の旨意を忘却して錙銖の末に心を馳せ、人の臍繰金を奪ふに心を勞せり。爲めにいかなる貧困の老媼も、この僧の甘言にかゝつては一文の貨幣をやらぬ譯には行かずとか。馬上に座

(1)Eglantyne.
(2)Monk.
(3)Friar.

(1)Merchant.
(2)Clerk.
(3)Sergeant-at-Law.
(4)Franklin.
(5)Haber-dasher.
(6)Dyer.
(7)Tapicer.
(8)Cook.
(9)Shipman.
(10)Doctor of Physic.
(11)Wife of Bath.

いて錢儲けの話に身を入るゝは商人也。雜色の衣服をつけ、海狸の頭巾をいたゞき、其長靴には銀の扣子を附けたり。之に續けるは牛津大學の一博識。其外套はいたく古るび、平生書物の爲めに貧す。其談話は緩徐にして、口數少なく、「必要ならざる事は一語も口にのぼすなし。」傍には狀師あり、絶えず、馬鹿に多忙なる樣子を帶ぶ。左に地主あり、顏は赧く「髭は白くして延命菊の如し。」平生來訪の客を歡待して、厨房必らず、獸肉と肉魚とを蓄ふ。此方には又小間物商あり、染工あり、毛氈商あり、又料理番あり。彼方の船頭は、千百の風濤を凌ぎ來れるも、馬背にありては頓に勝手の違ひたる樣子あり。次に醫博士あり。「天文學の素養あるが故に、」其療治の業は鬼神をあざむく。たゞ黃金を愛すること甚だし。一と際目立つは溫泉地の主婦也。彼女は呉服物の行商也。華衣を纏ひ、緋の靴足袋に新らしき半靴を穿ち、栖の如く大きやかなる帽子を冠る。五たび良人を持ちかへ、三たびヂェルーサレムに赴き、其他各地を歷遊し、海

(1)Parish Priest.
(2)Plowman.
(3)Miller.
(4)Reeve.
(5)Summoner.
(6)Pardoner.

チヨーサーは劇詩家小說家の資質を有せり

二十四篇の物語は中世の社會、中世の詩壇の

に千年、山に千年の白徒。之に續けるは、さる田舍の一貧僧、身を宗教に捧げて俗念を絶ちたる殊勝の心懸、當時の宗教界が、一方に墮落僧を生めると同時に、他面には尙ほ淸貧なる僧侶の殘存せるを示せり。之に續きては素朴なる農夫なり、骨格逞ましき磨家あり。其他、家扶、法廷勤務の呼出男、贖罪僧等あり。最後に作者自身あり。きらめく眼光に、人々の着たる裝束の異同をきはめ、尙ほ其下にかくれたる胸の秘密をも探らんとしつゝあり。

眞に驚歎すべき是等群衆の描寫は、當時の英國の狀態を活躍せしめ、いかにチヨーサーが觀察力に富み、批評的警眼を具へたるかを示せり。彼は單に書物の子を以て終り、舊るびたる物語を繰り返して止むものにあらず、直接に活社會を觀るの力量をも有せり。彼をして若し數世紀の後に生れしめば、劇曲家となり、又小說家となりしならんとは何人も想像する所也。

若しそれ其二十四篇の物語に至りては、渠が物語作者としての偉

殆んど全體に亘れり

(1)Paramon and Arcite.
(2)Teseide.
(3)Pollard.
(4)Griselda.

大なる才藻を發揮して遺憾なし。其種類甚だ多く、戀物語あり、譬喩詩あり、教訓詩あり、其他動物に關する昔噺、バラド、說教、旅客の奇譚等、中世の社會、中世の詩壇の殆んど全範圍に亘りて涉獵したりといふも不可なし。就中左の數篇は通常傑作を以て目せらる。

（一）武士のなせる『パラモン、アルサイト物語』[1]――こは『カンタベリィ物語』中の最長篇にして、絢爛華麗の點に於て優れり。ボッカッチョ作『テセード』[2]の譯なるが、些末の點に於ては差異多し。ポルラードの査べたる所にはれば、『テセード』は九〇五四行なるに、武士の物語は二〇五〇行に過ぎず。其中原文を譯したるは二七〇行にして、五〇〇行は單に原意を傳へたるのみなりと。以て其譯の頗る自由なるを見るべし。此詩の舞臺は古代希臘なれど、其精神は全然中世的にして傳奇的色彩を帶ぶ。

（二）牛津の博識がなせる『グリセルダ物語』[4]――此物語は元ボッカッチョの『十日物語』中に見えたる物語にして、中世時代には非常

(1)Story of Constance.

に持て囃されたり。但しチョーサーは直接にこの『十日物語』より採らず、ピートラルクの羅典譯を通して英譯せるものゝ如し。今日の道德の標準より見れば、グリセルダなる女性は頗る極端にして、同情を寄せ難き趣あれど、身を中世にをき、中世の婦女子の地位を考へて之を味はば、何人も感動せざる能はざる絶妙の佳話也。

（三）法律家のなせる『コンスタンス物語』[1]――原本は佛國にあれど作者は縱橫に加筆を施したり。英文學中最もあはれ深き物語の一也。

吾人は是等諸種の物語を讀み、チョーサーなる人物の甚だ圓滿に、平等に發達したる大人物なるを感ず、渠の筆は題目に從つて隨意に變化し、悲哀にも適し諧謔にも宜しく、或は優婉、或は諧謔、殆んど物として可ならざるはなきの概あり。盡し渠は詞章の彫琢などに心を勞するなく、有りの儘に其心鏡に映ずる所の者を直寫せり。これその筆のかくも縱橫自在なる所以也。此點に於てやゝ沙翁の面影を有せりといふべし。但しチョーサーの力量には限界あり。深さと高

チヨーサーは幅の廣さと深さとにおいては高さとたかさとに欠けたり

(1)Iambus.
(2)Heroic.
(3)Stanza.
(4)Couplet.
(5)Seven line stanza.

チヨーサーは內裏詩人也

さとに於て、遠く沙翁若くはダンテに及ぶ能はず。渠の性質の長所にして、同時に又弱點といふべきは、其餘りに圓滑平淡、談笑の間に日を消し、嬉遊の裡に年を送るを喜び、沈痛熱烈の趣を缺きたるにあり。彼の同情の赴く所は上流社會也。疫病に苦み。飢餓に叫び、憤懣、不平の氣鬱勃たりし一部英國の精神は、渠の詩中に毫も痕跡を留めざる也。吾人はラングランドの寫せる英國と、チヨーサーの寫せる英國との、全然異なるを感ず。他なし兩詩人の見る所同じからざれば也。ランングランドは平民の詩人にして、チヨーサーは內裏の詩人なれば也。

チヨーサーに就きて最後に一言せざるべからざるは、其韻律上に盡したる功績の大なる事是也。チヨーサーが最も普通に使用したるは五脚の[1]低昂格の押韻せるもの、所謂ヒローイック體是也。而して其[3]韻節は[4]二行節及び[5]七行節を多しとす。是等の韻律法は皆英國固有のものにあらず、チヨーサーが佛、以の詩歌を研究して之を英國に扶植

(1)Langland.

したるものにして、英國は爰に至りて初めて在來の頭韻法を脱却して、大陸の文學と伍するを得るには至れる也。この點のみにてもチヨーサーの詩は多大の貢献をなしたりといふべき也。

この時代の詩人にして、チヨーサーと對立すべき性質を有するものを、ラングランド[1]となす。チヨーサーが物語の詩に於て絶頂に達したる時、ラングランドは宗教の詩に於て絶頂に達し、チヨーサーが佛、以の文學を咀嚼して、よろづ進歩的なるに當り、ラングランドは頭韻律の古體を墨守して、之をその極度に發達せしめ、チヨーサーが一生の大部を得意の境に送りて、所謂內裏の詩人となりしに當り、ラングランドは窮乏の中に僅かに露命をつなぎつゝ、貧民の爲め鬱勃の不平を漏らせり。たゞし詩人としての技倆に於ては、ラングランドは偏狹固陋にして、到底チヨーサーと同日に談ずべきにはあらざるべし。

渠が一生の經歷は極めて明白ならず。一三三二年の頃に生れ、地

方にありて僧侶としての教育を受けしも、妻帶の爲めにや、終に高職に進む能はず、後龍動に來りて、寺院の樂手に雇はれ、辛くも妻女を養ひつゝ、多く人に知られず、又知らるゝを願はず、十四世紀の終ると共に、その行方を失へり。

斯くの如く、ラングランドは、平生普通人民の間に伍し、よくその事情に通曉せる所より、時の宗教界の腐敗と社會の弊習とに憤慨して、かの『[1]ピールズ・プローマンの夢』を草せり。例の中世の詩篇の常套に陷り、夢を借りて譬喩的に叙述し、慈善、眞理、私慾等の無形物をば篇中の人物となし、大體に於て、かの十七世紀に有名なる[2]バンヤンの『[3]天路歷程』に類似せり。全篇數齣に分れたれど、各齣の連絡明亮ならず、繁雜にして、作者の趣意を捕捉し難く、今日の人士には充分の感興を與へ難し。蓋しかれはミューズの子にあらず、その訴ふる所は普通の人民にして、その達せんとす所は、倫理、宗教上の目的也。これその詩が結構の緊肅、辭句の精錬等に殆んど

ランドはミューズの子にあらず

(1)Vision of Piers Plowman.
(2)Bunyan.
(3)Pilgrim's Progress.

何等の注意を拂はざりし所以なるべし。

ジョン・ゴワー[1]は、その生時に於ては詩人として殆んどチョーサーに匹敵すべく思惟せられしが、今日にありては、却てその眞價以下に貶謫せられ、單調、平凡、無味、乾燥なりと評せらる。蓋しゴワーは學者にしてチョーサーは天才也。到底兩者を同一に論ずべきにあらねど、その當代の一般の拙惡なる詩人中にありて、ゴワーは少くとも一頭地を抽きたるは明かなり。渠はチョーサーに比すればやゝ舊派に屬し、獨り佛蘭西の影響を見るべきのみにて以太利の感化には接せざりき。ゴワーに五十篇の戀愛詩あり。皆佛語を以て草したり。後老境に進むに從ひて嚴格着實の人物となり、詩を作る側、一方には社會上宗教上の改革を企てたり。されば

ゴワーとチョーサーとの比較

(1)John Gower.
(2)Speculum Meditantis.
(3)Vox Clamantis.
(4)Confessio Amantis.

ラングランドとチョーサーとを合せて、之を二分せるが如き性質なり。ゴワーの大作は三篇あり。即ち『[2]スペキュラム・メディタンティス』『[3]ボックス・クラマンティス』『[4]コンフェッシオ・アマンティス』是れ也。渠

が作は當時の亂雜なる英文學界の狀態を見るに可也。何となれば、右の三著は盡く別樣の國語を以て草せられたれば也。即ち第一は佛蘭西語を以て草せられ、第二は羅典語、而して第三は英語を以て草せられぬ。第一は久しく滅びたりと想像せられしが、近來に及びて劍橋大學にて發見したりとか聞けり。第二は夢物語にして、當時の惡弊をば列擧せる說敎めきたるもの也。第三の英語の作が最も貴重にして序詞一篇、物語の詩八篇より成る。一人の戀になやめる男が、女神[1]ヴィナスの許に使はれ居る天使に向ひ、わが戀の顚末を自白する物語にして、男の懺悔譚は絕えず天使に由りて遮られ、戀愛の說明の爲めに一百十二の物語をなす。是等の物語は、前篇に陳べたる『ゲスタ・ロマノールム』より借り來れるもの多けれど、兎に角英文界に於て未だ嘗て見ざりし物語の叢書たり。物語の方法は、讀者を誘て倦怠を催さしめ、殊に韻律の變化に缺ぼしきが爲めに、いよいよ睡魔を誘へど、その用語は東部中國語にして文體も又純潔なりと

(1)Venus.

稱せらる。されば[1]ゴワーが今日貴重せらるゝ所は却てその文字の上にあり。

散文

英國の詩歌が、十四世紀に於て、かくの如く盛隆を極めつゝあるに反し、散文が未だ微々として振はざりしは、既に述ぶる所の如し。チョーサーの如きも、『カンタベリィ物語』中の二篇を散文もて草したれど、無力散漫にして小兒の片言の如く到底その詩と對抗すべくもあらざりき。されど後世發達せる散文の基礎は同じくこの時代に置かれたり。

この時代の散文家中最も貴重なる作者をジョン・ウィクリッフとなす。[1]ウィクリッフの經歷は英國史上に顯著なる事實にして、當時の精神界に大關係を有せり。ノルマン征服後次第に勢力を扶植し來りたる羅馬敎徒は、この時代に及びて次第に腐敗して放縱壓制の擧動多かりしかば英國民一般に之を蛇蝎視し、反抗の氣焰熾なりき。かのチョーサーの如きも『カンタベリィ物語』の中に宗敎界の改革を要すべき

(1)John. Wyclif.

を諷し、又ランングランドも、自から舊教の信者ながら、尙ほ當時の英國の僧侶に對して、攻擊の論鋒を向けき。然れども公然羅馬法皇に向つて反抗の聲を放ちたるはウィクリッフなりき。渠は純然たる後日の清教徒に屬し、法皇の權力を非定し、巡禮、贖罪等盡く之を排斥し、信奉する所は唯一の聖書あるのみ。身牛津大學の教鞭をとりつゝ、學生に向つて改革の空氣を鼓吹し、又一三七八年頃よりは、聖書を飜譯せんと決心し、自から筆を取りて新約全書の全部と舊約全書の一部を譯したり。是れ實に後の英譯の聖書の原本となりしものにして、その用語は純粋の東部中國語にはあらねど、極めて之に近く、國語の固定と整理の上に及ぼせる影響も、その宗教界に與へたる影響に劣らざるものありき。

公然舊教に反抗の聲を放つたるはウィクリッフ也

ウィクリッフの聖書譯文は國語固定の上に大貢献なりき

ウィクリッフは又、舊教徒との論戰中、陸續として論文を草し、廣く一般の人心に訴へ、國民の輿論を喚起せり。その論文は乾枯なる學者的死文にあらずして、簡潔、鋭利、聖書と全じく日常の言語を驅使したり。この方面に於ては渠は後の實用的論說文の先驅をなせりといふべし。

次ぎにトレヴィサのジョンなる人あり。渠はラルフ・ヒグデンの『ポリクロニコン』[1]といへる史筆の英譯を以て知らる。この時代の散文中尤も文學的興味を帶びたるものを『マンデヴィル旅行譚』[2]となす。其作者明かならず。名を旅行記にかりたれど、實は架空の物語にして、マンデヴィルと稱する奇人物が實際に存在したるにあらず。例へば、かの『ロビンスン・クルーソー』[5]など、全じく、多く作者の想像に基けるものにして、その物語の信ずべからざるは前時代に出でたるジェフリィの英國史の信ずべからざると相似たり。頗る奇譚に富みたる書にして、元はバァーガンディのジョンなるものが、一三七一年の頃佛語もて書したるを、數年の後にいたりて、無名の作者に由りて英語に飜譯せられたる也。散文として、當時にありては實に比類なき優美と流麗とを有したる好著也。

(1)John of Trevisa.
(2)Ralph Higden.
(3)Polychronicon.
(4)Travels of Sir John Mandeville.
(5)Robinson Crusoe.
(6)John of Burgundy.

（研究書目）

（一）チョーサーの詩集の刊本は甚だ多けれど、スキートの刊行にかゝるもの最も名あり。

Complete Works of Chaucer, edited by Skeat, 6 vols. (Clarendon.)

The Student's Chaucer, edited by Skeat. （仝上）序說あり、又頗る詳密なる語彙ありて手頃也。又小分して刊行されたるもあり。即ち、

Prioresses Tale, Monk's Tale, &c. （仝上）

Tales of the Man of Law, &c. （仝上）

Prologue to the Canterbury Tales. （仝上）

House of Fame. （仝上）

Legend of Good Women. （仝上）等是也。

Canterbury Tales, edited by Pollard (Macmillan.) 之には序說と註解とあり。

A Primer of Chaucer, by Pollard. （仝上）

Chaucer's Stories Simply Told (Nelson.) 之は平易なる近代語とて、單に物語の筋を傳へたるもの。この種のものにては、この他にも、

Chaucer's Pilgrimage, epitomised by Calder (Blackwood.)

Chaucer for Schools, by Mrs. Haweis (Chatto.) 等あり

チョーサーの評傳には、

Chaucer, by Pollard (Macmillan.)

Chaucer, by A. W. Ward, E. M. L. Series. （仝上）

My Study Windows, by Lowell (Scott.) 中の『チョーサー論』

English Literature, by T. Brink, Vol. II. (Bohn.) 等を推すべきか。

（二）ランランドニアテは、

The Vision of William Concerning Piers the Plowman, edited by Skeat (Clarendon.)

The Vision of Piers the Plowman, done into Modern English, by Skeat (De la more Press.)

English Writers, by Morley, Vol. I. (Cassel.)

（三）その他の諸家は、

Complete Works of John Gower, 4 vols. (Clarendon.)、詳しくは（1）French Works, (2)(3) English Works, (4) Latin Works. 是也。

Wyclif's New Testament, edited by Skeat (Clarendon.)

Wyclif's Books of Job, Psalms, &c., edited by Skeat. （仝上）

Travels of Sir John Mandeville, (Macmillan.)

Sir Gawain and Green Knight, retold in Modern Prose, by Weston (Nutt.)

（四）當時の國語を研ずるには、

English Language, by Marsh (Murray.)

English Language, by Lounsbury (Bell.) 等あり。

第四篇　中世の末期

（一四〇〇年――一五五〇年）

英國は十五世紀に於て文藝復興の大潮流に加入せり

此時代の概觀――文藝復興の精神――希臘學の研究熱――活版術の發明――カックストン――事業界の活動――宗教界の動搖――十五世紀の詩壇――オックリーヴ――リドゲート――十五世紀の散文――ピーコック――キャプグレーヴ――マロリィの『アーサー物語』――散文の發達――モーアの『ユートピア』――ティンダルの聖書譯――バーナーズ其他の作者――詩壇の新聲――ワイアット――十四行體の輸入――サリィ――無韻詩の嚆矢――蘇國の詩壇――バアーブル――ハアリィ――ゲエームス一世――ヘンリスン――ダンバアー――ダグラス――リンゼィ――（研究書目）

この時代の概觀　チョーサー時代に一大飛躍を試みたる英文學は、十五世紀に入るに及びて俄然凋落し、滿目荒涼、後世の人士を動かすべき大傑作は殆んど跡を絶ち、文學史上の最不生産時代として名高し。但し十五世紀は人文發達の史上には極めて肝要の時代也。何となれば英國は此世紀に於て所謂文藝復興の大潮流の中に全然加入するに至りたれば也。そもこの新機運は、中世の事物が萬づ神學的

中世の封建的社會は戰爭によりて崩壞せり

(1) Henry VIII.

臭味を帶び、偏狹固陋の風あるに激して、擅に自由の討究を試み、未知の新原理を開拓せんとせる精神界の大波動にして、其範圍の及ぶ所甚だ廣く、獨り文學美術のみならず、人生に對する意義、宗教、學問等全般に亘りて根本的大變動を惹起し、餘勢滔々として引いて今日に至りぬ。

此文藝復興の潮流　が初めて英國に達したるは十四世紀の終にして、即ちかのチョーサーは詩人として之が先驅をなし、又ウィクリッフは宗教家として其先鋒たり。然れど當時は單に一二先覺者の間に限られたるのみ、全國に普及したりとは言ひ難かりき。中世の封建的社會が、眞に根底より崩壞したるはかの薔薇戰爭（一四五五――一四八五年）以後の事にして、文藝復興の新精神が勢力を張るに至りしは其後の事也。而かも最初は新舊兩思想の交代に急がはしく、其結果は甚だしく文學の不振を惹き起しぬ。十六世紀ヘンリィ八世の朝に入るに及びて、初めて文學の花を咲かすに至れり。余は簡單に、

希臘學の研究

(1)Chrysoloras.
(2)Florence.
(3)Constantinople.
(4)Padua.
(5)Bologna.
(6)Cornelius Vitelli.
(7)William Grocyn.

此新精神が各方面に波及し行きたる徑路を述べんとす。

文藝復興の精神が第一に惹起したるは、希臘學の研究熱是也。希臘に關する凡ての智識は、中世時代には全然缺乏し居たりしが、一三九五年[1]クリソローラスなるもの初めて[2]フロレンス市に來りて希臘語を敎授せり。今迄煩瑣なる中世の死學に飽きたる人士は、多大の感興を爰に見出し、之より之を研究するもの次第々々に增加し行けり。次ぎて一四五三年[3]コンスタンティノープル市の陷落せるあり。今迄同市を根據とせる希臘の學者、騷人輩は、爭ふて難を以太利に避け、同時に貴重なる騰寫本をば同國に輸入しぬ。斯くの如くにして、以太利は歐州全般の學校となり、英國學者の多數も、[4]パヂューア、[5]ボローンニャ、又はフロレンス等に赴きて頻りに研究を積み、歸りて之を牛津、劍橋の大學に於て授けぬ。以太利の亡命者[6]コルチーリアス・ヴィテリが、牛津大學に於て初めて希臘語を敎授せるは一四七五年以前の事也。一四九一年に至り、[7]ウィリアム・グローシン之に

活版術の發明

(1)Thomas More.
(2)Utopia.
(3)Mainz.
(4)Gutenberg.
(5)Cologne.
(6)William Caxton.

つぎて希臘語の講座を擔任せり。グローシンの敎へたる學生中には[1]トマス・モーアあり。後年かの有名なる『[2]ユートピア』を著はして、盛に此新精神を皷吹しぬ。見るべし文藝復興の新機運が、以太利より起りて英國に傳はり、學者より出でて文學者の手に渡り、以て次第〳〵に天下に瀰漫するに至りし事を。

其頃又活版術の發明あり、新學問擴張の上に大影響を與へたり。木版は久しき以前より使用され居たるも、活字を使用するに至りしは、一四三八年獨逸[3]マインツ市のグーテンベルヒを以て嚆矢とす。之より活版事業は同市に於て發達の緒に就きしが、一四六二年同市が敵兵の爲めに切掠せらるゝに及び、活版技師は四方に散布し、活版術を歐洲全般に傳ふるに至れり。即ち一四六六年には羅馬に入りて今日の羅馬字型、イタリック型等を作らしめ、六九年には巴里に入り、七〇年には[5]コローンに入り、而して七六年前後に於て英國に入りぬ。此輸入者は即ち[6]ウィリアム・カックストン是也。カックスト

活版に附せる第一の書

(1)Kent.
(2)Burgundy.
(3)Recuyelle of the Historyes of Troye.
(4)Morte d'Arthur.

ンは一四二一年頃[1]ケント洲に生れ、さる龍動の呉服商に雇はれしが、[2]主人の死後和蘭に赴き、一四六二年より六九年迄同地に住める英國商人の管理人なりき。かゝる中に[2]バルガンディ公爵夫人（英王エドワード四世の妹）に仕ふる事となり、同夫人の命に由りて、一四七一年、『[3]トロイ史叢』を譯して之を活版に附したり。これぞ英文の書物にして活字に刷られたる嚆矢なりける。かくてカックストンは外國に留まる事三十餘年の後、一四七六年頃を以て英國に歸り、活版業を開始したり。彼が出版したるは皆英語の書にして、或は自から筆を執り、或は諸種の傑作を選びて出版したりしが、古書は之によりて散逸を免れ、又書物は上下一般に普及するに至り、其功德あげて數ふべからず。其一手に出版したる書冊凡そ九十九種、祈禱の書、詩歌、歷史、傳奇物語、倫理、風俗、俚諺、昔噺、遊戲等の各方面に亘りぬ。マロリィの『[4]アーサー物語』の如き、チョーサーの『カンタベリィ物語』の如き皆渠の出版にかゝれり。カックストンの使用

事業界の大發見

(1)Black Letter.
(2)Dias.
(3)Vasco da Gama.

したるは[1]黑活字即ちゴチックと稱するものにして、今日も書物の標題などに使用せらる。今日普通に使用せらるゝものは皆以太利の創造にかゝれり。

學問界にかゝる活動の行はれつゝありし間に、事業界にも前代未聞の大發見は續々としてなされぬ。即ち一四八六年には[2]ディーアース初めて喜望峰を發見し、一四九二年には、コロムブス初めて渺茫たる大洋の彼方に米國を發見し、次いで一四九八年には[3]ヴァースコ・ダ・ガーマー喜望峰を廻りて新航路を印度に開通せり。何れも破天荒の事業ならざるはなく、その當時の人心に與へたる刺激の大なりしは知るべきのみ。今や活動の機會は彌が上にも增加し、人の飛躍すべき地球の大舞臺は以前に數倍し、四空は珍奇不可思議の氣に充ちく、冒險家は何れも我れ先きに黃金の市街、不老の靈泉を探り當てんと、眠らざるに空夢を逞ふして四方に飛べり。かゝる夢幻的活動の時世はこの前後をおきて他に求むべからざる也。

宗教界の動搖

(1)Martin Luther.
(2)Tyndale.
(3)Elizabethan Age.
(4)The Cuckoo and the Nightingale.
(5)The Flower and the Leaf.
(6)Mercileess Beaute.

宗教界も同時に此新精神の影響を受けて刷新の機運益々加はり、獨逸の森に起れるルーテルの怒號は、英國の海邊にも盛なる反響を興へぬ。かくてティンダルの聖書の飜譯となり、ヘンリィ八世の羅馬法皇との斷絶となれり。

之を要するに英國は十五世紀より十六世紀の初半に當りて、文藝復興の精神を吸收し行き、學問界、實業界、宗教界等の方面に於て先づ之を發露し、終に次ぎのエリザベス朝に達して遺憾なく之を文學の上に披瀝したる也。余は之より後に戻り、簡單にこの時代の文學を說かんとす。

十五世紀の詩壇

從來チョーサーの作と傳へられたる詩篇にして、今日の學者の否定するもの頗る多し。是等は皆十五世紀の前半に作られたる物にして、其數凡そ五十にのぼれり。是等の中にありて、傑出したる者は『郭公と夜鳴鳥』『花と葉』『無情の美人』等にして、是等は殆んどチョーサーの作として耻かしからぬものと評せらる。

(1)Thomas Occleve.
(2)The Governail of Princes.

兎に角にかく模擬的詩篇の多きを見れば、當時の詩人が新機軸を出すかはりに、偏にチョーサーの後塵を追ふて得々たりしを察知すべし。

模擬詩人中にありて尤も人に知られたるを、オックリーヴ及びリドゲートの二人となす。但しこの二人の姓名の長く傳はるものは、その作の優れたりといふよりも、寧ろその作の多數なると、他に傑出せる作者の絶無なるとの爲めも也。何れもチョーサーの神髓を捕捉し得ず、單に外形の末のみを模倣して得々たりしは、我朝の歌人輩が古今萬葉の糟粕を嘗めて得々たるに似かりき。二人の中オックリーヴは、やゝ年長にして、龍動に生れ、チョーサー卒去の際には三十以上の人物なりき。資性柔弱にして、さながら婦女子の如く、やゝ發狂の氣味あり。その詩冗漫にして單調、殆んど取るに足るものなく、たゞ一四一三年に出せる『君王の統御』と題せる詩篇の中に、崇拜の情を滿へたる筆もて師チョーサーの面影を描き出てたる邊は、充分その勞を謝すべき價値あり。

(1)John Lydgate.
(2)The Troye Book.
(3)Storie of Thebes.
(4)Fall of Princes.

リドゲード[1]は、前者に比してやゝ詩才あり。渠も亦チョーサーを捕へて師父と仰げど實はチョーサーの門下とは稱し難く、その專ら隨喜せるものは、十四世紀に流行せる佛國の傳奇的作風にして、即ちチョーサーが晩年脱却放棄せる所をば又も拾ひあげたるに過ぎざりき。渠に於て驚くべきはその作の多量なることにして一萬三千に下らずと稱せられ、その詩材は歴史、傳説、宗教、物語等の各方面に亘りて、縱横多端なれど、大部分は未だに印刷に附せられず、渠が作の全部を通讀したるものは天下にたゞ一人も存在せざる也。渠に於て最も成効に近きはその物語の詩也。その中重もなるものは凡そ三あり。第一は『トロイの詩[2]』にして、羅典文のトロイ史を飜譯せるもの、第二は『セイーブス物語[3]』にして佛蘭西語の傳奇的物語より飜譯せり。第三は『君王の末路[4]』にしてその原文はボッカッチョの筆に成れり。アダムの時代より、佛王ジョンが捕虜となりたるまでの不幸なる王、女王などの末路をとき、リドゲート作中の最傑作にして、

(1)Reginald Pecock.
(2)Repressor of Overmuch Blaming of Clergy.
(3)Book of Faith.

後世の作家に多少の影響を與へたり。

最も卓絶したりと稱する二人にして斯くの如くんば、他の群小作家に至りては大抵察知すべきのみ。十五世紀の後半の如きは、一層甚だしく、辛くも詩の命脈を維げりといふに過ぎず。毫も注意にのぼすべき作者なし。

十五世紀の散文

十五世紀前半の散文が、詩と同じく取るに足るものなき事は既に說きたるが、たゞ散文は前時代にさまでの隆盛を見ざりしが故に人をして特に衰頽の感を起すに至らしめず。且つこの時代に至りては、散文は不完全ながらも大に實用に供せられ、その用途は前世紀に比すれば遙かに增大して宗教上の論議、說教、書簡、哲學等種々の方面に跨り、しきりに錬習を積みつゝありき。

最初に注意すべき散文家はピーコック[1]と呼べる僧也。ウィクリッフ派に屬する聖書黨（ロラルド）と議論を鬪はし、詭辯を以て之を攻擊し、一四四九年『過激なる教理攻擊者の撲滅策[2]』を草し、後又『信仰の書[3]』を

(1)John Capgrave.
(2)Chronicle of England.
(3)Sir Thomas Malory.
(4)Morte d'Arthur.

出せり。渠は是等の書の爲めに一身上には奇禍を買ひしも、英語を以て議論文を草し始めたるを以て、英文學史上にその名聲をとゞむ。但しその用語の如きは粗硬駁雜を極めたるものなりき。

ピーコックが英語を宗教上の議論に使用せるに當り、キャプグレーヴは之を史筆に使用せり。その著『英國史』は蓋し十五世紀の中葉に成りしものにして、一四一七年に至る迄の事件を載錄せり。その文體は單調にして、特に推薦するに足るものなけれど、たゞ歷史上の價値は甚だ高し。此世紀の前半に於て注目すべき散文家はこの二人のみ。

散文が空前の大飛躍をなし、一百年前チョーサーなどの手に由りて詩壇の新聲を擧げたるにやゝ比較すべき事件は、十五世紀の後半、即ち一四七〇年前後に於て起りぬ。此大命を帶びて生れたる作者をトマス・マロリィとなす。マロリィの傳記は全く湮滅して傳はらず、たゞ其著はせる、『アーサー物語』の一篇が千古

(1)Spenser.
(2)Milton.
(3)Dryden.
(4)Tennyson.

『アーサー物語』は千古に亘りて益々光彩を放つを見るのみ。是より先きアーサー王に關する傳說が廣く一般の好尙を動かし、無數の詩篇が之につきて作爲せられたるは既に說く所の如し。今や英國の散文が漸く整理し行きて物の役に立たんとせる十五世紀の後半期に至り、マロリィは此偉大なる物語を捕へ、優れたる技倆もて、錯雜混淆せる無數の材料を統一し、整然として一絲紊れざる秩序と、平易優美なる文字とを以て、いとも巧みに說き出てぬ。マロリィの後に於て此物語に筆を染め、若くは筆を染めんと試みて果たさゞりし詩人の中重もなるものは、スペンサー、ミルトン、ドライデン、テニスン等の巨匠なるが、是等の中の何人もマロリィの散文物語を壓倒し得たるもの、若くは壓倒し得べしと想はるゝものありや否やは、學者の均しく疑ふ所也。こは必らずしも是等の作者達が、才藻に於てマロリィに劣るとにはあらねど、たゞマロリィは中世の末期に生れて中世の空氣を吸ひ、荒唐無稽の奇談に對しても毫も疑議を挿まず、例へば小兒の如き想

像を抱けり。換言すれば、マロリィは後の作者に對して時の利を占めたり。かるが故にその物語には到底後の作者の學び難き美所を有する也。

マロリィの『アーサー物語』出てゝ英國散文界は初めて眞に見るべき大作を得たり。この頃又カックストン出でゝ散文を物したるは既に述べたる所の如し。

十五世紀の後期に於てかく發達の緒につきたる散文は、十六世紀に入るに及びて益々活動の機運に向ひ、文學上幷びに實用上に使用せらるゝに至りぬ。之を詩壇に比すれば實に一歩を先んじたり。因て順序として余は先づ散文を說かんとす。

十六世紀前半の散文の大家は二人あり。物語作者としてトマス・モーア、聖書飜譯家としてウィリアム・ティンダル是也。モーアは一四八〇年を以て生れ、牛津大學に入りて法律を學べり。渠は今日文學者として知らるれど、他の方面に於ても亦非凡の技倆を有し、學者、

マロリィは他の作者に對して時の利を占めたり

十六世紀前半の散文家の二大散

(1)Thomas More.

法律家、政事家、宗教家、交際家として決して人後に墮ちざりき。早くよりヘンリィ八世の寵幸を受け、王は平常モーアの居宅を訪問して親交を結べり。モーアは又、かの仁愛派の泰斗エラスムスが滯英中、互に友として交遊し、爲めに其感化を受けたる事大なりしも、たゞ渠は熱心なる舊教信者にして當時漸く盛ならんとせる宗教改革派の撲滅に盡力せること少々ならざりき。但しかゝる英才も、終には君主の逆鱗をば免るゝによしなく、ヘンリィ八世が皇后カサァリンを廢してアン・ブッリンを立てんとするの擧に反對せるが爲めに、先きの寵幸は忽ち消え、一五三五年叛逆の惡名の下に死刑に處せられたり。その時モーアが畏縮せる斬頭手を勵まし、從容として死につけるの美談は、後人の長く歎賞して止まざる所たり。

モーアの傑作は『ユートピア』の一篇にして、この時代の精神を最もよく代表し、文藝の復興が、人生、社會、政治、宗教等に關して如何なる風潮を起さしめたるかを窺ふべし。この篇描く所は海上

(1)Erasmus.
(2)Catherine.
(3)Anne Boleyn.
(4)Utopia.

『ユートピア』は最もよく文藝復興時代の精神を代表せり

の理想國の狀態にして最上の幸福を享受し得べき社會組織を想像し、以て當時の社會と反映せしめて諷刺の意を寓せる物語也。その所論、時に人情に反し、一の空想に陷りたるものなきにあらねど大部分は時弊に的中し、社會改良の上に貢獻せる所僅少ならざりき。たゞ爰に惜むべきはモーアの原著が羅典語を以て草せられたる事にして、爲めに英文學に屬するものと言はんよりは、廣く世界の文學に屬するの觀あり。一五五一年に至りラルフ・ロビンスンの手に英譯せられ、この譯は今日に至るも世に行はる。モーアは又英語を以てエドワード五世、リチャルド三世等の時代の歷史を草し、文體の優美と史的價値とを以て名あり。

ティンダルの聖書飜譯の大成

されどウィリアム・ティンダルは散文家としてモーアよりも貴重なる事業をなせり。即ち近世散文は渠が聖書の飜譯によりて一層確然たる基礎を得たり。ティンダルは一四八四年前後を以て生れ信仰心堅固にして學識該博、熱心なる宗教改革論者として屢々保守的なるモー

(1) Ralph Robinson.
(2) William Tyndal (e).

ア其他の論者と論戰を試みしが、舊教徒の迫害に耐へ難く、一五二四年英國を去りて獨逸に遁るゝの止むを得ざるに至りぬ。獨逸に滯在中ルーテルと會し、その奬勵によりて頻りに新約全書の飜譯をつゞけ、一五二六年アントワーゾに於て之を印刷に附したり。更にウィリアム・ロイ、及びデョン・ロデャーズ等の助力を得て舊約全書全部をも飜譯し終り、聖書全部は是に於て英國に擴布するに至れり。ティンダルの飜譯は多くはウィクリッフの譯を根據としたれど、其用語は遙かに近世的にして今日の英語と異なる點甚だ少し。即ちティンダルの譯出でゝ後は、根本的の變更なく、たゞ些少の訂正を加へられたるのみ。爾來聖書が何れの家庭にも備へられ、英文の標準、思想界の源泉として貴重せらるゝを見ても、ティンダルの文學史上に於ける位置の如何は察する難からざるべし。一五三六年ティンダルは終に捕縛せられ、アントワープの近傍に於て絞罪に處せられたり。

モーア、ティンダルの外にも前後に優れたる散文家輩出して、英語

(1) Antwerp.
(2) William Roy.
(3) John Rogers.

を發達固定せしむるに貢献をなしたり。即ちバーナーズはヘンリィ八世の囑を受けて佛蘭西の史家フロイッサールトの作を譯しぬ。此書は當時の英、佛、蘭等の諸國に起れる重大事件を記せるものにして興味深きは世人の知る所なるべし。譯文も亦純正にして當時英國散文の好目標たり。其他エリオット、クランマー、ラティマー等の作者出でゝ、物語及び宗教に關する著作を殘せり。

散文がかく一方に活動しつゝありし間に、詩壇はしばらく舊風を墨守して小活動に安んじ居たり。當時の詩人中重もなるものをスティーブン・ハッズ及びヂョン・スケルトンとす。ハッズはヘンリィ七世の朝に屬す。獨創の詩才なかりしも、文學的趣味を有し、文筆に親めり。其傑作を『遊樂の快』といふ。かの『薔薇物語』に學びて作れる譬喩詩也。スケルトンも最初の中は譬喩的詩篇に筆を染めしも、後には時事に感じて、宗教改革の意見を抱き、連りに諷刺の筆を振へり。時に又抒情詩を作りて清新の氣を吐露せり。

詩壇の新聲

(1)Bernerse.
(2)Froissart.
(3)Elyot.
(4)Cranmer.
(5)Latimer.
(6)Stephen Hawes.
(7)John Skelton.
(8)Pastime of Pleasure.

その手に成れる『フィリップ・スパローの歌』と言へるは、一人の尼が愛養せる雀兒の猫に殺されたるを傷める小品にして、エリザベス朝に起れる抒情詩の先鋒と稱せらる。エラスムスは渠を指して「英文界の明星」と歎賞し、カックストンも亦英語の發達が、スケルトンに負ふ所大なるを說きゝ。されど要するに英國の詩壇はサリィ、ワイアットの二人が、ヘンリィ八世の朝に出でゝ新聲を放つに及びて、初めて眞の活動を始めたり。

トマス・ワイアットは一五〇三年に生れ、一五四二年に死せり。名族の子にして、早くよりヘンリィ八世の寵幸を受けぬ。年十二劒橋大學に入り、十五業を卒へ、十七の時マスターの學位を受け、卒業後は直に妻を迎へて朝臣の列に加はれり。身材偉大、眉目清秀、裁決の力に富みたれば、外交官として屢々以太利、西班牙、和蘭等に赴き、かくて文藝復興期の南歐の文學と接觸するの機を得ぬ。ワイアットが詩人としての功勞は、大陸に行はるゝ韻律を輸入せるにあ

(1)Philip Sparrow.
(2)Thomas Wyatt.

サリィ、ワイアットの二家が出るに及びて英國詩壇は初めて活氣を呈せり

り。かの十四行體の詩は實にワイアットが初めて英語を以て試みたる所にして、試作として、誠に歎賞すべく、その他小唄、歌謠等多く以佛の詩人より學びぬ。

されど伯爵サリィの貢献せる所は更にワイアットに越えたり。サリィはノーフォーク公爵の子にして一五一七年を以て生れ、かのアン・ブッリンの從弟に當れり。渠は幼少の頃よりワイアットと親交あり、生を終る迄友愛の情に於て變化する所なかりき。されば渠が詩壇の新機運に接觸するに至りしは、ワイアットに負ふ所大なりといふべし。たゞし是等二人は外貌に於ても又性質に於ても全く相反し、ワイアットが優美巧慧なるに反じ、サリィは軀幹短大、その擧動粗野にして應接の狀は全く軍人的臭味を帶び、而して內心は寬厚にして情に厚かりき。早くより身を軍籍におき、重要の職に就きしが、その門閥の高きと、その直言直行の資性とは渠をして多數の敵を有するに至らしめ、殊にアン・ブッリンの不名譽なる私行はその一門全體に

(1)Sonnet.
(2)Henry Howard, Earl of Surrey.
(3)Duke of Norfork.

ワイアット、サリィ二人の功績

向つて痛擊を與へたり。ヘンリィ八世はその後サリィの同族なるカサァリンと呼べる女子を擧げて皇后となせしも、これ又アンにも劣れる不行跡の爲めに頭を刎ねられたれば、その後は家道益々振はず、幾もなく反逆の嫌疑を被りて獄裡に投ぜられ、一五四七年を以て死刑に處せられたり。

渠が短生涯は斯くの如く慘憺たりといへども、詩人としては、大に成効しぬ。之をワイアットに比すれば、遙かに詩人としての情熱に富み、婦女に對する戀々の情、若くは失戀の悲痛等は毫も隱蔽することなくありの儘に露出して顧みず。故を以て其詩の讀者を動かすこと遙かにワイアットに越えたり。その作りたる十四行體、哀歌その他諸種の抒情詩皆價値あるものなるが、就中顯著なる功績は五脚の無韻詩を英文界に輸入したることにして、渠は無韻詩を以てヴァージルの『イニイド』の第二卷及び第四卷を飜譯せり。その後無韻詩が如何に重要なる英詩の多數に用ゐられしかを見れば、サ

(1)Elegy.
(2)Blank verse.
(3)Virgil.
(4)Aeneid.

リィの功勞の大なることは容易に知ることを得べし。但しサリィといひ、又ワイアットといひ要するに試驗時代の作者のみ。彼等は英語をば如何の程度迄發達せしめ得べきかを試みたるのみ。されば其の價値は寧ろ歴史的にして、餘りにその技倆を過大視ぜば、その作を讀みて失望を免れざるべし。この兩人の作は多くは戀愛に關するものなるが故に彼等は戀愛詩人の名稱を附せられたり。

(1)Amourists.

余は叙述の混雜をさけんが爲めに、今迄蘇國の詩壇につきて一語を費さゞりしが、實は十四世紀チョーサーの時代よりも時々傑出せる詩人を出し居たりし也。爰に注意せざる可からざるは、蘇國の人民が甚しくケルティック人種の血液を混へ、從つて其詩がケルティックの特色を帶びたること是也。（總論參照）例へば彼等が天然に對して强烈なる崇拜の情を有し、蘇國田園の光景をば五彩燦爛たる筆に寫せるが如き、さては其詩風概して輕妙を喜び、詼諧の風味を帶びたるが如き是也。尙ほ蘇格蘭は平生英國の壓迫を受け居たる

蘇格蘭の詩壇

ケルト人種の血を混へたり

結果として、其詩も概して孤憤反抗の氣を帶び、專ら自國の勇者を謳歌し、自國の山水を自慢して、殆んど他を顧みざるの風あり。さて蘇國が十四世紀より十六世紀の初半までに生みたる詩人の重もなるものを擧ぐれば、凡そ七人あり、曰くバァーブル、曰く盲詩人ハァリィ、白くヂェームス一世、曰くヘンリスン、曰くダンバァー、曰くダグラス、曰くリンヂィ是也。

(1)John Barbour.
(2)Bruce.
(3)Blind Harry.
(4)William Wallace.

蘇國が第一に生みたる詩人をジョン・バァーブルとなす。渠は一三七五年より七七年の間に於て其長篇『ブルース』を作れり。ブルースは蘇國の勇士にして單身三百の敵兵を防ぎとめたる豪傑也。バァーブル之を主人公として、以て蘇國の獨立を歌ひ充分に國粹を發揮せり。

次ぎに盲詩人ハァリィあり。一四六一年頃、『ウィリアム・ウラス』の長篇を草す。ウラスも亦蘇國の英雄にして、敵愾の精神は更に激烈に楮表に表はれたり。蘇國の詩人にしてヒローイック體を用ゐた

(1)James I.
(2)King's Quair.
(3)Windsor.

るはこれに始まる。

ジェームス一世の『キングス、クウェーア』にいたりては、チョーサーを學びて尤もよく其の神髓を傳へ、而も自己獨特の色彩の美を有し、自然界の描寫の筆の細緻を極めたる、又純潔にして情思湧溢せる、十五世紀の詩壇、蘇英兩國を通じてよく之に及ぶものなし。この詩を作るに至りたる動機は極めて小說的にして、それ自身に於て既に一篇の詩也。王は蘇國の王ロバート三世の王子なるが、一四〇五年、その十一歲の時、父王の仰を受けて佛國に送られぬ。當時蘇英兩國は休戰の間なりしが、之にもかゝはらず、王子の船のフラムバロー岬の沖にさしかゝれる時、英人の手に捕へられ、これより楚囚の身となりて、愛き年月をウィンゾル城內に送ること十有八年の久しきに亘りき。この幽囚の間の事なりき、王子は花は笑ひ鳥は歌ふ、さる五月の晨、窓に凭れて深き沈思に耽れる折しも、ふと眼を下なる園庭にそゝげば、思もかけず世に又とあるべくも思はれざる

(1)Jane.
(2)Boethius.
(3)Consolation of Philsophy.
(4)Venus.
(5)Minerva.

解語の花の漫步するが見られぬ。王子の詩的想像は忽ち之に動かされて、これより日夜之を思ふて愛慕の念禁じ難くなりぬ。この美人こそジェーン姬となむ呼びて、英國の皇統を引きたる貴女なりしが、王子がゆるされて歸國するに當り、終に王子と結婚の式を擧げ、やがて蘇國の國母と仰がるゝには至りぬ。『キングス、クウェーア』の一篇は、即ちこの戀愛の一伍一什を歌へるものにして、全篇六齣より成る。一齣には半夜夢結び難く、ボエーシアスの『哲學の慰藉』を讀みつゝ人の運命の悶り難きを思ふことを說き、二齣には其捕虜となりたること、その鳥の歌をきゝて戀の何物たるかを怪めること、やがて塔下に美人の散步せること、その去るに及びて戀々の情に堪へざりしこと等を說き、第三、四、五の三齣には、當時の詩人の常套に陷り夢をかりて譬喩的にヴィナス、ミネルバ等を現はして戀愛に對する觀念をのべ、第六齣には夢をさまして、窓に近けること、爰に班鳩あり。その嘴に、金泥もて嬉れしき消息を記したる木の枝を

(1)Seven Line Stanza.
(2)Rhyme Royal.
(3)Robert Henryson.
(4)Aesop's Fables.
(5)La Fontaine.

喇み居たることを說き、長へに凋むことなき戀の花に向つて歡喜の念をもらして篇を結べり。この詩がチョーサーの用ゐたるヒローイック體七行節を以て草せられ、これよりこの體をば王の韻法と呼ぶに至れり。

ロバート・ヘンリスンは一五〇〇年頃に死したる作者にして、チョーサーに學び、その作大抵生氣に富み、ケルティック民族特有の輕妙なる機智に溢れたるが、就中重きをなすものを『イーソップ物語』の飜譯となす。この物語はカックストン之を佛文より英譯して一四八三年に出版せしが、ヘンリスンの譯はこの英譯に據らずして一四七八年の前後に出てたるものゝ如し。その現存するのは序文と十三篇の物語とにして他は盡く消失せり。ヘンリスンの譯は甚だ長きものにして、一篇の物語は數百行に達し、愉快なる對話あり、政事的引喩あり、勸善懲惡の話說あり、蘇國的風味と、蘇國山川の描寫とを挿めり。佛國の某批評家は、ヘンリスンの作を以てラ・フォンテーンの

(1)William Dunbar.
(2)The Thistle and the Rose.
(3)Golden Target.

筆にも優れたりとせり。以てその價値を知るべし。

ウィリアム・ダンバー出るに及びて蘇國の詩壇はその絕頂に達したり。スコットは渠を揚げて蘇國詩人中の隨一となしぬ。されどその詩が廣く世に知らるゝに至りたるは十八世紀の初めにして、其以前は多くは寫本のまゝに殘り、一八三八年初めてその全集の出版を見たり。ダンバーは一四六〇年に生れ一五二〇年前後に死せり。詩思最も縱橫、其描く所の範圍の廣きと獨創力の非凡なるとは以てチョーサーに匹敵すべく、一面に滑稽の妙を極めて人の頤を解くかと見れば、他面には悲愴哀痛人の涙を誘ひ、時に莊重高遠、殆んど讃美歌の域に突入するかと見れば、時には又露骨にして眞率、事物の眞相を直寫して憚ることなし。一五〇三年に出せる『薊と薔薇』一五〇八年に出せる『黃金の栖』の二篇は其形式尙ほチョーサーの模倣にして、チョーサーの用ゐたる五月の朶を以て卷を開き、且つ全じく夢を雇ひて譬喩的に述べたるものなるが、幾もなく全く模倣の域

を脱し、其獨特の才藻を發輝するに至れり。其作品頗る多けれど、其中最も有名なるは蓋し一五〇七年に出せる『七大罪の舞』といへる小篇なるべし。こも又一種の譬喩詩には相違なきも、作者の靈腕に由りて舊來の甚だしく摸糊不得要領の譬喩詩の常套を脱して一生面を開けり。七大罪とは羅馬教に所謂驕傲、貪慾、淫縱、忿怒、猜忌、懶惰、暴食是也。此詩は是等無形の罪惡をば人化して描きたるものにして、飜弄の裡に熱情を寓し、比喩愷切、筆力爽快、讀者をして其譬喩詩たるを忘れしむるものあり。

[2]ガヴィン・ダグラス亦クンバァーに多く遜らざる詩人にして一五二二年を以て卒せり。其詩中重もなるは、ヴァージルの『イーニィード』の譯にして、これ實に『イーニィード』英譯の嚆矢也。韻律法はヒロイック體の二行韻節(カプレット)也。擬古體を好める作者なるが故に、之を味ふには頗る容易ならず。

[3]デービッド・リンディは一四九〇年を以て生れ、ヂェームス四世に

(1)Dance of Seven Deadly Sins.
(2)Gawin Douglas.
(3)David Lyndsay.

仕へて軍務を司り、以て顯達の地位にのぼれり。其作は時世を寫せるもの多く、舊敎の腐敗を憤慨して盛んに攻擊せるは、かのスケルトンに似て、激烈の度は之に越へたり。之が爲めにリンジィは蘇國詩人中最も有名にして、其詩句の俚諺となれるもの多し。其作中有名なるは、其處女作『夢』を初め、『三階級の諷刺』『侍爵メルラムの傳』等是也。

(研究書目)

此時代の作は左の諸書に就きて見るべし。即ち

English Writers, by Morley, Vol. VI., VII., VIII. (Cassel.)
Chamber's Cyclopedia of English Literature, Vol I. (Chamber.)
English Poets, Vol. I. (Macmillan.) 又單行書には、
Morte d'Arther (Macmillan.)
Utopia (Clarendon, Routledge, &c.)
Poems of Surrey (Bell.)
Poems of Wyatt (仝上)

この時代の歴史を見るには

(1)Dream.
(2)Satire of the Three Estates.
(3)Historie of Squyer Melrum.

The Revival of Learning, by Symonds (Smith, elder.)
Short History of English People, by Green (Harper.) 等可也。

第五篇　エリザベス朝

（一五五〇年——一六二五年）

此時代の概觀

大文學興隆の源因——宗教の統一——大敵の滅亡——民福の增進——生活の華美——意氣の豪壯——各方面の大飛躍

第十四世紀より、英國にその萌芽を發したる文藝復興の新機運は、日を追ふて增大茂生し、やがて欝然として全土を蔽ふの狀況を呈し、終にエリザベス[1]女王の朝に入りて古今未曾有の大文學となり、陸離たる光彩を發揮したり。詳しく言へば英文學は女王の即位後、凡そ二十年頃より、その崩御の後二十年頃迄未曾有の盛觀を呈せり。何故に英文學は此時代に於てかく隆盛を來したるか。他なしエリザベス朝には、文藝の隆興を促すべき諸種の狀態備はりたれば也。エリザベス朝に於て第一に注目すべき現象は、その宗教上の混亂

(1) Queen Elizabeth. エリザベス女王の盛期は即位後二十年より崩後二十年間許也

宗教の統一

より脱却し、一國の人士が一般に精神的平和を享受するを得たること是也。中世に於ける基督教會の腐敗は宗教改革の機運を生み、宗教改革の機運はやがて宗界に新舊二派の軋轢を醸し、其結果十六世紀の初期より英國の精神界は動搖紛亂の極に達し、殊にエリザベス女王に先立てる二朝の間には、此弊最も激甚たりき。即ちエドワード六世（一五四七―一五五三）の朝には、未だ舊信仰より脱却せざる人士をも驅りて、強いて新教を奉ぜしめんとし、之に續ける女王メーリィ（一五五三―一五五八）は又、之とは正反對に、凡ての人民をして再び舊教を信奉せしめんと力めぬ。之が爲めには引いて政治上幾多の難局をも胚胎せしめ、一般國民をして戰々競々其堵に安んずる能はざらしめぬ。然るに此朝に入るに及び、一種偉大なる女王の人格と、又時運の推移とにより、かゝる紛擾は全然一掃せられ、國民は平穏靜謐の狀態に留り、心を他の方面に專にするを得るに至れり。殊に一五八七年には皇敵たる蘇國の女王メーリィが斷頭臺の露と消えたるあり、又その翌年には、政治上、宗教上の大敵たる西班牙王フィリップの派遣せる無敵艦隊が粉塵となりて潰滅せるあり。爰に至りて英國民はさながら盤石の上に立てる趣あり。その意氣の昂然として進取發達の途につけるは知るべきのみ。

(1)Edward VI.
(2)Mary.
(3)Mary Stuart.

前二朝は新舊兩教の間に動搖したり居し

民福の增進

之と同時に、國民一般の生活の程度は、此頃より著しく增進し、愉快安樂、贅澤の分量、たしかに中世時代に倍加せり。例へば農耕上の改良工夫が、從前に比して二倍の收穫を得るに至れるが如き、內地產の毛布の增加が輸入品を壓倒するに至れるが如き、民福の增進は如何にぞや。烟突の發明も此時代に起りぬ。毛入の寢臺、枕、さては硝子類の製出も此時代に始りぬ。海產物も亦陸產物と同じく增加し、英國の漁舟は、たゞに海峽の附近に群集せるのみならず、或者は遠くニュー・ファウンドランドの灘に赴きて鯨を漁し、さては北極附近の荒海に出入して鯨を捕るに至れり。衣食の充實生活の安樂は確かにエリザベス朝文運興隆の一因たり。

(1)Philip II.
(2)Invincible Armada.
(3)New Foundland.

(1)Flanders.
(2)Scandinavia.
(3)Archangel.
(4)Guinea.
(5)Thomas Gresham.
(6)Royal Exchange,
(7)East Indian Company.

同時に又商業貿易の基礎もおかれ、フランダーズ、さては地中海の諸港との貿易は益々隆盛に赴き、英國の商船は、スカンディナヴィア、アーケーンジェル、ギニー等にも往來し、一五六六年にはトマス・グレシャムの手によりて、龍動に「英國株式場」の設立せらるゝあり。又十六世紀の結末に近きては、かの有名なる「東印度會社」の設立を見るに至れり。

かく國力の増進するに伴ひて、美麗を崇拜し、裝飾を重視するの風潮は大に發達し、前時代の人生觀と此時代の人生觀とには非常の懸隔を生ずるに至れり。前時代の人士は封縣的城郭の中に隔壁を設けて窮屈陰欝なる生活を送らんとせり。之に反して此時代の人士は、美麗なる別墅を建設し、快活に且つ便利に世を送らんとせり。富人の衣服の如き、實に非常の贅澤を盡し、華彩を極め、年少の華々公子は小間物商の如く彌が上に粉黛を施せり。嚴格なる清教徒若くは倫理學者の輩は、やゝもすれば、かゝる流行に對して

生活の華美

眉を顰めしが、到底この滔々たる社會の大潮流を阻止するに足らざりき。

(1)Sir Francis Drake.
(2)Sir John Hawkins.
(3)Sir Martin Frobisher.
(4)Sir Hamphrey Gilbert.
(5)Buccaneer.
(6)Sir Walter Raleigh.
(7)Arcadia.
(8)Sydney.

エリザベス朝の人士は二十年の前後の如し

かく衣服裝飾に狂したる當時の人士は又事業にも熱中しぬ。エリザベス朝の人士はさながら二十歳前後の青年の如く、その意氣之豪壯胸には炎々たる情火の燃ゆるありき。彼等は希望の兒也、進取主義の信奉者也。極度に働き、極度に學び、又極度に樂みて而して後止まんとせり。冒險的念慮は彼等の血管中に沸騰せり。ドレークは一五七七年より八〇年にかけて世界を一週し、ホーキンズ、フロビッシャー、ギルバート等の指揮せる船舶は、從來人の赴ける事なき荒海を横行し、中には又南米の西班牙人を刼掠し、バッカニーアとして畏怖せられし事我邦人の倭寇と稱して畏怖せられしにも似たりき。ラヴリィは當代人士の好標本、其多藝多方面なる事、實に驚くべく、詩人にして軍人を兼ね、探檢家にして歴史家を兼ねぬ。以て其意氣の盛なるを見るべし。『アルケーディア』の作者シドニィといひ、

『神女王』[1] の筆者スペンサー[2]といひ、皆是れ俗事に奔走せる人々にあらざるはなかりき。實にエリザ朝の人士は倦怠の何物たるを知らず、疲勞の何物たるを解せずして勇往邁進せる也。フランシス・ベーコン[3]は法律家、兼哲學者、兼内裏人也。少壯の時昂然として人に告げて曰く、余は凡ての學問をわが研究の範圍におけりと。これ獨りベーコンのみならず、當時の人士の一般の抱負たりし也。

之を要するに此時代の英國をして内に賑富ならしめ、外に雄飛せしめたる大勇猛力、大氣力こそ、又其文學をして古今未曾有の盛觀を呈せしめたる大原動力なれ。海外に一大植民をも建設するも、戯曲の一大原野を開拓するも其根本的精力には大差なき也。無敵艦隊を撃破せる氣魄は、やがてこれ『神女王』の如き大作を作爲せる氣魄なれ。さらば、政治、商業、貿易、軍事等の各方面に於て空前絶後の活動を試みたるエリザベス朝が、其文學に於ても然るは蓋し多く怪むに足らざる也。詩壇には先づ抒情詩の勃發あり、其量に於ても又其質に於ても古今其匹儔を見ず。英國抒情詩の精華は殆んど集めてこの一代にありといふも不可なし。叙事詩人としてのスペンサーの位置も亦甚だ重きを失はず。然れどもエリザ朝が世界に冠絶せるは、其劇曲也。大沙翁一人を有するのみにても、エリザ朝は優に天下に濶歩するに足る。況んや其周圍にはマーロー[1]、ジョンスン[2]等の名家僻然として林をなせるをや。散文のみは今日の標準より觀れば遜色あるも、之をその前時代に比すれば、同じく非常の大發達を遂げたるを見るべし。余は之を次ぎの六章に分割して説かんとす。即ち（一）抒情詩（二）長篇の詩歌（三）散文（四）沙翁以前の劇壇（五）沙翁（六）沙翁以後の劇壇、是也。

(1)Faerie Queen.
(2)Spenser.
(3)Francis Bacon.

エリザベス朝人士の大氣大勇猛力は文學も殆の露せり上にに

(1)Marlowe.
(2)Jonson.

（一）抒情詩

エリザ朝と抒情詩――叢書の續出――田園詩の時代――ソンネット時代――歌謡の時代――（研究書目）

余は第一に此時代の抒情詩より筆を起さんとす。何となればエリ

エリザベス朝の文學は、先づ此方向に於て焕發し、而して最後にいたるまで其勢力を保持したれば也。當時の人士は一面より見れば皆殆んど詩人と稱するも不可なく、各人其感情を吐露するに韻語を以てせり。宛然陽春の森に於て、群禽一時に歌ふの趣あり。而して其大部分は皆戀愛詩にして、弱屈なる中世の人士が澁面愁眉、口を開けば則ち宗教を說き、筆を取れば則ち前人の摸倣を事とせるとは全然相反せり。かく感情に向つて何等の拘束を加へず、思ふ所を述べ、感ずる所を歌ひ、自由濶達の氣象の横溢せるものは、實にこの文藝復興期の特色にして、かゝる時代にあらずんば抒情詩は決して發達する能はざる也。

人士は皆詩人といふも不可なし

エリザベス朝は抒情詩の出づべき時世なり

さて此時代の抒情詩の大部分は叢書として保存されたるもの多し。

叢書の實に詩歌の叢書はエリザ朝の特産物にして、其數甚だ多し。

叢書の出

是等の叢書は或は書肆の計畫に成れるあり、或は又文士の手に編纂されたるあり。兎に角當時知名の詩人の作は、その折〳〵に採聚せられて以て世に布けり。第一に現はれたるは『トッテルの叢書』にして、こは一五五七年の出版なり。從つてその中に收錄せられたるものは、多くはヘンリィ八世の朝の詩人の作也。かのサリィ、ワイアットの所作をはじめ、其數三百餘篇に達せり。之に亞ぎては、一五七六年に『たくみの園』、一五七八年に『綺羅滿室』、一五八四年には『清味一掬』出でたり。エリザ朝以前の作は、以上の諸叢書に求むべし。その後かゝる叢書の出版は益々時好に投じ、一五九二年には『ブリトンの四阿』一五九三年には『フェニックスの巢』一五九七年には『戀の園亭』一五九九年には『戀の飛脚』出てぬ。然れども就中最も有名なるは一六〇〇年に出でたる『イングランズ・ヘリコン』是也。當時の田園詩若くは戀愛詩の白眉は、皆この中に網羅せられたり。即ちサリィ、スペンサー、シドニィ、ブルック、グリーン、ロッヂ、ブラウン等の諸家の佳什は爰に求むべし。一六〇二年に出でたる『史詩吟叢』又佳良なる詩集にして、シドニィ、

(1)Tottel's Miscellany.
(2)The Paradise of Dainty Devices.
(3)Gorgeous Gallery of Gallant Inventions.
(4)A Handful of Pleasant Delight.
(5)Breton's Bower of Delight.
(6)Phoenix' Nest.
(7)The Arbor of Amorous Devices.
(8)The Passionate Pilgrim.
(9)England's Helicon.
(10)Brooke.（以下次頁）

ラヴリィ、デーヴィズ、[1]ソトスン、[2]其他多數の作者の作品を收めたり。女王崩御の後には、樂譜附の歌謠集が之に代りて流行するに至れり。是等の歌謠集中にも亦非常に傑出せる抒情詩の多數を含めり。

扨てかく數十年に跨れるエリザ朝の抒情詩の盛期は、之を三期に別つべし。(一)[3]田園詩の時代　(二)[4]ソンネットの時代　(三)[5]歌謠の時代是也。因に記す、エリザ朝文學の盛期は一五八〇年前後を以て開始す。敘事詩に於ても、散文に於ても、又抒情詩に於ても皆然り。

一五八〇年以前はエリザ朝の準備期にして、各方面ともに皆見るに足る傑作なしと知るべし。

田園詩の時代

エリザ朝抒情詩の田園的時代は、凡そ一五八〇年より同九〇年に亘れる十年間を指す。一體此時代は抒情詩に限らず、皆田園的風味を帶びたる作物の最も流行せる時代にして、かの田園詩の泰斗といふべきスペンサーの『牧羊者の曆』[6]田園的物語の開祖いふべき、シドニィの『アルケーディア』[7]の二作の如きも亦此

(1)Davies.
(2)Watson.
(3)Pastorals.
(4)Sonnets.
(5)Songs for Music.
(6)Shepherd's Calender
(7)Arcadia.
(11)Greene.
(12)Lodge.
(13)Brown.
(14)Poetical Rhapsody.

時代の産物也。抒情詩も亦此風潮を脱する能はず、所謂田園的抒情詩と稱すべきもの陸續として出でたり。是等の詩人中最も傑出せるものは、[1]リィリィ、[2]ピール、ロッヂ、グリーン、ブリトン、マァロー、[5]コンステーブル、[3]ムンディ、[6]バルンフィールド等諸作家也。

但し此期には、田園詩以外に別に一家の特色を發揮せる大抒情詩人あるを忘るべからず。第一に注意せざるべからざるはシドニィ是也。人も知るシドニィはエリザ朝が生める紳士の標本、日頃內裏の花と持て囃され、文武の兩道に分け入り、內外の事情に精通し、色あり香ある快男子。三十を越えて程もなく、あたら戰場の露と消え去るや、英國中の男子が數ヶ月間華美なる色の衣服を纏ふを憚りたりといふを見るも、其一世の輿望を收めたるを覩るべし。渠は抒情詩人として非凡の資質を有し、エリザ朝の抒情界はシドニィを得て初めて眞摯熱烈の聲をきけり。ラム、ラスキン等の諸大家が、シドニィに對して贊歎の辭を惜まざる誠に故あるを見る。シドニィの友にグ

(1)Pastoral Lyric.
(2)Lyly.
(3)Peele.
(4)Breton.
(5)Constable.
(6)Munday.
(7)Barnfield.
(8)Sidney.
(9)Greville, Lord Brooke.

レヴィルあり。當時の抒情詩人の大部が其題材を戀愛に限り、引喩を古典に求めたる間に立ち、グレヴィルのみが獨り之に倣はずして常套を破れるは多とすべし。

次ぎの十年、即ち十六世紀の最後の十年間は、ソンヂット體の最も流行せる時代也。ソンヂットがワイアットに出りて英國ソンヂットの時代に輸入されてより、續々之を試むるもがありしも、眞に詩界に一大勢力となりたるは、一五九一年『アストロフェルとステルラ』と題せるシドニィのソンヂット集が出版せられたるに始まる。此ソンヂット集はシドニィ自身が、ペヂローブ・デヴェルーと呼べる一少女に對する失戀の情思を歌ひたるものなりき。二人が初めて相見たるは一五七五年の事にして、時にシドニィは二十一、ペヂローブは十二の少女なりき。これより數年の間、二人は偕老を契らんと期し居たるが、或る事情の爲めにペヂローブは他の男子と結婚の約を結ぶに至れり。之が爲めに惹き起されたる絶望怨嗟の情念の

(1)Astrophel and Stella.
(2)Penelope Devereux.

詩歌となつて現はれたるは即ちこの一百有餘篇のソンヂット是也。戀、愛、詩、として、蓋し、古今に冠絶し、當代之に優れるものは、獨り沙翁の作あるのみ。翌年デーニエルの詩集『ディーリア』出て、其中には多數のソンヂットを含めり。同年又コンスターブルの『ダイアナ』出て非常の喝采を博せり。是等の結果として、續き物のソンヂット體は當時の流行となれり。即ち一五九三年にはロッヂの『フィリス』ワトスンの『空想の涙』バルンスの『パッセノーフィルとパッセノフ』ドレイトンの『思想』ヂャイルズ・フレッチャーの『リシア』等出で、一五九四年にはバーシィの『セィーリア』無名氏の『ゼフェリア』出で、是より連年バルンフィールド、チャプマン、グリフィン、スミス、リンチ、スペンサー、沙翁、ブリトン、デービィース、ドン、アレクサンダー等の手に成れるもの續々として世に出でたり。其大部分は皆續き物のソンヂットにして、中間に間々別種類の詩歌を含めり。是等のソンヂットは其題材に由りて分類し得べ

(1)Daniel.
(2)Delia.
(3)Diana.
(4)Phyllis.
(5)Tears of Fancy.
(6)Barnes.
(7)Parthenophil and Parthenophe.
(8)Drayton.
(9)Idea.
(10)Giles Fletcher.
(11)Licia.
(12)Percy.
(13)Coelia.
(14)Zepheria.
(15)Chapman.
(16)Griffin.
(17)Smith.
(18)Lynche.
(以下次頁)

し。第一は戀愛に關するものにして、之に屬するもの最大多數を占む。其中シドニィ、ドレートン、沙翁、スペンサー等の作れるソンネット集は、多少自身の閲歴を根據として作りたるものなれば、其性行の上に一道の光明を與ふ。第二は宗教に關するものにして、コンステーブル、バルンス、ブリトン、ドン等の作は之れに屬するもの多し。第三は雜の部にして、戀愛、宗教以外のものを題材とせり。チャプマンの『愛婦フィロソフィにさいぐる冠』[1]の如きこの種のソンネットの嚆矢たり。十七世紀に入りて後も、ソンネットは尚多少の命脈を保持せしが、前日の勢力はなかりき。

此時期に於ても亦前期と同じく、ソンネット以外の抒情詩を以て立てる名匠出てたり。ジョン・ドンを其筆頭とす。ドンは心理的詩人として非凡の技倆を有し、ベン・ジョンスンの如き大にドンを揚げ、或るものにかけてドンは世界に冠絶すと評せり。其詩眼の幽邃なる、は其獨擅の長所にして、普通平凡の事物もかれの手にかいれば、清

(1)Coronet for his Mistress Philosophy.
(2)John Donne.

(19)Donne.
(20)Alexander.

新なる意義と光明とを有するに至る。且つ渠は當時の抒情詩人が、やゝもすれば古典の舊句、廢想を蹈襲し、厭ふべき陋態に陷る者あるに反し、最も思想の上に重きをおき、超然として時弊の外に超脱せるの觀あり。さればドンは抒情詩人として沙翁、シドニィ、グレヴィル、ベン・ジョンスン等と併せ稱せらる。

十七世紀に入りて流行を極めたるは曲譜附の歌謠にして、ソンネットにかはりて一世を風靡したり。一六〇〇年より二〇年頃迄に出版されたる此種の歌曲集の數は實に汗牛充棟も啻ならざる有樣なりき。チャッペル氏の『古代英國の俗曲』[1]に當時の英國が如何に音樂に熱中せるかを說けり。其大意に曰く、エリザベス女王の永き御世の間、音樂は一般の人によりて修められ、且つ一般に尊敬せられたり。獨り貴女紳士の必要の資格なるのみならず、下僕、丁稚、農夫といへども音樂の嗜好あるものは其職を求むるに好都合なりき。いかなる職業柄とてもそれ〳〵自家の音曲を有せざ

(1)Chappel.
(2)Old English Popular Music.

歌謠の時代

るはなく、乞食といへども尚ほ然りき。理髮所に赴けば、其店頭には諸種の樂器を備へて、顧客の娯樂に供するあり。家々の應接間にも必らずヴァイオリンの一挺位は懸けられぬ。晩餐の際にも音樂を試み、晩餐の際にも歌を唄ひ、結婚にも、葬式にも、朝にも、晩にも常に音樂は離るべからざるものなりき。當時にありて少しも音樂を解せざる人物の如きは、陰欝にして近づけ難き人物と思惟せられたり云々。以てエリザ朝に於て、音樂が如何に流行し、從つて之に伴ふべき歌謠が如何に多く作られたるかを見るべき也。而して是等の歌謠は、大體に於て文學上の價値を有し、眞に絶好の抒情詩と稱して可なるものあり。專門の歌謠作者として、當時最も優れたるは[1]カムピオンを筆頭とし、[2]バード、[3]ドゥランド、[4]ヂョーンス等是也。其中カムピオンの如き、確かに[5]ヘリック、ベン・ジョンスンと比肩し得べき名手たり。歌謠は又劇曲作者の手にて極力發達したり。沙翁をはじめ、[6]リィリィ、[7]デカー、ベン・ジョンスン、[8]ヘーウッド、[9]ナッシ、

(1)Campion.
(2)Byrd.
(3)Dowland.
(4)Jones.
(5)Herrick.
(6)Dekker.
(7)Heywood.
(8)Nash.

[1]ボーモント、[2]フレッチャー、[3]マァストン、[4]ウェブスター等の作れる劇曲中に挿まれたる歌謠には時に千古の名作あり。就中リィリィの優雅輕妙なる、ボーモント、フレッチャーの自由にして濃艶なる、ウェブスターの哀切にして奇思に富める、沙翁の多趣多樣にして千變萬化窮極なき、ジョンスンの整齊にして雅醇なる、何れも稀世の大才たり。音樂と情想と結合して、二ッながら完璧に達せるは、他の時代に多く類例を見ざる所也。

ジョンスン、フレッチャー其他末期の劇曲作家は、抒情詩の命脈を次ぎのカァロリン朝にまで傳へぬ。されば抒情詩は事實上決して中絶したるにあらねど、エリザベス朝の抒情詩は一六二五年前後を以て假りに終結となすを便とす。何となれば、此前後までにて、エリザ朝の一流の抒情詩人は、其重もなる事業をなし終り、而して、次ぎの時代の詩人は未だ大に雄飛するに至らざれば也。因に記す、沙翁とボーモントとは一六一六年に歿し、ラッリィは一六一八年に

(1)Beaumont.
(2)Fletcher.
(3)Marston.
(4)Webster.

(1)Browne.
(2)Wither.
(3)Drummond.

殘し、カムビオン、デービスンは其翌年に殁し、又フレッチャーは一六二五年に殁しぬ。ドン、ドレートン、ジョンスン等は三十年代まで生き殘りたれど、其傑作は既に出て終り、ブラウン、ウィザー[3]ドラムモンド等、最も後れて出てたる作者も、チャールズ王の即位以前に重もなる作を出し終れり。

以上は一括してエリザ朝の抒情詩の概略を述べ終れり。各作家につきて一々說かんと欲せば、少くとも數百頁を費さすべく、そは本書の許さゞる所なれば、遺憾ながら爰に擱筆す。

（研究書目）

余はこの時代の抒情詩を左記の諸書にて讀みたり。

(1) *English Poets*, by Ward, Vol. I. II. (Macmillan.) 此時代の名家の評傳及び傑作は大概遺憾なく網羅せられてあり。

(2) *Great Book of Poetry* (Ward).

(3) *Elizabethan Lyrics*, edited by Schelling. (Ginn). 余は本章を草するに當り、この書より益を得たる所多し。

スペンサーはエリザベス朝叙事詩人の首席に在り

(4) *English Lyrics*, from Spenser to Milton (Bell).

(5) *Elizabethan Songs and Sonnets* (Reeve).

(6) *Elizabethan Sonnet Cycles* (Kegan Paul.)

(7) *Poems of 16th and 17th Centuries*, edited by Linton. (仝上)

(8) *Tottel's Miscellany* (Constable).

(9) *Handful of Pleasant Delight* (Constable).

（二）長篇の詩歌

スペンサーの經歷――『神女王』――スペンサー以前の詩人――スペンサー時代及び其以後――（研究書目）

抒情詩を以て誇れるエリザ朝の詩壇は、長篇の詩歌にも頗る豐富にして、他の時代に比して毫も遜色あるなし。長篇の作者として、殆んどエリザ朝の詩壇を双肩に擔ひて立つの概あるものをスペンサーとす。渠は抒情詩人としても凡手にあらざりしが、其獨擅の長技は最もよく長篇の作に於て發揮せられたり。一五七九年はスペンサーが其最初の長詩『牧者の暦』を出せる年也。史家が通常この年を

(1)Edmund Spenser.
(2)Pembroke Hall, Cambridge.
(3)Du Bellay.
(4)Petrarch.
(5)Gabriel Harvey.
(6)Leicester.

以て、エリザ朝文學の盛期の初年となすを見るも、渠が位地の甚だ高きを知るべき也。

スペンサーの經歷

エドモンド・スペンサーの經歷は、當時の他の諸作家の經歷と同じく、明亮を缺きたる所多し。渠は一五五二年前後を以て龍動に生れ、一五六九年を以て劒橋のペムブローク・ホールに入學せり。同年渠が匿名を以てデュ・ベェレェ及びピートラルクの諸家を飜譯せるを見れば、早くより古典の智識を有せるを見るに足る。在學中多くの學者と交を結び、かのゲーブリエル・ハァヴィの如きも渠の友なりき。ハァヴィは徒らに博學を誇り、趣味は皆無なる學究なりしも、當時文壇の一勢力にして、スペンサーが其益を被れる點も全く無きにあらざりき。一五七六年大學を去り、一時其家族の舊居たりし英國の北部に赴き、一美女に戀々として空想に耽りしも、終に斷念して龍動に出て、一五七七年の頃には、當時女王の寵臣として飛鳥を墜さんばかりの勢力を握りたるレスター伯の用ふる所と

(1)Sidney.
(2)Areopagus.
(3)Shepherd's Calendar.

スペンサーの最初の傑作

なり、其邸内に住する身となれり。こはスペンサーに取りて蓋し最上の好地位なりしなるべし。何となれば、渠は之が爲めに同邸に出入する所の詩客文人と、往來の便を得たるべければ也。就中スペンサーに取りて貴重なりしは、伯の甥なるシドニィとの交遊にして、同志の士と相結びて、「アレオペーガス社」と稱する文學倶樂部を設立せり。當時スペンサーが、熱心に文學的述作に精力を集注せるは、渠が當時劒橋大學のハァヴィに送れる書簡に出りて明かにして、少くとも以太利風の喜劇九篇許をものせるものゝ如し。されどそは皆散佚して、今日殘存せるものなし。ハァヴィは頗る僻説を抱ける人にして、古典の詩歌に模し、アクセントの代りに、量に由る所の韻律法を採用せしめんと、屢々スペンサーに勸誘しき。スペンサーも之が爲めに多少心を動かされて無益の勞を費せしが、流石に其爲すなきを知りて之を放棄するに至れり。

スペンサーが其傑作の一なる『牧者の暦』を世に出せるは、一五

(1)Surrey.
(2)Wyatt.
(3)Grey de Wilton.

七九年にして、これより渠は一躍して當時詩人の第一流を以て目せらるゝに至れり。『牧者の暦』は所謂田園詩の多數を集めたるもの、一年の十二ヶ月に配して、十二章に分る。其中には失戀詩あり、昔噺あり、又宗教界に對する諷刺あり、女王に對する贊歎の辭あり。又かの有名なる樫と荊蕀との寓言あり。是等は皆創作にはあらず。飜譯せるもの大部を占め、要するに、其手腕は不平均にして、未だ大成の域に達せりとは稱し難かりき。されど當時は[1]サリィ、[2]ワイアット以後、未だ格別の傑作が出てざりし時代なれば、天下の重望は忽ら其頭上にかゝるに至れり。

其翌年スペンサーはレスター伯の推薦に由り、愛蘭總督[3]グレー・ド・ウィルトン卿の秘書官に擧げられ、愛蘭に赴くことゝなり、以後スペンサーの餘生の大部分はこの寂漠野蠻なる僻地に送られ、たゞその中間に數次英國を訪問せることありしのみ。グレー卿は一五八二年を以て召喚せられたれば、スペンサーは其後は裁判所の書記、其

(1)Fairy Queen.
(2)Sir Walter Raleigh.
(3)Mother Hubbard's Tale.
(4)The Tears of the Muse.
(5)Amoretti Sonnets.
(6)Epithalamium.

『神女王』は俗吏として生活中に生れしもの也

他かゝる種類の俗吏となりて糊口を立てたり。其大作『神女王』は實にかゝる境遇の產物たり。その頃、かの[2]ウォルター・ラッリィも亦愛蘭に在勤したるが、或る日スペンサーを訪問してこの大作の梗槪をきゝ感歎おかず、一五八九年終にスペンサーを誘ふて龍動に赴かしめぬ。かくて其翌年を以て『神女王』の最初の三篇は世に出づるに至れり。この時よりスペンサーは英國詩壇の覇王として、何人も異議を挿むものなく、一方に沙翁が劇曲界に於て雄飛せると相對して、誠に此時代の巨觀たり。

一五九一年スペンサーは其新舊の短詩を蒐聚して出版しぬ。其中にて『[3]ハッバァド媼の物語』『[4]詩神の涙』及びシドニィの死を悼める詩等すぐれたり。一五九四年にはエリザベス・ボーヤーと呼べる一婦人と結婚せり。かの有名なる『[5]戀のソンネット』『[6]合巹の詩』等は即ちこの婦人に對する戀愛を材料として作れるもの也。一五九五年スペンサーは『神女王』の他の三篇を傳へて龍動にのぼり、翌年を以

て之を出版せり。『神女王』の前卷は前後十二篇を以て完結すべき結構なりしが實際完成したるは以上の六篇のみ。『カンタベリィ物語』と同じく未完のまゝにて殘れるは甚だ惜むべしとなす。スペンサーの晩年は甚だしく悲慘を極めぬ。一五九八年愛蘭に叛亂起りて、渠の住宅は其際全く刼掠せられ、三界に家なき浪々の身となりぬ。幾もなく或る用務を帶びて龍動に來りしも、居ること數週にして客舍に病死せり。時に一五九九年一月十六日。(1)ベン・ジョンスンの記事に曰く、スペンサーハ麵麭に窮してキング街に餓死せり。この時エセックス卿は二十個の貨幣を贈りしも、最早之を使用すべき時なしとて拒絶せりと。

スペンサーは軽佻不過の人也

何人も知る如く『神女王』は、一の訓戒的意義を藏せる譬喩詩にして、非常の長篇也。其構成の上より見れば、作者は詩壇の先進たるタッソー、(2)アリオストー、(3)チョーサー等に摸して筆を取れり。但し其目的に於ては全然是等の諸作家とは異なれり。

(1)Ben Jonson.
(2)Tasso.
(3)Ariosto.
(4)Chaucer.

『神女王』は訓戒的譬喩詩也

アリオストーの『オルランド』にありては、單に彩華あり、興味ある冒險譚を以て讀者を喜ばさんを目的とせり。タッソーの『ヂェルーサレム』にては歴史上の傳說を叙述せるまでにて、宗教的叙事詩と稱すべし。又かの『カンタベリィ物語』が物語の集合にして、一面に誠實なる中世の繪畫たることは、既に讀者の知る所也。然るにスペンサーの『神女王』は、物語の假面を冠れる一家の道義觀の發表也。其錯雜せる結構、其豐富なる想像は、單に此目的を遂げんが爲めに使用せられたる手段のみ。この點に於て略ぼ我曲亭馬琴の執筆の態度と類似せりといふべし。

(1)Orland Furioso.
(2)Jerusalem.

『神女王』の複雜なる結構

さて此作は最後迄完成せざるが故に本文を讀みたるのみにては、充分に其旨意を解し難きも、幸作者が其友ラヴリィに送れる書柬中に其大主意を說明したるものあれば、大方は明かも也。其書柬によれば、作者は二十四篇を以て全篇を成さん豫定にして、前十二篇には私的生涯の十二の德性を現はし、後十二篇にては又公生涯の十二の

(1)Arthur.
(2)Aristotle.
(3)Gloriana.

徳性を現はさんとせり。而して是等の徳性の全體を併有せる人物としては、かの中世以來人望あるアーサー王を以て擬せんとせり。スペンサー自身の語に曰く、余は即位以前のアーサーに於て十二の私的徳性の權化を描かんとす。十二の徳性とは、アリストトルの分類法に從へる也。若しこれが成效せば、即位後のアーサー王に於て公的徳性の權化を描かんとすべし云々。是等廿四篇の大計畫中完結せる部分は、其中の約四分の一強にして、公的生涯の部の如きは、作者の腦裡にだに明かには纒らずして止めるものゝ如し。

作者はかく抽象的に其目的を定めたるが、之を發展せんが爲めに一部の物語を構成したり。其物語の梗槪も亦ラヴィに送れる書簡中に説明されたり。爰に神仙國あり。其女王をグローリエーナといふ。ある年、例に由りて十二日間の大祭を擧行したるが、其十二日の間、日毎に厄災の訴あり。之を除かんが爲めに毎日一人の武士が、女王の命に由りて派遣せらる。是等の厄災といふは、それ〳〵具體

十二の徳性を代表せる十二人の武士

的に不徳を代表し、又之を退治せんとして出發し行く十二人の武士は、それ〳〵十二の徳性を代表す。宛かも『八犬傳』が八犬士を以て、仁義禮智等の八行を代表せしめたるに仝じ。たゞスペンサーは、アリストトルの分類法に從ひて之を十二とし、又馬琴は通俗的儒教に從ひて、之を八とせるの差異あるのみ。別に是等の武士の外に、十二の徳性を圓滿に具備せるアーサー王を描出す。アーサー王は我未來の皇后たるべき神女王の所在を尋ねありく途中にて、是等の武士と相會し、其卓絶せる威と徳との力に由りて、是等の武士どもを難境より救ひあぐ。これ『神女王』の前篇の大筋なるが、作者は物語の發端より、順序を立てゝ描くを以て面白からずとなし、物語の中途より、突如として筆を起し、物語の由來、發端は最後の一篇に達して後、初めて之を説明せん計畫なりき。かゝる趣向は餘りに器機的にして妙ならぬが上に、最後の一篇は、終に執筆せられずして終りたるを以て、今日殘る所の『神女王』を見たるのみにては、この

『神女王』中完成したる六篇

(1)Holiness.
(2)Temperance.
(3)Chastity.
(4)Friendship.
(5)Justice.
(6)Courtesy.

趣向を知るに由なし。況んや作者は物語の進むにつれ、いつしか枝葉に走り、岐路に入り、前後の脈絡の錯雜を來せる事甚しきをや。『神女王』の完成したる六篇の中、第一篇に描けるは神聖を表はす所の赤十字武士の冒險譚也。この篇にては物語の筋も、又其中に含まれたる譬喩の旨意も大方明白也。赤十字武士の苦鬪、及び其最後の勝利は、眞宗教が、邪宗教と鬪ひ、幾多の浮沉と盛衰とを經て、最後に勝利を占めたる事を暗示せり。第二篇は節慾の武士が、亂暴、虚僞、性急、利慾、野心等と鬪ひ、最後にあらゆる誘惑に勝ちたる物語にして、こも又其構成の上に甚しく晦澁混雜の痕なし。スペンサーが其物語の筋道を失ひて、五里霧中に彷徨するに至れるは第三篇以下也。第三篇には清淨を表はせる女性の武士を描き。第四篇には友愛、第五篇には正義、第六篇には禮節を描かんとしたるも、主題と何の關係なき事件が、陸續として混入したるが爲めに、特別にかゝる命題を設くるは、頗る不穩當なるものあり。中にも讀者が甚だ

(1)Belphoebe.
(2)Britomart.
(3)Mercilla.
(4)Amoret.
(5)Calidore.
(6)Arabian Nights.
(7)Idyls of the King.
(8)Hazlitt.

しく迷惑を感ずるは、この詩が單に抽象的の譬喩詩たるに留まらず、他面に於て夥しく歴史上の隱喩を有する事是也。例へば神女王を以てエリザベス女王に擬し、アーサー王を以て、或時はレスター伯に擬し、或時はシドニィに擬したるの類是也。而して此暗喩は首尾一定せず、作者の都合に由りて時々變更す。例へば、エリザベス女王がグローリエーナたる外にベルフェーベとなり、ブリトマァールトとなり。マーシラとなり、又アモレットとなり、又かのシドニィは、アーサー王たる外にカリドールとなるの類是也。かるが故に、若し讀者にして此隱喩を見出さんとせば、甚だしく混迷すること、例へば百里際涯なき森林の裡に道を失するの感あるべし。されば『神女王』を讀まんものは、最初よりかゝる事には毫も頓着せず、又必らずしも首尾連絡せる一大長篇とも思はず、例へば『アレービアン・ナイッ』若くはテニスンの『アイディルス・オブ・ゼ・キング』などを讀むと同樣に、之を個々別々なる多數の物語の集合體と見るを可とす。ハ

『神女王』に見る所の幾多の缺點

ズリットト曰く、若し讀者にして譬喩に頓着せずんば、譬喩も亦決して讀者を煩さゞるべし。之に頓着せざるに於ては、『神女王』の一篇は明鏡を見るの思あらむと。蓋しこは『神女王』を讀まんものゝ秘訣也。

此構成上の弱點の外にも弱點を拾はゞ尚ほ多かるべし。其文法語格を破れる事の極端なる、己れの言はんとする所の未定にして、やゝもすれば誇張浮虛の弊に陷り易き、物語をなすに其中止すべき所を知らずして冗漫の誹を免れ難き、エリザベス女王に對する諛辭の今日の人士に耳ざはりなる、又其描ける人物の性格の甚だ曖昧にして、幻影の如き、さては其餘りに古語を好める等是也。然れども是等の弱點あるにも係らず、『神女王』の詩が今に至るまで嘖々として聲價を失墜せず、詩中の詩として尊重せらるゝものは何ぞや。かの沙翁をはじめ、ミルトン、ドライデン、ウァーズウァース、スコット等一代の名匠が、皆之に向つて渴仰の念を寄せ、贊歎の辭を惜まざ

詩中の詩

美的感情の發達

るものは何ぞや。他なし、他面に於て他の作者の學び難き特技を有すれば也。スペンサーをして千古に卓出せしむる根本の長所は、其美的感情の極度に發達せるにあり。之を其想像に見よ。秀麗優雅、現實の世界には見るべくもあらぬ一種の幻影縹渺として人を醉殺するにあらずや。渠の描ける世界、渠の寫せる人物は皆一の麻氣樓にして、讀者は其實物にあらざるを感ずれど、而も終に之が爲めに心を動かし魂を奪はれずんばあらざる也。次に之を其詞句に見よ。流麗魂奇、而して其諧調は古今に匹儔なく、其中に包める美なる幻影と渾然融和、眞に詩を味はんとするものをして隨喜せざる能はざらしむ。次に之を其思想に見よ。高潔純正、高く理想の雲にかくれ、卓然時流を超脫し、勇敢、義烈、優美、高尚なるものゝみに對して、尊崇の情念をさゝげ、夫婦の愛、君臣の義、朋友の信義等に對して極力同情を寄せたり。之を要するに、文藝復興の機運が齎らせる精神の善美なる方面は、遺憾なくこの詩中に發揮せられたるに幾し。

想像の美

諧調の美

思想の美

最後に一言すべきは『神女王』の韻律法是也。全篇九行韻節を以て書かれぬ。其中前八行は五脚のアイアムビックにして、最後の一行のみはアレクザンドリン、即ち六脚のアイアムビック也。スペンサーが初めて之を使用せるが爲めに「スペンサーの韻節」と稱するは人の普く知る所也。

スペンサー以前の詩壇

スペンサーが一五七九年を以て、其最初の傑作『牧者の暦』を出せるは、事頗る唐突の觀あり。今迄振はざりし詩壇が、如何にしてかゝる大作家を生むに至れるか、甚だ怪むべきが如くなるも、仔細に之を調査すれば、スペンサー以前に既に多少見るべき詩人あり、サリィ、ワイアットとスペンサーとの中間の連絡を作りつゝありし也。サックヴィル及びガスコインの二家は其中の錚々たるもの也。トマス・サックヴィルは一五三六年に生れ、牛津大學卒業後幾もなく政治界の人となり、頗る女王の親任を受けて身貴族に列せられ、女王の崩後引續きてヂェームス一世に仕へ、

(1)Stanza.
(2)Iambic.
(3)Alexandrine.
(4)Spenserian Stanza.
(5)Thomas Sackville.

サックヴィルの手腕

一六〇八年を以て卒せり。斯くの如くサックヴィルの政治的生涯は大に長く、且つ頗る成効せるものなるが、其詩人的生涯は極めて短少にして、其作は蓋し皆二十四歲以前のものにかゝれり。然れども渠が叙事的詩人として、又戲曲作者として、エリザ朝の文學に與へたる影響は頗る多大也。渠が最も得意とせるは、莊重なる五脚のアイアムビックを驅使する技倆にして、優然として大家の風格を具へぬ。若し渠をして其一生を文學の爲めに犧牲に供せしめたらんには、叙事的詩人としての造詣は蓋し量り知るべからざるものありしならむ。さてザックヴィルの作として今日に傳はるは、ヘンリィ・ノルトンとの合作にかゝる脚本『ゴルボダック』及び『治者の鑑』と稱する叢書中に收めたる『序說』及び『ヘンリィ・スタッフォード』あるのみ。『治者の鑑』は蓋しサックヴィルの計畫に成れる叢書にして英國史上の有名なる偉人物が現出して、各自の悲慘なる經歷を物語り、以て政治家、君王等の爲めに、龜鑑たるべきを以て主意とした

(1)Henry Norton.
(2)Gorbodue.
(3)Mirror for Magistrate.
(4)Induction.
(5)Henry Stafford.

り。サックヴィルの外に之を執筆したる詩人は、少くとも七八人にのぼれど、多くは言ふに足るものなし。此期の詩人中サックヴィルに亞ぎてはジョージ・ガスコイン[1]を擧ぐべし。渠は頗る道樂的人物にして、人間としては取るに足らねど、文士としては頗る多方面にして、喜劇、無韻詩の悲劇、さては散文の詩學上の述作あり。又以太利物語の飜譯あり。又詩人としては『鋼鐵の鏡』[2]と題せる諷詩あり。其名聲は、最も多く此最後の作にて維がるれど、概して凡常の域を脱する能はず。ナッシ[3]が渠を評して、エリザ朝文學の道普請をなし、以て他の開墾を待てりと言へるは、蓋し其要を得たるに幾からんか。

エリザ朝の人士は元來皆多藝、多方面にして、長篇の叙事的詩篇に筆を染めたるものは、大抵抒情詩、劇曲等に名を爲したる人々也。但しエリザ朝の長篇は抒情的短篇に比すれば、概して遜色あり、スペンサー以外には、一家の特長を發揮せる人甚だ少數也。今類別して、是等を述べん。

スペンサーの同時及び其以後の長詩

(1)George Gascoigne.
(2)Steel Glass.
(3)Nash.

スガエリコインザ朝文學の道普請をなせり

第一は長篇の戀愛詩也。抒情詩にありて戀愛詩が大部分を占めたる丈ありて、長篇にもこの種に屬するもの甚だ多し。其中有名なるは、マーロー[1]作『ヒーロー、リアンダー』[2]沙翁作『ヴィナス、アドーニス』[3]ボーモント譯『サルメーシス、ヘルマフローディタス』[4]等是也。何れも戀愛の快樂的方面を歌ひ、甚だしく肉感的傾向を有せる個所あり。

戀愛詩

(1)Marlowe.
(2)Hero and Leander.
(3)Venus and Adonis.
(4)Beaumont.
(5)Salmacis and Hermaphroditus.

第二は歴史的詩篇也。英國が戰爭に勝ち、商業に勝ちて勢威の加はるに連れ、自國の歴史を尊重し、國粹を發揮せんことを欲する傾向大に加はり、かくして長篇の歴史的詩篇大に出てたり。此派の詩人中には左の三人を推す。曰くウィリアム・ウァーナー[6]、サミューエル・デーニエル[7]、マイケル・ドレートン[8]是れ也。ウァーナーの大著作を『アルビオンス・イングランド』[9]となす。一八八六年の出版にかゝる。十四シラブルの韻語を以て草せられたる英國史にして、滔々一萬餘行、大洪水に筆を起して、エリザベスの朝に達す。奇事稗談に充

(6)William Warner.
(7)Samuel Daniel.
(8)Michael Drayton.
(9)Albion's England.

哲學的詩篇

(1)Civil Wars of York and Lancaster.
(2)Baron's Wars.
(3)England's Heroical Epistles.
(4)Polyolbion.
(5)Davies.
(6)Greville.

ち、時に崇重、時に輕妙、概して興味あれば、當時にありては非常の愛讀を博しき。デーニエルは抒情詩人として又劇曲作者として名聲を博したるが、一五九五年『ヨーク、ランカスター內亂時代』[1]の著あり。半ば歷史の領分を犯したる詩篇にして、從つて散文的の弊を免れず。他の方面に現はれたるデーニエルの長技を認め難し。ドレイトン亦有名なる抒情詩人なるが、史詩に於ても比較的最も讀むべきものを作れり。『バロンス、ウォーアス』[2]『英國史上の信書』[3]を始め、其最大作『ポリオルビオン』[4]等の作あり。後者は三十卷、一萬六千行の大著述、英國の山川風物を歌ひ、所謂國自慢をなせるもの、當時國粹的精神のいかに發動しつゝありしかを見るに足る。

第三は哲學的詩篇是也。こは感情冷却して、理智の力發達せるエリザ朝末期の產物にして、デーヴィズ[5]、グレヴィル[6]等の作者をあぐべし。歷史的詩篇に比して、一層見るに足らず。

最後に飜譯詩を擧ぐべし。こはエリザ朝の初期より盛に出てたり。

飜譯詩

(1)Phaer.
(2)Virgil.
(3)Arthur Golding.
(4)Ovid.
(5)Harrington.
(6)Edward Fairfax.
(7)George Chapman.
(8)Homer.

一五六二年に出てたるフェール[1]のヴァージル[2]譯、一五六七年に出てたるアーサー・ゴールディング[3]のオヴィド[4]譯、等を初期に於て出てたる譯詩中の白眉とす。後年に於ても飜譯事業は繼續せられぬ。即ち一五九一年を以てジョン・ハリングトン[5]は、アリオストーの『オルランド、フューリオーソー』譯を出し、フェーアフ[6]ックスは一六〇〇年を以てタッソーの『デェルーサレム』譯を出し、ジョージ・チャプマン[7]は一五九八年よりホーマー[8]の全部譯を出版し始めたり。この最後の譯は最も貴重すべきものにして、譯者の元氣精神が其中に注入せられたれば、單に死せる譯詩にあらずして、半ば、エリザ朝の產物と見做し得べし。

（研究書目）

（一）スペンサー――の詩集は多くの書肆にて出版せられたり。
Complete Works of Spenser, edited by Morris (Macmillan).
Poems of Spenser (Scott). 等を初め他にも多し。

Faerie Queen, Book I, with notes, by Percival. (仝上)
Faerie Queen, designed chiefly for the use of schools (Clarendon).
Faerie Queen, with introduction, notes and glossary by Hill (Clive).
Shepherd's Calendar, edited by Herford (Macmillan).
評傳には
Spenser, by Church, E. M. L. Series (Macmillan).
On Chaucer and Spenser, in "English Poets," by Hazlitt (Bohn).
(11) 其他の作者——
The English Poets, by Ward, Vol. I. II. (Macmillan).
Chamber's Cyclopaedia of English Literature, Vol. I. (Chambers). 等に就きて見るべし。マーロー、沙翁等は戯曲の部を見よ。此時代の一般の評論歴史には
Elizabethan Literature, by Hazlitt. (クズリットの部を見よ)
A History of Elizabethan Literature, by Saintsbury (Macmillan). 等を見るべし。

(三) 散文

エリザベス朝初期の散文——盛期の散文——物語類——教訓的物語——リィリィ——冒險的物語——ナッシ——グリーン——宗教、哲學、歴史、批評其他實用的散文——(研究書目)

一五七九年スペンサーが『牧者の暦』を出したると同年を以てリィリィは『ユーフォイーズ物語』を出し、以て相幷び

エリザベス朝初期の散文

てエリザ朝の盛期に入れり。一五七九年以前は散文界に於ても、詩壇と同じく準備期に屬し、大に見るべき作出てず、たゞ各方面に於て活潑に後年の準備をなし、道路を開墾しつゝあるを見るのみ。極めて簡略に記述してやまむ。

最初に散文家として擧ぐべきは[1]ロヂャー・アスカム是也。其著『[2]學校教員』は教育を論じたる書にして、前後二部に分れ、前部は一般青年の教育法を論じ、後部は羅典語研究の捷徑を說きたるもの、文學的價値は少なし。

飜譯熟は、詩壇と同じく頗る旺盛にして、[3]シセロー、[4]デモスセニーズ、[5]プルュータァーク等は皆英譯せられぬ。就中[6]ノースのプルュータァーク譯が當代に與へたる影響は至大なるものにして、沙翁の如きこれを根據として『[7]シーザー』其他古代の史劇を作れり。

エリザベス朝の散文と同じく盛なりし詩壇に接して五十七年以前に生れ

(1)Roger Ascham.
(2)Schoolmaster.
(3)Cicero.
(4)Demosthenes.
(5)Plutarch.
(6)North.
(7)Caesar.

散文を以て草せる物語の流行は、この時代に入りて大に加はれり。英國古代の物語は鋭意蒐聚せられ、又以太利の物語類も飜譯せられて多く世に擴布せり。[1]ウィリアム・ペーンターの筆に成れる『娯樂の宮』[2]、[3]ジョージ・タァーバヴィルの筆に成れる韻文の『悲しき物語』其他尚ほ多し。又かの[5]サァンナァザァローの『アルケーディア』[6]、[7]モンドメーヨルの『ダイアナ』[8]、『アマディス・ド・ゴール』[9]等はシドニィの『アルケーディア』の模範となりしものにして、古典と同じく一般に、物語及び芝居などの材料を供給したり。

歴史、宗教の方面に於ても、散文は活潑に使用せられつゝありき。特に英譯の聖書が各家庭に入るに至れるは、この時期に於ける重要事件なりき。又ジョン・フォクスの『殉教者傳』[11]は文體簡易、興味豐富にして、無學なる農民に文學的趣味の何物たるやを注入するに大効を有しき。初期の散文は爰に筆を擱き、發達の順序として先づ物語類より說かんとす。

(1)William Painter.
(2)Palace of Pleasure.
(3)George Turbervile.
(4)Tragical Tales.
(5)Sannazaro.
(6)Arcadia.
(7)Montemayor.
(8)Diana.
(9)Amadis de Gaul.
(10)John Foxe.
(11)Book of Martyrs.

エリザベス朝の盛期を飾れる物語類は、十八世紀に入りて煥發せる小說の源泉にして、特に史的興味に於て深大也。さて當時の物語類は之を三種に區別すべし。(一)教訓的物語(二)田園的物語(三)冒險的物語、是也。

盛期の散文―物語類

(一)教訓的物語。此一派を代表する作者はジョン・リィリィにして、其作れる物語を『ユーフォイーズ物語』[1]といふ。此一書が其時代を動かしたる力は、寔に莫大なるものにして、今日より見れば、殆んど想像の外にあり。リィリィは一五五四年前後を以て生れ、牛津大學に學べり。大學在學中は才鋒の鋭發を以て鳴り、所謂大學七才人[2]の一人也。一五七五年頃より內裏の人となり、詩、劇曲、物語の類を作りしが、其名聲の中堅は『ユーフォイーズ物語』に存ず。此物語は前後二部に分れ、上篇は『エーフォイーズと英國』と題す。發行後二年にして六版を重ね、其後も屢々版を重ねたり。其出版當時の喝采は異數にして、貴婦人[3]內

(1)Euphues.
(2)Seven University Wits.
『ユーフォイーズ』は一時文界を風靡せり

『ユーフォイーズ』の特色は其異樣な詩的散文にる在り

裏人等なべて上流の人士は、皆之に向つて隨喜渦仰し、所謂ユーフォイーズ調の散文は一時全國を風靡するに至れり。

『ユーフォイーズ物語』は理想的紳士を描かんとしたる物語にして、主人公ユーフォイーズは才氣優秀なるアゼンスの一青年也。世情に通ぜんが爲めに最初は以太利チーブルスに赴き、次ぎて英國に赴き、其間に於て幾多の婦女と會して、之に戀着し、或は艶書を送り、或は直接に口說きぬ。其結構は甚だ單純にして、殆んど一部の物語と稱するに足らねど、元この物語の主要なる點は其結構の上に存せずして、其教訓的感想をば、一種異樣新なる詩的散文もて吐露せる所に存ず。實に變妙不可思議なるはリィリィの筆致にして、盛に對喩を用ゐ、類句を聯ね、時には頭韻をさへ使役して詩の區域を犯し、又希臘羅馬の故事を縱橫無碍に振り廻はせり。而して其言辭必らずしも正鵠を得ず。就中比喩的物體を羅列するに當りて盛んに突飛の言をなす。「最も綠なる草は常に最も大なる蛇を藏し、最も清き水は

リィリィの模倣者

(1)Thomas Lodge.
(2)Scilla's Metamorphosis.
(3)Phillis.

最も醜なる蟾蜍を隱し、最も美なる瓶は最も激しき毒を盛る」の如き意外の言句敢て珍らしとせず。但し全篇決してかゝる種類の文句のみに充ちたるにはあらず。時には華麗巧妙を極めたる個所もあり。之を要するに『ユーフォイーズ』は、變體の物語にして、內容よりも寧ろ專ら文體に苦心し、冗漫不自然、到底散文として感服すべきものにはあらねど、突飛なるエリザベス女王の內裏をさながらに反映せしめたるものとして、長く其位置を失はざるべき也。

リィリィの成效は幾多の模倣者を輩出せしめ、教訓的物語は踵を接して出でたり。ロッヂ、グリーン、リッチ、フォード、ムンディ、ディッケンスン等を此派の作者中の重もなるものとす。トマス・ロッヂは七大學才人の一人也。一五六二年を以て生れ、牛津大學に入學して法律を專攻せしが、文學熱に浮かされて、終に文學を以て本業となすに至れり。初めは劇曲を草せしも多くは成效せず。詩集『シーラのメタモルフォーシス』[2]『フィリス』[3]等を出すに及びて初めて

(1)Rosalynde.
(2)As you like it.
(3)Robert Greene.
(4)Menaphon.
(5)Perimedes.
(6)Pandosto.
(7)Winter's Tale.

名聲を博せり。又其物語の傑作『[1]ロザリンド』を出せるは一五九〇年の事にして、これ又大に喝采せられたり。『ロザリンド』は、リィリィの筆を模したるも、其結構は遙かに『ユーファイーズ』にまさり、又其文辭も不自然ながらリィリィ程には突飛ならざりき。沙翁がこの物語を土臺として『[2]御意のまゝ』の篇を草せるを見ても、其取るべき點あるを知るべき也。[3]ロバート・グリーンも同じく大學才人の一人にして劇曲作者及び物語作者として、注意すべき人物也。渠が學びたるは劍橋大學にして、其後大陸諸國を旅行し、一五八〇年前後に歸國し、爾來文學に從事して、甚だ不規則なる生活を送れり。一五九二年窮乏の裡に死せり。戯曲作家としてのグリーンは別に說かむ。爰には單に其物語につきて一言せむ。渠の作れる物語中最も貴重なるものは『[4]メナフォン』『[5]ペリミーディーズ』及び『[6]パンドストー』是也。就中『パンドストー』は沙翁が『[7]冬物語』の原本として知られ、非常に世人の愛讀する所となり、二種の佛語譯さへ現はれたり。今日に於ても、當時の劇曲作者に通有なりし傳奇的作風を伺ふの料として最も興味あり。渠は又時事的論文を草し、小冊子(パンフレット)として之を出版し、當時の人情、風俗の弱所を摘出したり。[1]バァーナビー・リッチの作には『[2]ドン・サイモニディーズ』『[3]アポローニアス、シラ物語』あり。後者は沙翁の劇曲『[4]十二夜』の原本也。[5]エマニュエル・フォードの作には『[6]パリスムス』『[7]モンテリオン』あり。皆當時にありて大賞贊を博せり。但し今日の人士の眼には、幼稚にして不自然の觀あるを免れざるもの多く、多大の感興は見出し難し。

(一)　田園的物語　：こは田園的詩歌が一般の流行となりたる頃の產物也。之を代表するものは、[8]フィリップ・シドニィの『[9]アルケーディア』是也。アルケーディアは南部希臘の一山村也。此地の住民は大古の質朴なる狀態をさながらに保存し、平生學ぶ所は獨り音樂のみ。世にも大平の別天地也。殊に大平を樂むものは其地の牧羊者にして、思ひの儘に天眞を露出し、歌を歌ひ、戀に耽り、側ら羊群の監督をな

(1)Barnabe Rich.
(2)Don Simonides.
(3)Apollonius and Silla.
(4)Twelfth Night.
(5)Emanuel Ford.
(6)Parismus.
(7)Montelion.
(8)Philip Sydney.
(9)Arcadia.

すを本務とす。希臘羅馬の詩人等は此アルケーディアの別天地に向つて頻りに景慕の念を寄せ、其生活を寫し出てゝ、人爲的なる都會の生活に對照するを好みき。ヴァージル[1]、シオクリタス[2]の如き是也。これ所謂田園的詩歌若くは物語の濫觴也。今シドニィの『アルケーディア』は、其題名を見たるのみにても明亮なるが如く、是等作者の餘流を汲める田園的物語なるが、たゞ渠は、同時に武士道の皷吹につとめ、巧みに兩者を合併せり。されば此の物語は、他面より見れば、エリザベス朝の物語にして、牧笛の吹奏をきく傍には英國的決鬪あり。地は閑靜なる田園にてありながら巍々たる宮殿樓閣の聳ゆるを見る等、頗る奇構に充つ。此物語にて取るべき點は、戀愛の描寫、及び人情の解剖の緻密なる所に存ず。少女パミーラ[3]の優さしき戀、老國主バシリアス[4]の卑野なる痴情、女王ジェイニィシア[5]の横戀慕等よく區別して描破され、後年の心理的小說の先鋒たり。パミーラの名は、後年リチャルドスン[6]が借りて其處女作の主人公となしたるも

(1)Virgil.
(2)Theocritus.
(3)Pamela.
(4)Basilius.
(5)Gynecia.
(6)Richardson.

のにして、人情の描寫に於て、大に『アルケーディア』に學ぶ所ありしものゝ如し。但し『アルケーディア』の文體も、リィリィの文體と同じく一種の不自然に陷り、辭句の駢弄、文字の駢列等に累せられて、散文としては甚だしく奇怪也。且つ其甚だしく冗長なるは、到底今日の人士をして興味を以て通讀する能はざらしむ。

（三）冒險的物語　冒險的物語とは通例一人稱を以て或る冒險的人物の一生の浮沈をのべたる物語を指す。かゝる種類の物語は又ピカレスク體物語として知らる。西班牙語のピカロ[2]は惡漢の義也。十六世紀の西班牙は、米國發見以來日尙ほ淺く、從つて冒險家の需要甚だ多大にして、よしや惡漢にても、若し才力あり、元氣ありて、生死の巷に出入するを辭せざる程のものは大に寵用せられ、爲めに山賊的無賴漢も時に將帥の地位にのぼり、無學文盲の匹夫も往々顯榮の境遇に達することを得ぬ。されば、苟くも一と癖ある壯丁は、蟻の甘きに就くが如く、相率ゐて眼をこの方面に轉じぬ。たゞかゝる

(1)Picaresque Romance.
(2)Picaro.

物共の常態として、得意の地にあると大抵久しからず、槿花一朝の榮華を盡したる後は、再び元の默阿彌となり、榮枯盛衰の變殊に激烈にして、其一生の歷史は頗る小說的色彩を帶ぶ。西班牙の文士は爰に着眼し、かゝる惡漢を主人公とし、其一生の冒險と浮沈との次第を寫實的に描き、側ら社會の弊害と缺點を諷刺せり。一五五三年に出でたる『ラァザァリィリュー・デ・トールメス』と稱する物語は、即ち西班牙に於けるピカレスク體物語の嚆矢にして、爾來同種の物語は陸續として出でたり。是等はいつしか英國にも輸入せられ、かくて此派に屬する作者を生むに至れり。ピカレスク體物語の代表者をトマス・ナッシとなす。

ナッシは一五六七年を以て生れ、一五八二年給費生（シザール）として劍橋大學に學べり。かくて八九年には龍動に出でゝグリーン等と共に操觚者の群に入りぬ。渠は劇曲にも筆をとり、又詩人としても妙技を有せしが、其最も得意なるは散文に在り。機智横溢、才思縱横、眼光

(1)Lazarillo de Tormes
(2)Thomas Nash.

ナッシは散文の物語作者として非凡の手腕を有せり

炬の如く、事物の眞相を洞察せずんば止まず。一五九三年に出せる『耶蘇の涙』は當時の龍動の弊所を撥きて鋭利骨を刺す。九五年には『無一文のピールズ』を出し、高利を貸し、殺人をなし、酒色に耽溺せる惡物を描き、生氣紙背に溢る。是等はナッシの筆致を伺ふには恰好の作なれど、一部の物語として見れば甚だ散漫に過ぐ。眞に物語の體をなせるは一五九四年に出せる『デャック・ウィルトンの傳』是也。一人稱を以て記錄體にものせる冒險少年デャックの物語にして、歐洲歷遊中、あらゆる惡戲をはたらき、無數の冒險に出遇ひ、最後に得意の境に達して英國に歸る。慘憺たる悲劇あり、噴飯すべき笑話あり、諸外國の風物は寫實的筆致もて寫し出され、シドニィ、リィリィ等の作に見るが如き不自然的器械的の弊なく、興味甚だ深し。たゞ卑野の分子を含めるを缺點とす。この模倣者と見るべきは多けれど、十六七世紀の間には取るべき作なし。十八世紀の文壇に於て、初めてナッシの植ゑたる種子は發育し、デフォー、スモレッ

(1)Christ's Tears over Jerusalem.
(2)Pierce Penniless.
(3)Jack Wilton.
(4)Defoe.
(5)Smollett.

トの諸作をなせり。

宗教、哲學等の方面に於てもエリザ朝は偉人を出し、殊にベーコンの大名は千古に輝く所、渠は實に英國が生みたる大思想家の中の一人たり。然れども、彼等の散文は寧ろ實用的にして、純文學の方面には頗る緣故の薄きを免れず。余は是等に向つて充分筆を費す能はず。

宗教、哲學、其他實用散文

(一) 哲學的散文　この方面の代表者は言ふ迄もなくフランシス・ベーコン是也。ベーコンの學識才力は萬人に秀て、沙翁をのぞけば、當代第一の偉人なりきといへとも、渠が英文學史上に籍を有し得たるは、眞に偶然にして、彼自身の毫も待期せざる所なりき。渠は母國の言語に對する尊信の念慮薄く、英語を以て草したる書物は、到底世界の文界に立ちて、永久の命脈を保持し難しと信じぬ。されば其心血を傾注したる大著述は悉く羅典語を以て草され、一坦英語を以て書きたる『學藝の進歩』の如きは、再び之を羅典語に譯するに

(1)Francis Bacon.
(2)Advancement of Learning.

至れり。されば、ベーコンが英文の著述は、僅かに、『學藝の進歩』の原本と、『ヘンリィ七世史』『ニュー、アトランティス』及び『論文集』あるのみ。『學藝の進歩』は渠が得意の實驗科學に就きて論述したるものなるが、急遽に筆を走したる痕跡あり、所論緊肅を缺きたるを以て、今日讀むもの少なし。『ニュー、アトランティス』は、モーアの『ユートピア』に類似したる、一種の寓言的物語にして、多少人の注意をひかざるにあらず。然れども、今日學者机頭の珍として愛讀さるゝものは、極めて不用意の間に成りたる其『論文集』是也。この論文集は言はゞベーコンの覺書とも言ふべく、諸種の大問題の要點を最も明快に、最も不用意に摘錄せるもの、簡淨勁拔、何等無用の裝飾なく、一句の裡に往々千萬無量の深意を寓し、寸鐵人を刺す妙あり。當時の冗長萎弱なる散文とは全く選を異にす。この論文集が初めて出版されたるは一五九七年にして、此時は僅かに十篇の小品文を含めるに過ぎざりしが、一六二五年第三版を出すに當りては、

(1)History of Henry VII.
(2)New Atlantis.
(3)Essays.

ベーコンの著作は羅典語の大部に成れり

(1)Richard Hooker.
(2)The Laws of Ecclesiastical Polity.
(3)The Defence of Poesie.

充分の改訂增補を加へ、長短五十八篇の多きに及べり。

（二）宗教的散文　この方面にありてはリチャルド・フッカーを第一とす。一五九四年を以て其大作『教會法』の最初四卷を出し、それより時期をおきて尙ほ殘る四卷を公にせり。過激なる清教徒に對する辯妄の文にして、其中最初の二三卷は殊に優れ、宇宙の大綱を論じて所論多く的確、獨り神學上のみならず、倫理又は政治の方面にも有力なる典據たり。其文體は莊重にして明晰、時に飾るに詩語を以てし、氣昂がれば朗々として珠を盤上に轉ばすが如し。其推論の方法も亦論理的にして一絲紊れず、よく其言はんと欲する所を言ふ。されば實用的散文家として、フッカーは、英國が最初に生みたる大作家の一人たり。」

（三）文學的評論　『アルケーディア』の著者なるフィリップ・シドニィは又文學的評論家として先鞭を着けたり。渠が一五八一年を以て草したる『詩辨』は實に此種の述作中の錚々たるもの也。元來エリザベス朝は、豪華を喜び、風流の遊びに耽り、萬づ肉感的快樂に憂身をやつせる時代なるが、滿つれば缺くる習にて、其反動として爰に極端なる淸教徒を生み、以て次ぎの時代に及びて激烈なる爭鬪を惹起すの機運を胚胎せり。是等の淸教徒は極めて悲觀的の偏見を抱きて、すべての快樂を排斥し、詩歌戲曲の類は無用の長物、亡國の源因として、極力罵倒するに躊躇せざりき。シドニィ詩人の一人として、之が辯護に出でたるものを、『詩辨』の一篇とす。この篇の長所は、論理の精確なる點に存せず、其飽まで尊奉する所の詩歌に對し、滿腔の敬意と熱心とを捧げて情想を披瀝せる點にありて存ず。『詩辨』は決して冷枯なる議論文にあらずして、血あり熱ある抒情文也。散文の詩也。シドニィの議論中最も正鵠を失したるは、其劇曲論にして、喜劇的分子と悲劇的分子とを兼ね有せる英國劇をば大に貶せり。これ古典の劇曲に拘泥し過ぎたれば也。文體は『アルケーディア』より遙かに簡明、散文として大に進歩せるもの也。

『詩辨』とは如何なる書ぞ

(1)William Webbe.
(2)Discourse of English Poesie.
(3)George Puttenham.
(4)Art of English Poesie.
(5)Discovery of Guiana.
(6)Hakluyt.
(7)Principal Navigation, Voyages, and Discoveries made by the English Nation.
(8)Coryat.
(9)Sandys.
(10)Camden.
(11)Spelman.
(12)Selden.(以下次頁)

シドニィが此方面に開拓の手を入れてより、同種のもの次第に出でたり。一五八六年に出版せられたるウィリアム・ウェッブの『英詩評論』[1]さてば一五八九年に出でたるジョージ・プッテンハムの『英國詩學』[2]等是也。是等も亦シドニィと同じく古典の規則になづみ、三一致を主張し、悲喜劇の混淆を難じたり。是等は幸に沙翁を初め有力なる當時の劇曲作者の顧る所とならざりき。

（四）旅行記類　旅行探檢熾んに行はれたる時代の事とて、旅行記類頗る多し。ラァリィの『ギィアナ發見』[5]ハックルートの『英國民の航海、探檢』[7]コリアットの大陸旅行記、[8]サンディスの東方旅行譚等をはじめ、其他枚擧に遑あらず。

（五）歴史類　ベーコンの史筆の外にカムデン、[10]スペルマン、[11]セルデン、[12]スピード、[13]等の諸作家は頻りに古代の史料を蒐聚するに盡力し、又ノルズ[14]は土耳其史を草し、ラァリィは浩瀚の世界史を草しぬ。

（六）聖書の國定　最後に注意せざるべからざるを聖書の國定とす。

(13)Speed.
(14)Knolles.
(1)Tyndal.
(2)Lancelot Andrewes.

一六〇六年委員を集めて、從來の飜譯、殊にティンダルの譯を根據とし、徹頭徹尾修正を加へしめ、一六一一年に至りて全く成れり。委員長はウィンチェスターの僧正ランセロット・アンドリューズと稱する當時の碩學なりき。

（研究書目）

Schoolmaster, by Ascham (Bohn.)
Euphues, by Lyly (Constable.)
Arcadia, by Sidney (Scribner.)
Rosalynde, by Lodge (Cassel, Newnes.)
Menaphon, by Green (Constable.)
Pandosto, by Green (Huth.)
Jack Wilton, by Nash (Chiswick Press.)
Essays of Bacon (Chambers, Routledge, Macmillan, Scott., Ginn, &c.)
Advancement of Learning (Clarendon, Macmillan, Ginn, &c.)
New Atlantis (Mac., Ward, &c.)
Ecclesiastical Polity, by Hooker (Clarendon, Mac., &c.)
The Defence of Poesie, by Sydney (Ginn.)
The Art of English Poesie, by Puttenham (Constable.)

又拔萃にては
English Writers, by Morley, Vol. IX. X. XI. (Cassel.)
Cyclopaedia of English Literature Vol. I. (Chambers.)
傳記類にては
Sydney, by Symonds, E. M. L. Series (Mac.)
Bacon, by Church, E. M. L. Series. (仝上)

(四) 沙翁以前の劇壇

戯曲の發生——宗教劇——教訓劇——道化劇——正劇の第一期——正劇の第二期——大學セオ人——マアロー——其傑作——リィリィ——キッド——ピール——グリーン——(研究書目)

エリザベス朝劇壇の盛觀は實に世界に冠絶し、古今を空ふす。沙翁をのぞくも、以て佛蘭西、西班牙、獨逸の劇壇と相角逐するに足る。況んやこの偉人を加ふるに於てをや。此エリザ朝の大戯曲が、いかなる順序を經て發生し來れるかを見むは、甚だ興味ある問題也。

英國の戯曲は、其根本を尋ぬれば、宗教と相聯關して發達したり。

英國の戯曲は宗教と關係して發達せり

戯曲の發生

蓋し中世の僧侶輩は、如何なる方法を以てせば、容易に耶蘇教の教理、傳說等をば、一般の人民に知らしめ得べきかを攻究し、是に於て、使徒に關する物語、其他聖書中の事實をば材料として演劇に仕組みぬ。勿論最初の中は、舞臺には寺院を使用し、又役者には寺院附屬の僧侶又は小吏の類を使用せり。されど演劇の脚色、裝置等次第に複雜に赴き、又興行の度數頻繁なるに至りては、寺院を使用せんは大に不便なるを免る能はず。又人員の上に於ても費用の點に於ても、單に寺院にて負擔すべきにあらざるを以て、いつしか普通人民の助力を借るに至れり。かくて一二六二年頃には、是等の興行は全然僧侶の手を離れ、都邑の組合にて負擔する事となり、從つて之を專業とする所の俳優をも生ずるに至りぬ。扨正劇の發生以前に於て、是等の演劇的興行は、大體に於て三大變遷を經たり。(一) 宗教劇 (二) 教訓劇 (三) 道化劇、是也。

(一) 宗教劇　宗教劇は演劇的興行中最古のものにして、詳く言へ

(1)Mystery.
(2)Miracle Play.
(3)York.
(4)Wakefield.
(5)Chester.
(6)Coventry.
(7)St. Albans.

ば二種に分つべし。舊約全書中の事件、殊に人間の墮落、贖罪等を仕組めるものは之を神秘劇と稱し、使徒の傳說を仕組めるものを、奇蹟劇と稱す。されど英國にては、この區別は明亮ならず、凡ての宗教劇を指して奇蹟劇ともいふが如し。十三世紀より十四世紀にかけてはこの種の興行非常の盛況に達し、英國中やゝ重立ちたる市邑は、聖餐祭の日に宗教劇を興行せざるものなく、短きは一日、長きは七八日に亘れり。就中宗教劇の大中心と稱すべきは、ヨーク、ウェークウィールド、チェスター、コヴェントリィの四市にして、各自脚本を所有し、今日に殘存するものゝみにても百有餘篇に上ぼれり。その散失せるものに至りては蓋し之に數倍せり。好評を博したる脚本は、諸所を打つて廻はり、諸侯の居城にも、又內裏にも入りぬ。中に又諸侯伯御抱の法教師の手に成れる脚本ありき。內裏に於ても、御用の俳優と舞臺とを有せり。一一一〇年セーント・オールバンズに於て、神秘劇が初めて興行されしより、一五八〇年コヴェントリィに於て最後に奇蹟劇が興行されたる迄、宗教劇の英國に流行したる事、前後實に五百年の久しきに亘れり。

是等の宗教劇は、寺院の保護と都邑の助力とを受けたるが故に、其舞臺の裝置、衣服の材料等は、沙翁時代の正劇に比して遙かに優りき。されど趣味の點より言へば概して幼稚にして半野蠻の空氣に充ち、一笑に値せざる事多かりき。例へば神として現はるゝ人物が、面貌を塗抹するに金箔を以てし、使徒は金色の髭髯を有し、天使は羽翼を附け、青色の衣服を纏ひ、梯子を上下して、以て天國と下界との間を飛行するの意を表はし、又其用語の如き往々卑野にして片腹痛き事多く、アダムとイーブとに扮せる男女は、赤裸々のまゝにて舞臺に登り、恬として羞耻の色を示さゞるを誇り、又ノーアが其妻と夫婦喧嘩を始むるや、互に相搏擊して亂痴戲騷動を演する等、幼稚なる中世の社會は、さながらに舞臺の上に映出せり。されば一方に是等の宗教劇は、史料として大に參考の價値を有す。

宗教劇は重に聖餐祭、耶蘇降誕祭、復活祭等の大祭に際して、興行されしが、かゝる種類の興行物は次第に流行して其範圍を擴め、他の祭日にも擧行さるゝに至れり。是等は宗教上の方便としてよりは、寧ろ單に娯樂の爲めに行はるゝものなりければ、大に世間的に傾き俗受けを力めぬ。例へば、五月朔日には[1]ロビン・フッドの芝居を演し、セーント・ジョン祭には『セーント・ジョン』[3]『お通夜』[4]等の芝居を演ぜるが如き是也。又奇蹟劇中の滑稽なる部分のみが、他と分離されて興行せられし事もありき。『サイリズ媼』[5]の如き是也。

（二）教訓劇　教訓劇は、十四世紀エドワード三世の時に至りて、初めて世に出てたり。抽象的性質、例へば智識、意志、清淨、希望、節儉、善行、死等をば人物として現はして粗雜なる一篇の物語を仕組み、最後に於ては常に善の勝利に歸せしめて、以て勸懲の意を寓したるもの比々皆然り。沙翁其他、後年の正劇に於て見る所の[7]痴者の役は、即ち教訓劇の惡に扮せる人物より脱化せるもの也。要する

(1)May Day.
(2)Robin Hood.
(3)Play of St. John.
(4)Play of the Wake.
(5)Dame Siriz.
(6)Morality.
(7)Fool.

に教訓劇を以て之を宗教劇に比すれば、遙かに正劇に接近し、粗末ながらも趣向を構へ、互に關係せる諸種の人物を舞臺に登すが故に、正劇と相距る事僅かに一歩の所に在り。されば教訓劇は、エリザ朝の末期に至る迄命脈を依持したり。教訓劇中の或物にては、時に歴史上知名の人物を借りて善惡を代表せしめたるものあり。例へば、アリスタイディーズ[1]を以て正義を代表せしめたるの類是也。後年宗教改革の論爭猛烈なるや、兩派の人士は、味方の應援の爲めに各々教訓劇をものし、譬喩的人物の衣裳の下に、兩派に關係ある實地の人物を現はしたり。是に至りて教訓劇は一時非常に勢力あるものとなりき。

（三）道化劇　上にのべたる教訓劇は、通常皆長篇にして、單調なるが多く、やゝもすれば觀客の欠呻を招き易きが故に、其幕間に短篇の滑稽物を演じたり。これ[2]道化劇の濫觴也。道化劇に至りて、演劇は益々世間的となれり。この派の作者中一歩を進めたる作者は[3]ジョ

(1)Aristides.
(2)Interludes.
(3)John Heywood.